

石垣調査報告書

— 史跡松江城 —

平成8年3月

松江市教育委員会

石垣調査報告書

— 史跡松江城 —

平成8年3月

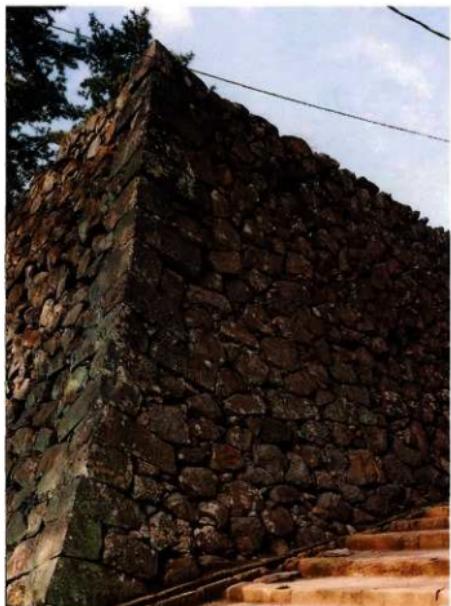
松江市教育委員会



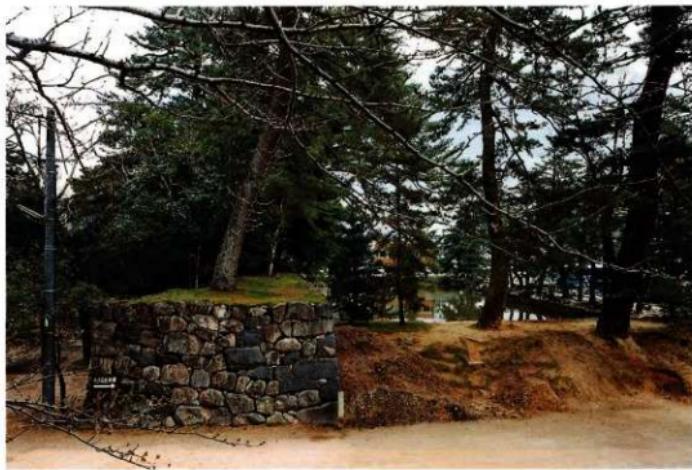
二之丸高石垣



二之丸下ノ段堀石垣



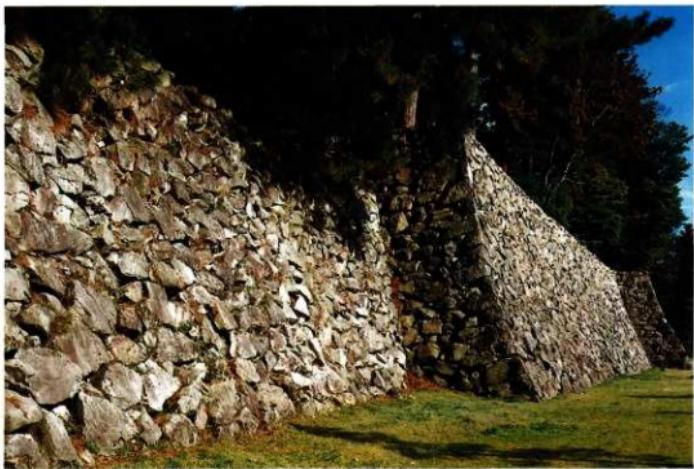
二之丸离石垣角石積



馬溜大手門脇石垣



二之丸高石垣（馬溜側）



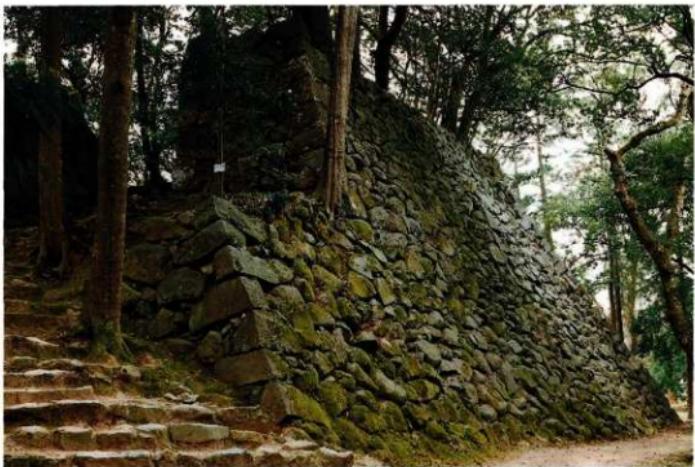
中曲輪高石垣



水ノ手門虎口石垣



本丸北側高石垣



水ノ手門虎口高石垣



二之丸西侧虎口石垣



本丸高石垣（東側）



本丸高石垣（北側）



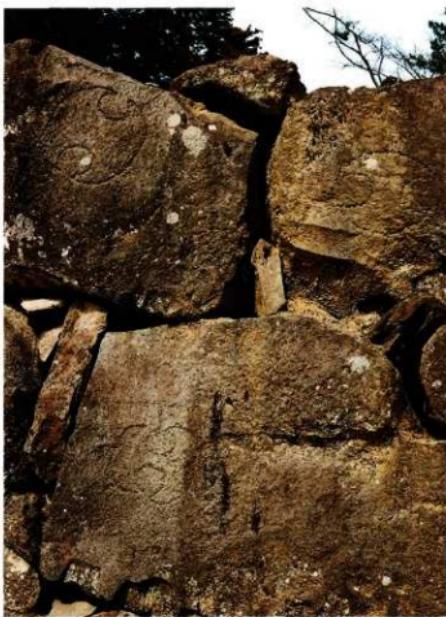
本丸高石垣



中曲輪石垣



天守閣石垣（重文）



石垣石材刻印

序 文

文明開花間もない明治の中頃、英語教師として松江に赴任したラフカディオ・ハーンは、いまだ城下町の面影をよく残していた松江地方を神國の首都と称し、美しい風土や素朴な人情に強くひかれ、その著作を通じて松江を広く全世界に紹介しました。

ハーンが愛した松江の象徴は、なんといっても松江城であります。いまや、国際文化観光都市松江の代表的な観光地として、また、都市公園として市民はもとより内外からも多くの観光客が訪れ親しまれています。

松江城は江戸時代の初め慶長16年（1611）に、岡ヶ原の合戦に功があった畠尾吉晴によって築かれた平山城で、本丸に五層六階の威風堂々たる天守閣を現存し、曲輪、石垣、内堀などの城郭造構をよく残しております。本市では史跡の保護と活用を図る上から、これまで城内各所において環境整備や修理を行ってきましたが、平成3年度において、文化庁のご指導のもと、史跡松江城石垣調査委員会を開催し石垣の専門家による現地調査と石垣の破損状況、絵図・文献などによる史料的な検討を行いました。

その後も、石垣自体の崩落の危険性だけの問題ではなく、現存する石垣の時期や改変の歴史、破損の原因やその修復方法、石垣調査の方法や石材加工調査まで時期変遷を含めた史跡文化財としての検討も重ねてきたところです。

本市では、このような基本的調査に基づき、危険個所については年次計画的に石垣修理を行っていくと共に、石垣周辺に所在した橋や門、堀についても江戸期の古絵図や文献史料、古写真、発掘調査の成果に基づき可能な限り復元し、より一層史跡としての風格を高めていきたいと考えております。

ここに、今後の事業を進めていく上で具体的な石垣調査の概要をとりまとめましたので、ご高覧いただき、城郭整備の参考にしていただければ幸いです。

なお、本書をまとめるにあたりまして種々ご指導・ご協力をいただきました文化庁、及び島根県教育委員会の関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

松江市長 宮 岡 寿 雄

例　　言

1. 本書は城郭石垣の破損と改修について、その調査内容や施工方法、松江城史料や調査結果に基づき報告したものである。
1. 本書は平成7年度国庫補助事業として実施、まとめたものである。
1. 本書の作成には、史跡松江城石垣調査委員会、文化庁文化財保護部記念物課、鳥根県教育委員会文化財課等の指導を受け、(株)文化財保存計画協会に編集作成委託したものである。
1. 本書に使用した絵図、史料等のオリジナルや発掘調査等写真や文章は松江市教育委員会が提出し、その他写真や図などは(株)文化財保存計画協会が作成した。
1. 本書の編集は(株)文化財保存計画協会が行った。

目 次

第1章 石垣修理計画要項	
1-1. 本調査報告書の目的	1
1-2. 石垣修理の基礎調査	2
1-3. 城石垣と石垣調査の検討	10
第2章 松江城の概要	
2-1. 松江城跡の概要	13
2-2. 史跡の現況	15
2-3. 整備経過	21
2-4. 発掘等調査結果	27
2-5. 石垣修理経過	33
第3章 石垣の特徴と規模	
3-1. 石垣石積の特徴	36
3-2. 石垣の規模	46
第4章 石垣の文献史料による分析	
4-1. 文献絵図の分析	53
4-2. 範張による石垣の変遷	74
第5章 破損箇所の抽出	
5-1. 破損原因の考察	86
5-2. 文献史料による考察	91
5-3. 石垣破損箇所の抽出	96
第6章 修理の検討と工事計画	
6-1. 石垣修理の検討	104
6-2. 修理規模の検討	118
6-3. 石垣工事計画	121
第7章 事業計画及び実施	
7-1. 全体事業計画	130
7-2. 平成7年度保存修復事業	137
7-3. 平成7年度発掘調査結果と考察	139
7-4. 保存修理工事	154

第1章 石垣修理計画要項

— 1-1. 本調査報告書の目的

— 1-2. 石垣修理の基礎調査

— 1-3. 城石垣と石垣調査の検討

1-1. 本調査報告書の目的

史跡松江城石垣修理については、昭和30年以降、破損・崩落による部分的な保存修理事業が実施されるようになり、近年、より大きな規模での破損や崩落の危険性が指摘されるようになっていた。松江城自体、最大の観光地であることが石垣の崩落の危険性をより指摘されることもあった。しかし一方では堀尾氏による江戸期以来多くの改修や改変が残存する城石垣の石積様式（石積法）にも窺われ、史跡文化財としての保存や修理の範囲について調査・研究がより詳細になされることが重要とされた。

平成3年度以降、「史跡松江城石垣調査委員会」を発足し、根本的な石垣破損の問題、現象面で顕われる石垣変形のみならず破損原因の問題や石垣自体の築造時期、破損箇所等の改修記録や史料調査、石積や石組方法を詳細調査を報告することにより、より破損原因となる要因を抽出することが可能であることを窺い知る結果となった。

石垣破損の原因が後の改修や改修が石垣自体の変形や変位を助成しているような結果が多分に見られ、その改修時期が大きな解明の課題となつた。史料や記録に遺る石垣改修箇所もあるが、そのほとんどの改修や積み直しの痕跡は、一様な史料絵図に記載されることなく、石垣の一部や全てについて見られるものである。

このような現存する石垣の状況から各石垣個々について築造時期や改修記録の調査方法、逆に史料的に見出しができない石垣積み替えはどのような調査方法が現状で適切か、石積の様式や加工程度を含めた調査内容の検討となつた（1-2. 石垣修理の基礎調査）。

発掘調査で調査検討する調査内容、石組や石垣表の込石や鉄石、裏込の施工や裏盛土の施工状況、水路や排水の方法など史料的に見い出せない項目についての事前及び解体工事中の調査方法について石垣展開の図化作業や石垣の横断測量による調査方法など、より詳細に検討されることとなつた。

本報告書史跡松江城の破損等石垣調査については、現状での目視による石垣（石積法や石材）調査内容、歴史・史料の分析、破損原因の考察、修理方法の検討と保存修理等事業とする時の調査や工事課題の検討を列記し、平成7年度保存修理事業での調査結果による絵図史料等の比較検討及び石垣修理工事を掲載した。

1-2. 石垣修理の基礎調査

石垣修理は、国の指定史跡に限らず全国で行われている。しかし全体的な石垣の調査が行われず、石垣のはらみが大きく危険度が大きい所での応急的、部分的な修理が行われる例が多い。

石垣修理はその石垣の構築時期、改修時期など調べ、その技術的・個別の特色を把握し、石垣編年地図を作成し、どの部分の石垣の残存状況が良く、その石積の時代的・意匠的な特色を示しているなどを把握し、修理方針を決めるべきで、全体的な調査なしに修理を急ぐべきではない。また石垣修理は、その伝統的な技術者の不足や、石材の供給等の問題を含め、未解決な問題が多い現状で、厳正な旧来通りの修復が困難であることも考え、修復前の基礎的な全体の調査が必要である。

石垣調査としては、残存状況調査、石材調査、石積法の調査、発掘調査、歴史調査に分かれ、これらの総合的調査に基にその特色を知り、修理方針・方法を検討すべきである。

1) 残存状況調査

石垣の復元修復の範囲や施工箇所と工事方針を決める調査で、破損状況調査と破損要因調査がある。



◆破損箇所チェックリスト(例)

箇 所	石 積 み	年 代	破 損 ・ 原 因	修 理 方 法
天守曲輪	野面 一切石	築城期	孕み出し、樹木根	解体箇所
	コンクリート	近代	落下・消失	積み直し・復元

2) 石材調査

石材調査は石材による石垣の特色を把握する質的な調査と、石材の選定・確保を図るための量的な調査がある。

a. 規格・形状

規格化 … 自然石→自然石半削石→雑剝石→割石→切石

大きさ … 最大、表面(石面)、控え

b. 加工度

野面→粗削→粗加工→精加工→ノミ使用→矢穴

c. 質的調査

石質、組織、組成

・強度・風化・焼け石・クラック状況

d. 量的調査

採石場、石山、探査供給量

補石材、補充材…崩壊石の残存状況

◆石材調査チェックリスト(石質等例)

石質	加工(矢穴)	細加工	規格	产地
花崗岩 野面		ノミ		
安山岩 割石 切石				

◆石材調査チェックリスト(箇々の石材について)

高さ	番号	表面				裏面	接長	产地名	再用可
		縦径	横径	縦径	横径				
0~1m	22	280mm	500mm	350mm	500mm	—	700mm	河内	—

3) 石積法

石積法として、まず石垣の造成時の石積残存はどの位か、積み直しが有るかどうか、また積み直しの時期は何時か、積み直し回数、石垣部位での特色などを調査し、造成時の石垣がどの位残っているか、どの時点で修復するかなどの方針を決定する調査である。

a. 用材方式 —— 野面

(加工技術) | 削石
——一切石

b. 構築方式 —— 整層

| 亂層
特殊—鏡積み・巻石積み

c. 石垣部位 —— 隅角部 — 出角 算木・シノギ

—入角

築石部

階段部

d. 構 造 平面 輪取り (糸巻き)

立面 石垣高

天端 気勢 (たるみ)

詰石・要石・鏡石

目地通り

断面 合石

合端

裏込め 裏栗石・裏土・地山

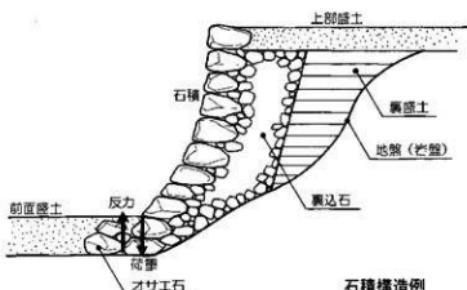
勾配

反り

介石

始築時 (造成時) の石積

積み直し 有無、時期



《角石積の変化》



本丸東側石垣角（自然石に近い）



中曲輪石垣角（削石）



二之丸高石垣（削石加工）

◆石垣調査表チェックリスト（石垣箇所別）

石材 形 状	大きさ	角 石	築石(平石)	勾 配	反 り	年代 (城上)
自然石	不揃い	算木未使用	乱石	緩い	直線	
半割り	少	少	整層崩し	少	少	
割石	少	少	整層状	少	少	
間知石	規格化	算木加工	整層 谷積	急	反り	

◆石垣高さの変遷チェックリスト（例）

石垣	正保年間絵図	○○○城縄張図	○○○城測量図	現況
No.1断面	三間五尺	三間五尺	三間二尺	三間五尺



「御城内惣間数」に記載された建物規模と石垣規模

4) 発掘調査

発掘調査は、石垣修理前または修理と平行して行うものがある。修理前の調査としては、石垣の基盤が岩盤の上かまたは犬走りや、控えの石垣や押さえ盛土が存在するか、基礎地業が根石・枕木・胴木・土台木・桟木など石垣の基礎が安定した条件の上に設定されているかなどの調査がある。

石垣修理に際して、修理工事で破壊される石垣上面の発掘調査が必要となる。また解体修理にあわせての発掘調査では、城及び石垣内の排水施設、排水方向、現在の機能の有無などの調査や、石垣背面の状況、特に介石（胴介石・船介石）の状況や、裏込石の厚さ・大きさ・詰め方等を明確にする調査が必要である。特に裏込の施工で、正面から不明な積み替え等を確認する必要がある。

また解体の際に裏側から新たに石積が検出される場合もあり、城の作り替え、設計変更、補強のためなどの検討が必要であり、遺構の保存・養生の仕方も合わせて検討する必要がある。

石垣の基盤

石垣の基礎事業 根石、土台木

石垣背面の状況 崩壊、整地 裏石垣

裏栗の状況 裏栗石の特色・状況

排水施設 城内の排水・石垣内排水・排水口

— 平面調査 解体部の遺構

〈発掘調査〉



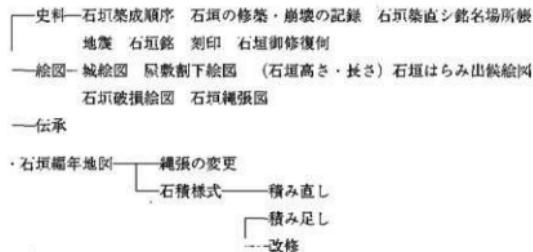
石垣上部に敷詰られた丸片



石垣内部から検出された排水暗渠石組

5) 歴史調査

歴史調査では史料・絵図・伝承などの調査がある。史料調査では、地震や石垣の修築・崩壊の記録を公務日記・町方資料・皆請仕様・幕府隠密記録などによる記録や、石垣に刻まれた修復年代銘・刻印・刻紋などにより、石垣築成順序や修理年代などを明確にする。絵図の調査では、城塙図・屋敷割図などで石垣の存在、施工状況、年代別の変遷などを明らかにする。



◆城関係古絵図・写真・文献チェックリスト(例)

分類	名称・年代	寸法・形態	石垣修理箇所	所蔵
建物図	○○城縄張図 元禄5年頃	72×83 卷紙		国立公文書館
城郭図	○○城之絵図 19世紀半	85×124 1枚	中曲輪南 高さ2横3.5間	
城下図	正保年間絵図 正保1~4年			
写真	明治初年写真			
文献	○○書付 元禄4~5			

6) 石垣修理

石垣修理は、石垣調査が完了し、その特色を把握してはじめて行うべきであるが、やむを得ず緊急対応で行うときには、積み替え前の現況に出来るだけ近くもどすべきである。そのための精査な記録・測量の必要性と解体修理の際の養生など特記仕様を含めて厳正に行うべきである。また解体に際して新たな知見を得る場合も多く、臨機応変に対応出来る工事組織・工程管理などが必要となる。また石垣が欠損している箇所や、城が機能しなくなつてからの改修箇所については、事前の調査成果を参考にして施工すべきである。また改修した箇所としない箇所を明確に区別すべきである。

◆石垣修理工事工程

- ・仮設工事：仮囲い バリケード 注意板 養生（重機）
- ・準備工事：伐樹・根切り

清掃

丁張り

写真測量／平面・高低・方位・角度・反りだし等

足場工／足場組立

測量準備／基準高・位置等表示、石垣断面高線の型板

番付／石材番号付け 線引き

写真撮影

- ・解体工事：平面調査／解体部の造構確認・実測、礫石等の養生

築石の搬出—運搬—仮置き／再用石材の養生

石材の規格・形状、刻印・加工の度合い確認

介石の管理

裏込栗石／形式・寸法を測定 栗石撤去・洗浄、整理保管

掘削工事／排水施設・積み替え・整地・裏石垣等確認

掘削断面実測・写真

- ・基礎工事：根石の確認／根固め 地盤（捨て石・土台木）根入れ

地質調査

- ・石積工事：出来高図の作成／城の機能の終了後の修理。崩壊部・欠失部の修理について作成。

◆解体・石積施工時のチェック項目

・補足石／収集、加工、マーキング

・埋め戻し用土砂／発生材の流用

・栗石／不足分の支給

・造形、反り型／基準高・寸法を造形に、実測修正値の型板

・石積／既存石と積み替え石の境の明示

「築石のそえ付け—根石による勾配の調整—飼石・洞込栗石

の充填—裏込栗石工の敷き均一軋圧」

・裏込／洗浄、再使用、突き固め 排水

・背面土砂埋め戻し／版築 段切り

・叩き土／調合、叩きしめ

・古色塗／墨、柿渋

・施工後の実測

1-3. 城石垣と石垣調査の検討

前記基礎調査内容については、現在においても城石垣の構造の成り立ち、また変化の過程や意味が判明しないことによる多くの問題や課題を含んでいる。ここでは各基礎調査項目での問題やそれぞれの調査内容における課題について検討してみたい。

石垣の構造は、空積（からづみ）と練積（ねりづみ）に分かれ、練積が石垣裏をコンクリートで囲めた一体的な擁壁構造であるのに対して、空積は積石と裏込や裏盛土からの土圧の応力とでバランスすることによって成り立つ構造体である。城石垣の場合、すべてが石と土で成り立つ空石積であり、積石相互が固定されているものでなく、現在では考えられないような高さや矩やたるみを持つことにより、より複雑な構造体としている。積石かそれ自体、独立して成り立つ構造体ではなく、積石の自重や摩擦力の働きと崩落しようとする土圧・土圧とのバランスで成り立つ構造形式である。石垣が孕み出す原因に、一般に裏込に土が流入したことや、樹木根などの影響が言われるが、それは裏込自体に土が流入し目詰まりを起こし、土や浸透水などの荷重がより増加して石積に加わったこと、また根が土や裏込に入り、より圧力が石積に加わったことを示し、積石と裏からの圧力のバランスが崩れたことによる現象の結果であることを意味している。しかし城石垣の解明の難しさは、ほとんどの石積の積石が不整形であり、削石や自然石に近い玉石のような積石もあり、各石材にかかる応力の違いを一様に計算することは不可能である。証石・込石・削石の働きをどこまで石垣の一体性として見るかなどいまに判明しないところがほとんどである。同様に城石垣で見られるような時代的な変遷、たとえば戦国時代末期に発生する初期的な自然石に近い石垣との構造と、江戸時代末期の切石の加工石垣の違いは、表面的に観われる加工程度や石材の種類の問題だけではなく、裏込や裏盛土の方法もさらに変化していると考えるべきであり、石垣の高さや法・反りの大小の問題を含めて調査研究が必要となる。また調査集積することにより、石垣自体の構造的な判明、時期的な変化、史料的な解析方法などを充実し、ひいては文化遺産としての修理・修復方法の石垣保存修理としての事業立案のあり方までを研究しようとするものである。

■破損と原因

石垣破損状況や破損の要因は一般に多種多様な問題を含んでいる。先に示した孕みだしの変形について、直接的な要因として裏込に土が流れることが挙げられるが、後世、石垣裏面に水が入るような要因や廃城以後上部建物も含め江戸期に機能した排水施設を尖っていることや、振動を受けるような状況に位置していること、極端な例では、後世の石垣修理との境界で、孕み出し変形を起こし、後の修理の方法が直接孕み出しの原因となっているような場合もあり、直接・間接の要因が考えられる。

※石垣孕みだしの変形として現象面であらわれる変形は、まったく逆の2通りの変形から起るものである。一般に言われる石垣中央下部での石垣が前面に押し出されるような現象と、逆に石垣上部が裏側へ倒れ込むことによって石垣が孕み出したような現象に見えることがある。

石垣破損の要因が多種多様であればこそ、積石の形状や積上げ方法によっても異なり、多くの検討が必要である。

■石材と石積調査

城石垣に使用する石材は、一つの城郭内でも幾つかの産地から供給しているようにも見え、石も自然石や割石、加工の程度も多種多様である。江戸期の中でも築造当初と江戸末期でも異なることもあり、また同じ用材でも石垣に使う位置によって石材の加工程度や使い方が異なる。虎口の門石垣に使う石材と堀側に使う石積用の石材は大きさから加工程度まで使い分けているのが実状である。石垣部位によって利用石材を変化させていることと、それによって石垣の勾配やたるみも違っていることは明らかであり、石垣高さや規模の関係からも総体部の勾配や反りと異なっているのが普通である。石垣を一箇所の断面の構造や石積法で決定するのは危険である。城郭石垣と現代の石垣築造の違いは、微妙に法や勾配が変化する石積法である。城郭石垣での石積名称については、野面積から切石まで多くのものが現在呼び名として言わわれているが、名称自体が石積や石材の加工程度の表面的なものによっているのが普通であり、その境界や時期的なものも不明である。石垣築造において用材とする石材の種類や加工程度の違い、また表面的に見られる石積や石の配置のみならず、石垣自体の規模や裏込や施工方法、石垣勾配やたるみの違いによって総体的にあらわれるはずである。今後類例の調査結果をもとに石垣名称の明確化や区分を明らかにすることが重要である。

■発掘調査の検討

発掘調査については、先に示した基礎調査内容以外に江戸期の変遷の過程で消失した石垣や廃城以前痕跡を失ってしまった石垣についての事前調査がある。同様に江戸期の史料に載っていない石垣など整備対象とする時の発掘調査内容が重要である。松江城でも馬溜地区、郭内石垣のように現在土壙になっている箇所について江戸期の史料や絵図からは石垣と記載されている例もあり、その痕跡を求めるような発掘調査が必要になる。逆に発掘調査結果の重要性は、絵図史料で記載されないような改変の石垣積が明らかに石垣表面から観察できる場合において、裏込や施工の違いや裏盛土の状況、裏込等から検出される遺物によって石垣改修の時期を確定していく場合が多いことである。石垣解体時の入念な調査・検出が重要となる。

■歴史調査の問題点

江戸時代の絵図等史料の問題点は、現存する絵図のすべてが正確なものであるかとのことである。後世に書き写したものや逆に時代を遡って描かれているものもあり、絵図の信憑性について検討する場合がある。また絵図自体の制作目的を明らかにする必要があり、破損絵図のように災害記録や日記と照合する必要が出てくる。また同様に一般に言われる城郭絵図については、当時、正・副があり、制作のための下図や破損箇所を詳細に記した手帳のようなものもあり、その性格を明らかにする必要がある。

松江城石垣においての積み直し等改変時期、破損箇所等幕府に提出される絵図史料から窺える修理箇所よりはるかに多く、多くの表面的に見られる石積様式の変化や改修跡は、時期的に確定することは難しい。江戸期においても幕府に修復届けを出さないで改修したような痕跡を窺える結果となっている。

一方、絵図史料の重要性は現存する石垣規模についての江戸期の石垣との比較や破損改修前の石垣の様相の予想、後世消滅した石垣の構造を測る上で最も貴重な検討材料である。絵図や史料に記載された石垣高・法・根足（出）の長さの寸法や建物絵図に記載された石垣上部にのる建物規模や解の長さについて、その手掛かりとなるものである。

■石垣修理の過程

石垣修理工事については、事前の発掘調査や歴史史料の調査、石材・石積法など観察・計測によって得られる調査成果を破損箇所や崩落箇所の復旧に活かす計画書や設計図、工事仕様書の作成と修理工事中における問題に分けられる。

設計書の内容は、破損箇所や崩落の危険性を修復することは当然のことながら、変形・変位した石垣形状についての復旧の検討もあり、時期的な築造技術の復旧方法、材料の選択や工事手順の説明（仕様書）がより重要となる。現在ほとんど忘れられた技術について、設計図や仕様書の中で、調査結果も含めた内容をどこまで明確化できるかとの問題がある。

修理工事実施のことは現在多くの問題を含んでいる。工事を実施するための仮設準備工事、石積を行なう工事やその集団の構成について、工程の監理と調査等の調整、材料や材質の選択の基準と監理、請負者への施工内容の認知のための事前の施工計画書の作成と協議、実質の工事出来形と事前の施工図等のチェックの可能性について、解体した残量の積み上げに伴う分積率の問題、施工に当たっての重機の選択や配置計画、施工管理と現場協議方法など、多くの問題が解決されていない。ここでは幾つかの代表的な検討内容について提起し、今後の施工方法の検討課題としたい。

※補石材については、厳密な意味で前にその数量を把握することは不可能であり、石積み内部や解体時に破損した石材を見つけることもあります、あらかじめ予想した内容と異なる場合もあり、施工時、日常の観察が重要となる。また補充する石材についての形状は切石の場合、比較的簡単に求められるのに比べ、自然石や割石については、表面的な形状や石材表の当たりも含めて同一のものを見つけるのに難しく、多くの用材や石材を確保できる発出場所の確認が必要となる。

※石工の選定はより難しく、一つの石積工事でも選定・加工・積み・固定など何人かでチームを組む必要があり、施工時の石工の集団化という問題がある。また総体的に工事を見る専門の人も必要であり、その育成が現在大きな課題である。

※石垣修復工事での最大の問題は、実際に施工完了する石垣の形状について、どこまで事前（施工前）にチェック管理可能かとの問題である。石積法の調査内容からも各々石垣は勾配や反りなど、微妙に変化する形状があり、事前に出来上がり完成の形状を検討することが重要である。石垣が大規模化するほど精密な横断の計測値や変化の調査を正確かつ詳細な丁張で再現することが必要となり、施工者、設計監理者及び調査発掘担当者も含めて共通する認識として完成形をイメージ・再現することが必要である。

第2章 松江城の概要

- 2-1. 松江城跡の概要
- 2-2. 史跡の現況
- 2-3. 整備経過
- 2-4. 発掘等調査結果
- 2-5. 石垣修理経過

2-1. 松江城跡の概要

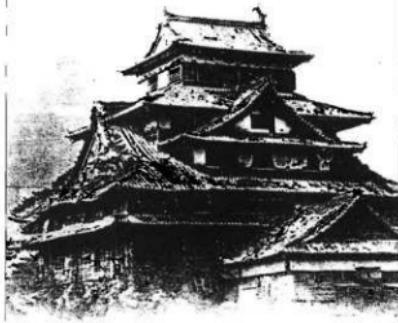
松江城は、宍道湖と中海を繋ぐ大橋川の北側、島根半島の山脈から派生する丘陵地、亀田山（標高2,840m）に縄張された平山城である。松江城の築城は、江戸時代初期から、出雲・隠岐二十四万石の城主に命じられた堀尾吉晴・忠氏父子が富田城（島根県鹿足郡大原町）から、松江にその中心を移したことから始まる。築城時期は、慶長12年（1607年）から同16年にかけて造られたとされる。

松江城の城主は堀尾氏が三代、京極氏が一代つとめ、寛永15年（1638年）以後明治の廢城まで松平氏がつとめた。明治廢城以後は、陸軍省の所管となり、同8年、城地建物の払い下げが行われ取り払われたが、幸い天守閣のみは、旧藩士の逐力で今に保存される結果となった。

現在城跡は、東西約350m、南北約540mの規模を持ち、丘陵の最高所に本丸跡を置き、その周間に二之丸・中曲輪・二之丸下ノ段・後曲輪跡などの郭跡からなり、堀を隔てて三之丸跡（現県庁舎）を残している。

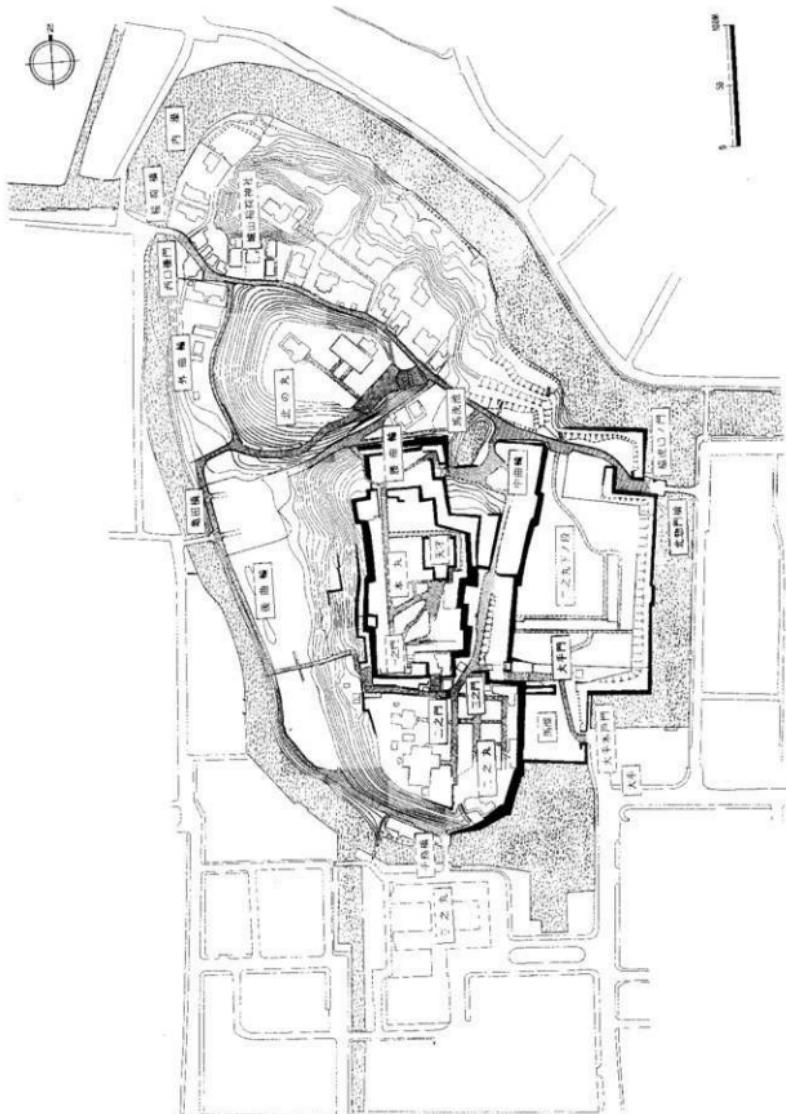
往時の遺構としては、石垣を良好に残し、特に本丸跡周囲の高石垣は、築城当初の形態を残す貴重な石垣である。城地は、現在、城跡公園として整備が進み、市民の憩いの場として、また地域を代表する歴史文化財として活用されている。

廃藩置県後の天守閣（城郭図29番）



現在の天守閣

《史跡松江城現況平面図》

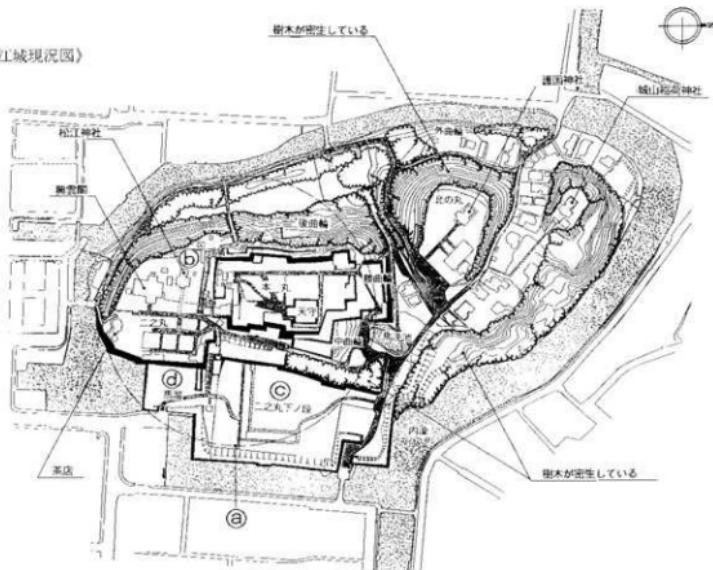


2-2. 史跡の現況

現在城跡は、東西350m、南北約540mの規模で、丘陵の最高所に本丸跡が位置している。その周囲に二之丸、二之丸ドノ段、中曲輪、腰曲輪、後曲輪跡などの郭跡からなり、堀を隔てて三之丸（現原町舎）を残している。

本丸、二之丸、二之丸ドノ段は公園利用が進んでおり、天守閣の入場者数は平成5年度では580,000人に及び、市民の憩いの場として、また歴史文化財として活用されている。本丸西側周辺や中曲輪周辺、馬洗池から内堀に沿って城山稲荷神社までは樹木が繁茂し、石垣等への影響が心配されており、また、全体的に暗い空間となっている。また、往時の遺構としては、石垣を良好に残し、特に本丸跡周囲の高石垣は築城当初の形態を残す貴重な石垣である。

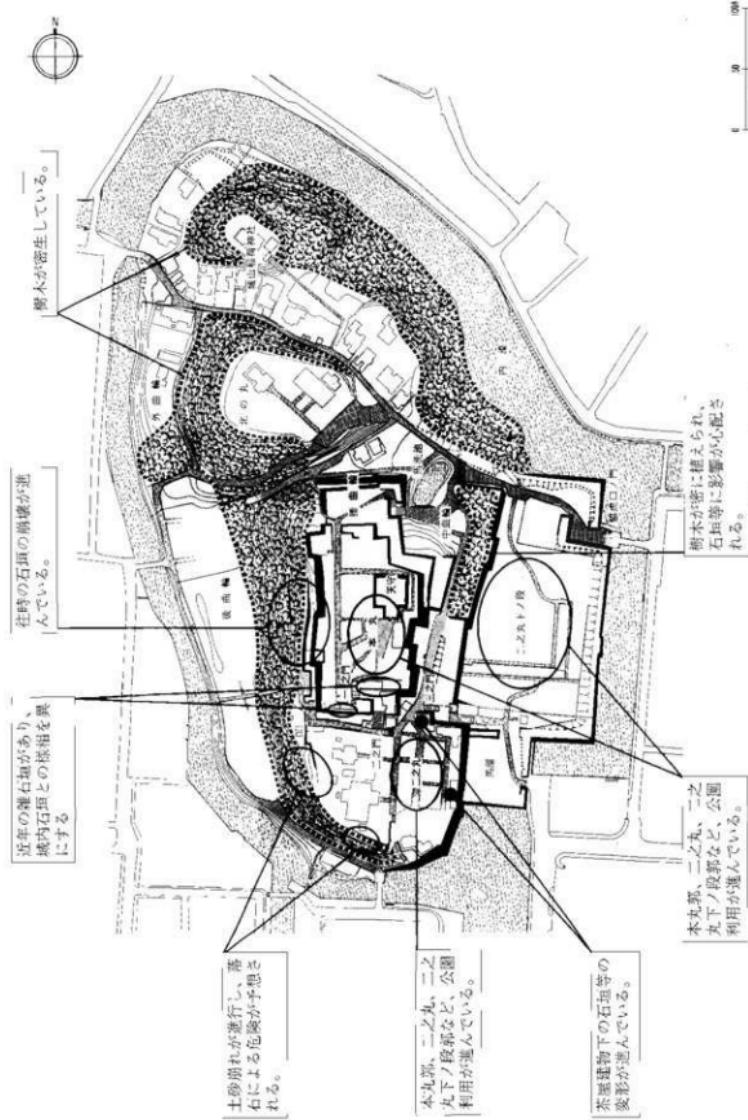
〈松江城現況図〉



■利用状況（城内で開催されるイベント等）

記号	行事（5年度入出数）	期日	場所	内 容
②	お城まつり (220,000人)	4月1日 ～4月15日	城山公園 ・本丸 ・二之丸 ・米倉跡 ・馬洗池 (ほぼ全城)	・盆栽展示会 ・特産品まつり ・植木市コナー ・アマチュアバンドコンサート ・ラジオ公開生中継 他
③	・松江神社春季例大祭 ・松江神社秋季例大祭	・5月5日 ・11月5日	松江神社	・祭事
⑤	城山大茶会（20,000人）	10月15日 ～10月16日 (午前と夜あり)	二之丸ドノ段	・数流派による茶会
④	菊花展（60,000人）	10月19日 ～11月6日	城山公園 馬洗池	・約7,000株の菊展示

《松江城の現況》



《現況写真》

1. 堀外から見た二之丸石垣



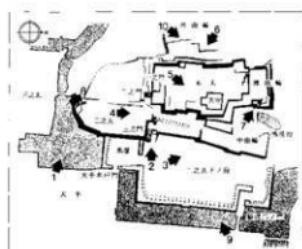
2. 大手門付近から見た二之丸への階段



3. 二之丸下ノ段郭と石垣



4. 二之丸内部



5. 本丸跡と天守閣



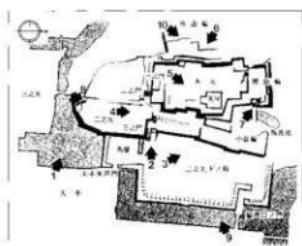
6. 本丸西側下に遺る当時の石垣



7. 破損した水ノ手御門石垣



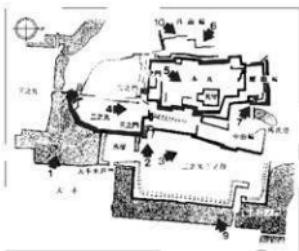
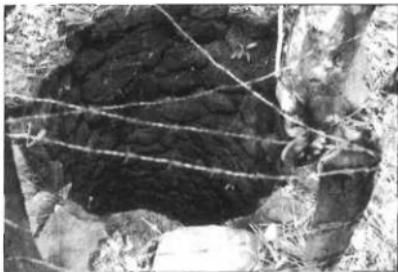
8. 二之丸跡現況



9. 良好に造る堀石垣



10. 井戸跡（後曲輪跡）



《石垣現況写真》

現況写真①
馬淵高石垣（石垣破損箇所箇所）



現況写真②

良好に構造を残す中曲輪高石垣



現況写真③

本丸高石垣（何回かの改変あり）



現況写真④

水ノ手虎口石垣（石垣改変と大きな破損を受けている）



2-3. 整備経過

■整備計画等上位計画

史跡松江城跡の調査及び整備等計画に伴う上位関連計画は、平成3年に作成された「松江市総合計画」を基本に、「松江市観光基本計画」(平成1年3月),「ウォーターフロント整備計画」(平成1年3月)など各種の上位計画がある。より具体的には、平成5年に作成した「史跡松江城環境整備指針」により、松江城内の区域区分による各整備指針と周辺整備目標について、平成4年に作成した「史跡松江城石垣調査報告書」により、現状石垣についての破損や孕期的変遷についての報告を行った。ここでは直接具体的な整備方法及び調査結果を示している「史跡松江城環境整備指針」と「史跡松江城石垣調査報告書」についてその詳細を示すものとする。

■「史跡松江城環境整備指針」

同指針は、松江市の中核都市公園でもある松江城跡の将来に向けての整備を総合的な環境整備と位置付け、魅力ある歴史遺産としての整備を計画したものである。

指針の策定に当たっては、「史跡松江城整備委員会」を組織し、平成3年度から平成4年度まで計6回委員会を開催し、各協議事項を検討、まとめることにより、作成したものである。

整備の基本理念としては、「史跡松江城及び周辺市街地（旧城下町）が一体となり、両者が相乗効果を發揮しあえるような歴史的空间の継承及び再生をなしとげ、松江市が良好な発展を遂げられるような環境整備を図っていくこと」を前提とし、総合的に整備目標を提示している。

■史跡松江城整備検討委員会名簿

	氏名	公職等
委員長	平野邦雄	東京女子大学名誉教授
委員	渡辺定夫	東京大学教授
・	中村…	京都大学教授
・	片桐成夫	鳥根大学教授
・	島田成矩	松江工業高等専門学校教授

(指導助言者)

加藤允彦	文化庁 文化財保護部 記念物課 文化財調査官
目次理雄	鳥根県教育委員会 文化課 課長
川原和人	鳥根県教育委員会 文化課 主幹
内田融	鳥根県教育委員会 文化課 文化財係長
熱田貴保	鳥根県教育委員会 文化課 文化財主事

■史跡松江城整備検討委員会概要

【委員会開催日】	【内 容 等】
第1回 整備検討委員会 (平成3年11月19日)	<ul style="list-style-type: none"> ・松江城現地視察 ・整備方針の指導～指定地だけでなく周辺整備も含めて検討する ・石垣の修理、樹木の保存、管理についての指導
第2回 整備検討委員会 (平成4年3月21日)	<ul style="list-style-type: none"> ・城内全域指定化に向けて努力する ・石垣修理に伴う二之丸茶店移転の問題 ・全体整備方針を立てた上での復原計画を検討する
第3回 整備検討委員会 (平成4年5月15日)	<ul style="list-style-type: none"> ・城内桜谷、外堀視察 ・二之丸将来整備計画についての指導 ・外堀、周辺道路、景観計画等についての指導
第4回 整備検討委員会 (平成4年8月20日) (～ 21日)	<ul style="list-style-type: none"> ・城周辺の整備方向についての指導 ・二之丸視察 ・二之丸整備、鎮守の森整備計画についての指導
第5回 整備検討委員会 (平成5年1月22日)	<ul style="list-style-type: none"> ・史跡松江城環境整備指針についての指導
第6回 整備検討委員会 (平成5年5月29日)	<ul style="list-style-type: none"> ・史跡松江城環境整備指針についての指導

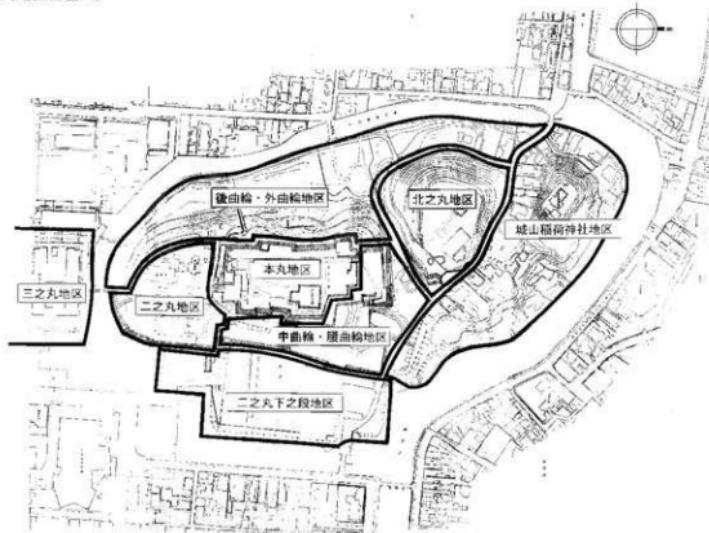
■環境整備目標

- ① 大前提として地域はもとより全国的にみても貴重な歴史的、文化的遺産である史跡松江城を最も好ましい状態で保存し、かつ公開、活用する。
- ② 環境整備は史跡地内はもとより、歴史的風土景観や自然環境、あるいは眼下に広がる旧城下町と融合した環境を念頭に置き、史跡松江城と周辺市街地が、あるいは文化財の保護と都市計画等が一体となった環境づくりに努める。
- ③ 活用のための整備にあたっては、天守を遺存するという松江城のイメージを継承、具現化することに努め、かつ史跡としての価値を引き出し、高めることとする。
- ④ 遺構の復原整備にあたっては、地下に埋もれた不明な部分を発掘調査等により十分に調査、検討し、築城当時の形状を明らかにし、遺構自身の復原にあわせて風景、空囲気、物語性といったものの復原にも努める。
- ⑤ 国史跡に指定されている内堀をはじめ穴道湖、大橋川等とともに松江市の重要な景観形成の要素となっている外堀も松江城に連接する史跡地として捉え、水環境の保存、再生整備に努める。
- ⑥ 松江城は、都市計画上は都市公園としての位置付けがなされているため、その性格に配慮しつつ、公園の機能を充実させていくことに努める。
- ⑦ 松江城は松江市を代表する歴史的觀光拠点としての性格を有しているため、今後周辺の道路整備等との調整を図り、周辺の松江城に関する歴史的資源等とのネットワーク化に努めるとともに、関連資源の保存、整備への提言を行う。

《城内地区的現況》

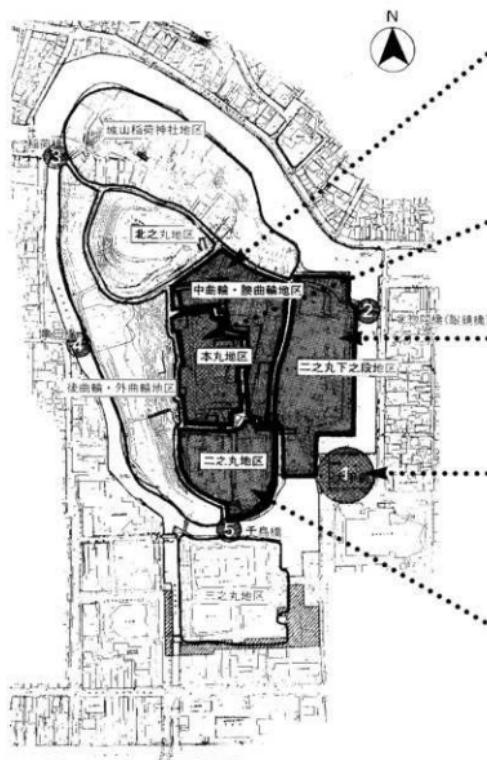
地区名	現況
本丸地区	<ul style="list-style-type: none"> 滋木の植栽やサクラ、モミジ等の花見など、城山公園としての要素が強い。 松平両公の御側の台座のみ残存。 老朽化した便所、城山公園管理事務所が既存。 堀手北ノ門跡は現在閉じられている。
二之丸地区	<ul style="list-style-type: none"> 岡崎蓬兵衛の跡像、NHKラジオ塔及び軒の茶店が営業している。 鉄筋敷き広場及び側路、老朽化した転落防止用フェンスが設置されている。 右岸は歩みや危険、崩壊の危険性が高い。 根指宿造造(昭和44年2月)の界縫間が松江第二堤として公開。活用されているが、江戸期の遺跡は全く穴になっている。
二之丸下ノ段地区	<ul style="list-style-type: none"> 広場として整備され、糸会や等花展等を催開、活用されている。 人手で駆け付けて使用所が設置されている。 馬籠の形の石垣部分の一部が十手に改変されている。 北堀内側は明治時代に木橋から土橋に受け替えられたが、内側の道水を妨げている。
中曲輪・腰曲輪地区	<ul style="list-style-type: none"> 六九北ノ門跡と水ノ子門跡は残り、馬鹿池方向からの駿出跡、本丸への出入りはできない。 白曲輪は、本丸・二之丸方面から城北方面に接する通路的に利用され、馬鹿池付近は樹木が繁茂し過ぎて陰暗で閉鎖的な空間になっている。 馬鹿池の方は民家が立地している。
後曲輪・外曲輪地区	<ul style="list-style-type: none"> 鳥居から丸田塚まで應心いに直路があり、直路の東側に土塁跡といわれる土塁が残る。 後曲輪南端に県の墓石会館(椿谷会館)があるが、老朽化し周辺の景観を損ねている。 外曲輪は、一部半島地に城山公園の機材庫・公園作業員構所、民家等建物が分布しているが、施設等は樹木で隠され、登間でも暗く人々の往来は少ない。
北之丸地区	<ul style="list-style-type: none"> 現松江護国神社所有地。
城口櫻井神社地区	<ul style="list-style-type: none"> 悪遷は史跡指定地で公有化されているが、人手が未指定地。 有刺を東西に走る山塊が其蓋し、古道沿いに民家が建ち並ぶ。
三之丸地区	<ul style="list-style-type: none"> 内堀沿いは被災・修復されている。
入厂地区	<ul style="list-style-type: none"> メインエントランスである人手前及び人手前に対し松江城へのサブエントランス地区的に利用されている北堀門檻(御脇橋)、脇荷役、丸田塚、千鳥橋地区で、いずれも撮影する様をもつ。 大手前は正宮駅車庫。

《城内地区位置図》



《環境整備指針－1》

地 区 名 称	歴 史 的 变 迹
本 丸 地 区	<ul style="list-style-type: none"> 本丸中央東寄りに天守を有する。 本丸城西側には複数の面を有する石垣があり、隅部廻所に6ヶ所の櫓が築かれ、各々が多門や九連で連結されていた。 南部の火薙ノ門、北部の御手口北ノ門により腰曲輪に通じていた。 その他、番所、御台所、御殿があったが、明治洪積卒後、取り壊しを免れた大守のみ存在している。
二 之 丸 地 区	<ul style="list-style-type: none"> 松平家二代藩主綱座まで藩主の居住となっていた御書院を中心に置き、局長室、御刀見櫓、御腰間、御武臺、御作事小屋に通じていた。 番所、井戸を有し、石垣に沿って二ノ門、三ノ門、定御番所・御内東之間、下垂門、太鼓門、中換、南換に互聯等が設けていた。 江戸期の建物群は、明治8年に全て取り壊された。
二 之 丸 下ノ段 地 区	<ul style="list-style-type: none"> 外曲輪、二之丸米蔵とも称し、7棟の米蔵をはじめ、賀小入部屋、源藏居所、秋田衣長屋等が建てられていた。 大手口に馬溜と称される櫛形を構え、櫛門形式の大手門と大手木戸門が築かれていた。 本造の北懸内蔵、馬虎口ノ門を有していた。
中曲輪・腰曲輪地区	<ul style="list-style-type: none"> 腰曲輪の南内石垣下に坪門があり、後曲輪方面に抜けられる様になっていた。 中岳門、馬洗池、さりざり門があり、馬虎口ノ門方面に通じていた。



中曲輪・腰曲輪地区

- 石垣の修繕
- 櫛木の伐採
- 馬洗池の修景整備
- 水ノ手門の復原整備
- 本指定地の史跡指定化及び公有化し、民家を移転

本 丸 地 区

- 天守の遺存する曲輪跡として整備
- 既設花壇等を撤去し、白山南面とする
- 北ノ門跡を復原整備し、開放する
- 樹木の計画的伐採
- 復原建物の一ノ門や多門の見直し及び再復原整備
- 直政公御像内室、公常使所等の施設撤去
- 文献史料に基づいた各櫓等の復原整備
- 大守の御宝昇格化

二 之 丸 下ノ段 地 区

- 遺構の保存を第一とし、発掘調査等に基づいた明示及び復原整備
- 既存使所の改修、移築
- 大手口の替縫整備として、櫛形（馬頭）の修繕
- 大手門及び大手木戸門の復原整備
- 馬虎口ノ門の復原整備

入 口 地 区 (1~5)

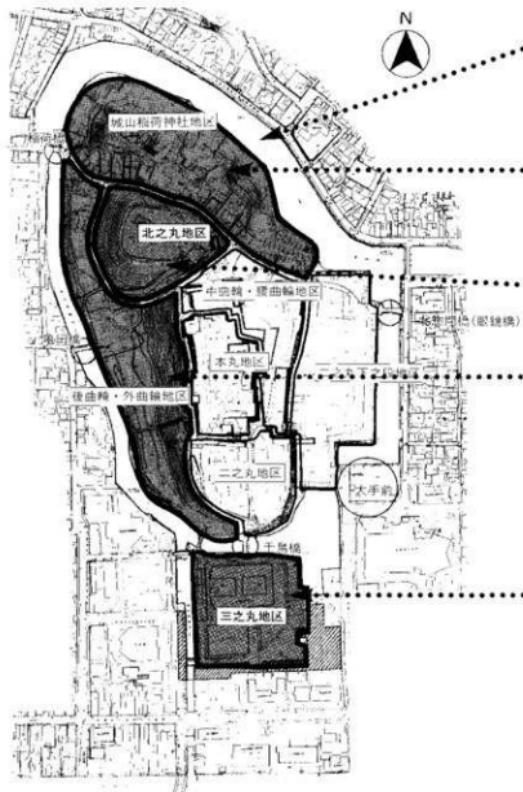
- 城内と周辺域を結ぶエントランス空間として整備
- 広場の確保及び案内板の設置
- 北懸門横付近の史跡指定化及び北懸門門の復原整備
- 船荷施付近の史跡指定化及び船荷橋の改築
- 亀田鶴付近の修景整備
- 千鳥橋の改築（木造）

二 之 丸 地 区

- 既設の茶店、記念碑等の撤去
- 石垣の修理
- 御庭園今井作清構の平面表示
- 櫻の復原整備
- 既設南面を復原修理し、見学、休憩施設として活用
- 松江郷上館としては（仮）市立博物館を城山周辺に建設し、移転する

《環境整備指針－2》

地区名称	歴史的変遷
後曲輪・外曲輪地区	<ul style="list-style-type: none"> 後曲輪は櫻谷とも呼ばれ、ツバキやシイの古木が多く見られ。ツバキは城内で実用も兼ねて栽培されていたものと思われる。 外曲輪は続玄等では足跡摩敷にあたり。
北之丸地区	<ul style="list-style-type: none"> 上荷殿（新御殿）他建物群が築かれたが、享保18年（1733年）の大火により全焼する。
城山稲荷神社地区	<ul style="list-style-type: none"> 禁闇もなくの万治2年（1659年）に宮が築かれる。 経岡より、舟着門、御手之虎口ノ門、足軽居敷、用臣敷が記されている。
三之丸地区	<ul style="list-style-type: none"> 城主の日常の生活の場として使われた衛殿が築ち並んでいた。 周囲に造られた内堀の北、西、南に廻下構があり、二之丸、お花壇（三之丸ノ内）、御簾御屋（三之丸ノ内）へ通じていた。 東側に三之丸表門



その他（内堀）

- 内堀の遺構保存及び修景整備
- 水質の浄化
- 石垣等護岸の修復
- 舟着門の復原整備

城山稲荷神社地区

- 伝統的美観地区の修景整備と、散策路を整備
- 小広場の整備
- 舟着門の復原整備
- 土器、石敷、石段、井戸等遺構の保存修復
- 赤道、浜家、神社有地の史跡指定化及び城内遊歩道としての再整備

北之丸地区

- 史跡指定化の推進
- 樹林の保全及び管理
- 发掘調査等による遺構の解明

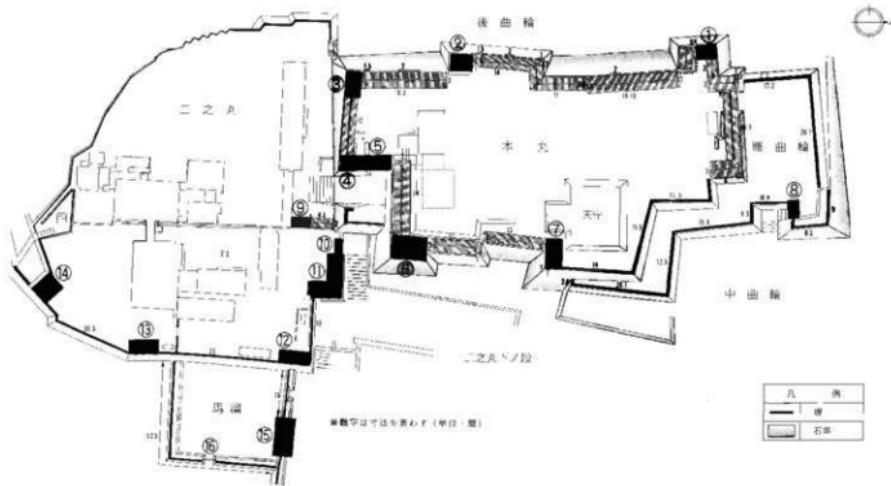
後曲輪・外曲輪地区

- 櫻谷一带の自然条件を十分活用した整備
- 櫻谷広場に散策路、ベンチ等を設置
- 屯田敷付近に休憩便益施設を設置及び樹林地景観を保全
- 蔵員会館を撤去し、跡地をエントランス空間として整備
- 外曲輪地区の民家移転、撤去し、適所に管理施設を設置
- 駐輪場路の新設

三之丸地区

- 現県立吉田地の史跡指定化及び整備

《「史跡松江城環境整備指針」復原対象建物とその規模》

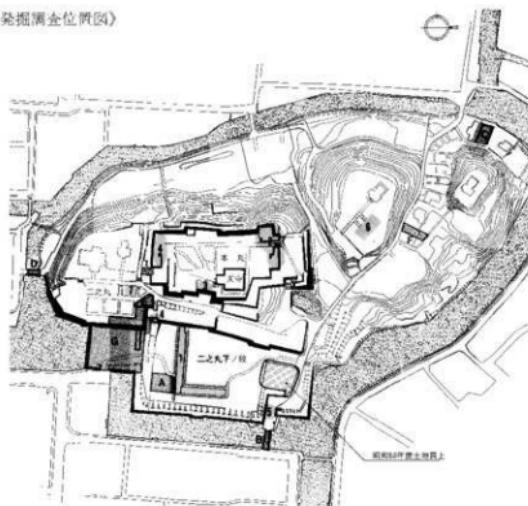


番号	名 称	城 建 物
①	乾 別 横	三間梁、桁行四間宜足、併成表之方、簷出五寸、石垣高三間四尺五寸、法面高五寸五分、櫛足密間五尺二寸
②	冥 銀 鎧 横	川間梁、桁行五間、重申之方二階作り、西ノ面御腰板、石垣高三間六尺六寸、法三間三尺八寸、櫛足者前五寸
③	西 之 歩 横	三間梁、桁行五間、例半ノ方二階作り、石垣高四間六尺九寸、法五面四尺、櫛足先間六尺五寸
④	貞 明 横	三間梁、桁行五間、但丁次ノ方二階作り、石垣高次四面三尺武寸、法三間三尺七寸五分、櫛足四尺四寸
⑤	一ノ御門	三間梁、桁行四間、但壁之内奥高六尺唐乃橋江政付
⑥	御 次 昇 横	五間梁、桁行六四、柱已半ノ方一階作り、石垣高五面四尺武寸、法五面三尺八寸、櫛足次四面四寸
⑦	御 終 桟 横	三間梁、桁行六面、但表之方二階作り、右垣高六面四尺、法六面三尺八寸、櫛足三面五寸
⑧	水ノ手 朝 門	走高五寸梁、桁行三面四尺
⑨	二之御門	走高梁、桁行三面、但表之内
⑩	三之御門	武開梁、桁行武開四尺
⑪	宍道所、御門東ノ横	三間梁、桁行三面、石垣高卷尺八寸、北ノ面此期悉尺、東ノ櫛足三尺二寸
⑫	太 銀 横	三間梁、桁行六面、石垣高六面四尺、法七面半、櫛足三面五寸八寸
⑬	中 横	三間梁、桁行六面、石垣高六面四尺、法七面半、櫛足三面五寸三寸
⑭	南 横	三間梁、桁行六面、但二階作り、石垣高六面四尺、法七面半、櫛足三面五寸二寸
⑮	有 想 門	四面梁、桁行八面、但一階作り
⑯	大 平 旗 門	同所敷付丸垣覆五赤脚半、石垣高老五尺卷小、法式向三尺、櫛足三尺五寸

2-4. 発掘等調査結果

昭和47~49年度の米蔵造構の発掘調査により、二之丸下ノ段における江戸時代の造構調査を行い、昭和50年度に調査に基づく遺構の平面整備を行った。以後、全体的な松江城の整備を図っていく上でその基本資料を得るため、平成6年度に至り発掘調査を実施した。

《発掘調査位置図》



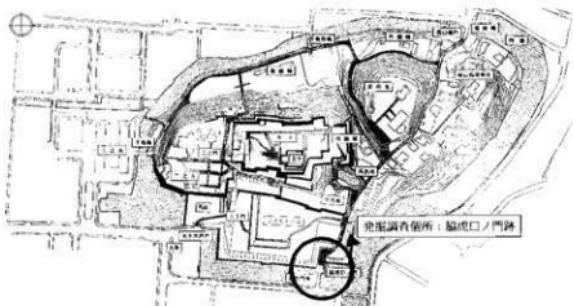
■発掘調査実施表

記号	年 度	発 掘 主 務 所	総費(千円) 補助金 市単独	内 容
1	昭和47年度	・二之丸下ノ段米蔵遺構(第一次)	500	・米蔵基壇の遺構確認。
	昭和48年度	・二之丸下ノ段米蔵遺構(第二次)	837	・米蔵遺構南半分を全面発掘調査。
	昭和49年度	・二之丸下ノ段米蔵遺構(第三次)	1,031	・米蔵遺構南側全周発掘調査。米蔵基壇、廻畠所廻田所敷建物基礎、排水渠を検出。
2	昭和53年度	・本丸通構	168	・替ノ内前齊跡とその田沼、北ノ内跡、多門跡の発掘調査。
3	昭和54年度	・本丸通構(大守南東多門)	146	・天守南東多門跡、武具櫓跡の発掘調査。
4	昭和55年度	・本丸通構(弓櫓跡、多門跡)	431	・抜水溝、建物礎石を検出。
5	昭和56年度	・脇丸口ノ門跡	1,668	・2箇所×5箇の門建物礎石、築清路を検出。
	昭和59年度	・脇丸口ノ門跡	5,000	・道路地下部分を莫然西透。縦長9m、両落橋2条、地蔵石列を検出。
6	昭和60年度	・脇丸口ノ門跡	5,000	・門扉直側接続の石垣上部と土塁の一部を発掘調査。
7	昭和61年度	・北ノ丸(北丸)	1,291	・土御殿跡の一筋(360cm)を発掘調査。擬立柱建物跡1棟、小間沿清路1、土塼1を検出。
A	平成4年度	・二之丸	8,283	・番所跡の発掘調査。石列1条、真扇1枚、かわら1箱を検出。(128m)
B	平成5年度	・二之丸下ノ段	*	・替換構、寺社併存方跡の発掘調査。擬石建物跡2棟、排水溝1を検出。
C	*	・櫛手ノ門跡	*	・櫛手の壳口付近にあつた尾谷屋敷跡の発掘調査。築石建物跡1棟、土塼1条、石臼1個を検出。
D	*	・千鳥橋	*	・二之丸と三之丸を結ぶ千鳥橋の発掘調査。江戸期の塗の塗解、横木を検出。
E	*	・二之丸	5,000	・二ノ門東の櫛構、定期會所跡の発掘調査。建物の礎石を検出。
F	*	・櫛荷神社前	4,395	・古御殿跡に隣接する櫛荷神社の礎石を検出せず。
G	*	・馬宿	5,314	・大手門跡、馬廐の石垣調査。二之丸東目ぐれの垣根の発掘調査。
	昭和50年度	・二之丸ノ段北御室家移転(土塼上)	60,000	・3軒の北壁について、土塼上と家屋体軸を実施。

■発掘調査経過

調査年度	調査箇所・概要
昭和47年度 ↓ 昭和49年度	(二之丸下ノ段) 水蔵跡、元塗敷地、竹田長屋跡 【水蔵跡】L字形に連結された木蔵跡及び御門跡が発掘図、書付、懸問数と同規模で検出され、外側に石積排水溝、内側に断面U字形の軟質砂岩性雨落溝が確認された。 【元塗敷地】礎石を5箇所で検出したが、建物規模を確定するには至らなかった 【要出長屋跡】全面調査にはあらなかつたが、3間深の跡跡で、高さ60cm平均の石積み基壇と排水溝が検出された。
昭和53年度	(本丸) 木多門跡～御乾櫓跡～北之門西側多門跡、北之門東側多門跡 【街乾櫓跡周辺】御乾櫓南側廊下跡～北之門西側多門跡に競く高さ50cm平均の石積基壇(1～2段積み)が検出されたが、礎石は消失していた。 【北之門東側多門跡】L字形に連結された多門跡は南側に石積基壇(1段積み)が検出された。このうち東西棟は礎石がほぼ完全に残り、3×10間、南北棟は南端部が消失しているものの、3×6間の規模が復元でき、また石垣側に武者走りがあるなど縄張図と合致する。
昭和54年度	(本丸) 南東多門跡、武具櫓跡、西側多門跡 【南東多門跡】南北端部で「重」の基壇が検出された。また礎石が数箇所で確認され、2×13間の規模が復元され、書付と合致する。 【武具櫓跡、西側多門跡】トレチによる調査を実施したが石積施設、礎石等は検出されなかつた。
昭和55年度	(本丸) 弓橋路周辺、(二之丸下ノ段) 南西角上部石垣 【弓橋跡周辺】後世の擾乱が著しく、石積基壇の石材が部分的に検出されたのみである。弓橋から西方に取付く多門跡では石垣模様が検出されたが、性格は不明である。 【南西角上部石垣】石垣西面基部において排水溝と3段の石段が検出された。
昭和56年度 昭和59年度 昭和60年度	(二之丸下ノ段) 虎口門跡 【虎口門跡】御門礎石、雨落溝、地覆石がほぼ完全な形で検出された。規模は12.7×4.8mであり、礎石配置は純張図と合致する。 【その他】北側取付石垣西側で石段、雪隠が検出され、石段は御張図と、雪隠は書付の記述と合致することが判明した。
昭和62年度	(北之丸) 上御殿跡 【上御殿跡】2間梁、桁行5間以上の獨立柱建物跡、土壙、小鐵冶跡を検出したが、文献、史料には表現されていない。
平成4年度	(二之丸) 番所跡 【番所跡】礎石は検出されなかつたが、幅6.3m、長さ9m以上の貼石、雨落溝が検出され、縄張図、書付と一致、また資料に記載のない上塙、雪隠跡が検出された。
平成5年度	(二之丸下ノ段) 御破損方寺社修理工事、北惣門櫓(外曲輪)足軽屋敷跡 / (二之丸) 定御番所、御門東之塙 【御破損方寺社修理工事】15.6×8mの石列で囲んだ礎石建物と、東西10.7m、西辺8.1m、東辺4.2mのL字形の礎石建物が検出されたが、18世紀後半以前の繪図でしか確認できない。 【北惣門櫓】櫓基として横木2本と継柱合計8本、横の東西取付部で人札合計6本が検出された。 【定御番所御門東之櫓跡】関連すると思われる礎石が一部検出された。 【足軽屋敷跡】手虎口北側では石引及び雨落溝で区画された16.5×11mの北割の中に礎石建物の一部が検出された。番衛神社参道西をトレチにより調査したが、後世の擾乱が著しく、建物跡は検出されなかつた。
平成6年度	二之丸地内、馬溜地区 【之丸北区】太鼓櫓跡、腰掛跡、中櫓跡推定箇所にトレチを設定した結果、各トレチより礎石と思われる石材が検出された。 【馬溜地区】大手門跡推定地に設定したトレチでは東西取付石垣に接して礎石が検出された。規模は14.5×5.4mで礎石配置は純張図に合致する。また、脚形石垣内面(現況は土居)は、調査の結果、郭部に2～3段積みの石垣が残ることが判明した。
平成7年度 (調査中)	(二之丸) 南口門跡、南櫓跡、中櫓跡、太鼓櫓跡、(馬溜地区) 大手門西側取付石垣 【南口門跡】現在までの調査では跡跡を含めて引跡な遺構は検出されていない。 【南櫓跡】礎石、排水溝が比較的良い状態で検出されたが、桁行の礎石配置に純張図等と若干の相違が認められる。 【大手門西側取付石垣】西側石垣は比較的良好に6段検出され、合板も現在までに2段確認されている。

〈発掘調査写真〉



脇虎口ノ門跡北側石垣崩落状況（昭和56年度）



脇虎口ノ門跡西側雨落溝調査全景（昭和59年度）



脇虎口ノ門跡修理前石垣（昭和60年度）

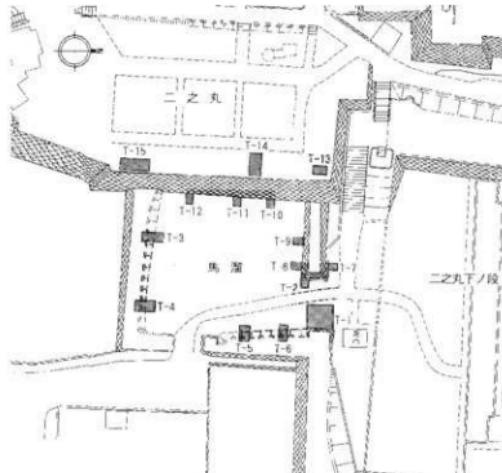


■平成6年度発掘調査

平成6年度、国庫補助を得て石垣改修のための事前調査を実施した。調査箇所は、馬溜（大手門前）高石垣の破損改修に伴う同根石等確認調査及び二之丸火薬橋台、堀等の確認調査を実施した。

調査内容は、馬溜地区周囲の石垣（高石垣と大手門脇石垣）の根石の確認とその位置の測定、また周囲に向る土手（土塁）についても絵図等により石垣と記載される例もあり、その石垣根石等の痕跡を調べるためにトレンチ調査を実施した。加えて同高石垣、大手門石垣等改修範囲について石垣開化を実施した。

《発掘調査位置図》

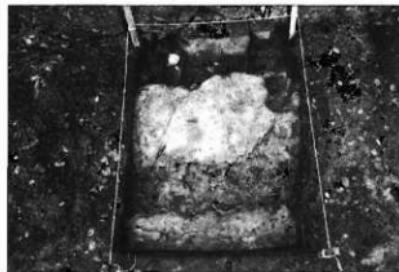


①二之丸高石垣根石調査（T-10～12トレンチ）

馬溜側高石垣の根石位置及び地盤との関係について、トレンチ調査を実施した。調査の結果、現地表面下10～13cm内外で根石が検出され、地盤も岩盤を少し掘り込んで地盤としていることが判明した。



T-12



T-11

②大手門櫓石垣調査（T-1.2.7.8 トレチ）

大手門櫓石垣については、楕石の位置確認と同礎石の遺構残存調査を実施した。大手門礎石等遺構調査では、地表面下約60cm地中に良好に礎石が残存していることが判明した。また、櫓石垣根石調査でも同様に30~40cm内外で礎石が検出されることが判明した。



T-1



T-1

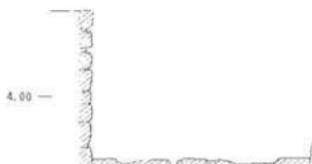


T-2

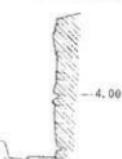


T-7

大手門東側石垣



大手門西側石垣



《T-1, 2断面図》

③馬溜土手石垣確認調査（T-3～6トレチ）

馬溜内側に向る土手については、絵図史料等からも石垣として記載されている例があり、それを確認するため土手にトレチを設定し、石垣造構の確認調査を実施した。調査結果から、土手内部から石垣根石部分（二段積）が検出され、全面掘石垣から約3間内側に腰石垣が立っていたことが判明した。同時に、石垣根石に沿って排水側溝も検出し、T-4トレチでは井戸に連結する石組水路も検出した。



T-4



T-6

■断面位置図



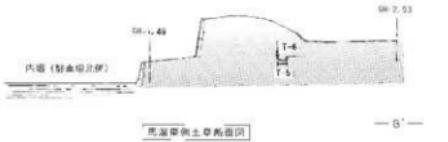
— A —

馬溜南側土壁断面図



— B —

馬溜東側土壁断面図



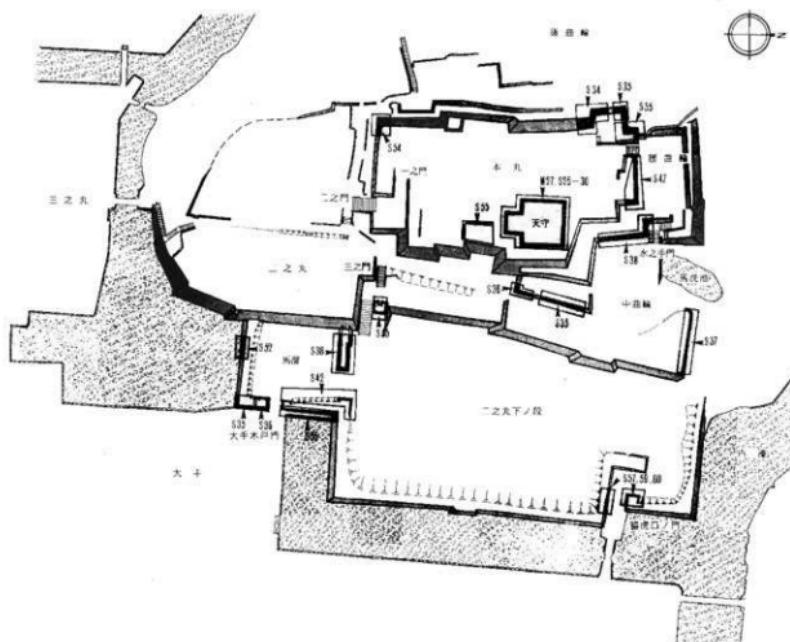
2-5. 石垣修理経過

史跡の整備については、昭和30年代は石垣修理を中心に行ってきたが、昭和40年代に入ると全体的な環境整備を行うこととし、昭和45年に「史跡松江城環境整備5ヶ年計画」を策定し、昭和47年度から土質調査・無関係な施設の撤去・発掘調査・造構整備・石垣修理・内堀浚渫などを実施した。

さらに平成4～6年度にかけては「史跡松江城公園周辺整備事業」(単費)として、土地買上・無関係な施設の撤去、橋の復元・発掘調査・広場や散策路、歩道の整備・便益施設の設置を行った。一方、5年度からは崩壊した石垣の継続的修理工事に入り6年度に完了。7年度は、崩壊の危険性の高い石垣の修理工事を実施した。

年度	歩留箇所	区分	概要
47	本丸北側 大手前	石垣修理 通水	既落した間接石を詰めた 69.5m ² 県庁前と大手北の内側を暗渠で連絡通水させた
48	県庁前内堀	浚渫	汚泥浚渫 機械掘削3562.6m ³ 、人力掘削378.8m ²
50	之丸下ノ段	土地買上 造構整備	北部の民家3軒4世帯について土地買上と家屋移転 米蔵造構の石垣基壇、排水溝の平面的整備
52	馬鹿塚	石垣修理	既損壊した石垣の修理 36m ²
53	本丸	発掘調査 造構整備	北部の跡構、多門跡の調査 調査成果に基づく平面整備
54	本丸	発掘調査 造構整備 石垣修理	天守南東部の多門跡の調査 調査成果に基づく平面整備 坤槽跡直下の石垣修理
55	本丸ほか	発掘調査 造構整備 石垣修理	弓橋跡、多門跡、之丸下ノ段兩西角上部の調査 調査成果に基づく平面整備 之丸下ノ段兩西角上部石垣62.47m ² 、多門跡周辺石垣31m ² 、 本丸北ノ門西側石垣25.2m ²
56	瑞虎口ノ門跡	発掘調査 石垣復旧	門跡南側を中心に調査 崩壊した門跡北側石垣の除去、土壠による仮復旧
57	瑞虎口ノ門跡	石垣復旧	崩壊石垣の修理55.9m ² 千鳥模様面石垣修理22.6m ²
59	瑞虎口ノ門跡	発掘調査 石垣復旧	門跡中心部を調査 ふくらみの目立つ頭築付近の石垣を修理 52.6m ²
60	瑞虎口ノ門跡	発掘調査 造構整備 石垣復旧	門跡南側の取付石垣と上層を調査 門跡の碇石、瓦落溝、地盤石、一和土仕上げ 門跡南側の石垣を修理 14m ²
平成3	搦手之虎口ノ北護土神社北	土地買上 保存修理	庭園のある民有地買上 573.84m ² 庭園地となっている民有地買上 234.36m ² 史跡松江城整備検討委員会の開催、史跡松江城石垣調査委員会の開催
4	之丸北側	保存修理	史跡松江城整備検討委員会の開催
5	之丸北側 之丸ほか	保存修理 発掘調査	崩壊した石垣の修理 崩壊した石垣の上部部分、横跡の調査
6	之丸北側 之丸ほか	保存修理 発掘調査	崩壊した石垣の修理 (縦縫) 86m ² 中槽跡、太鼓槽跡、大手門跡、馬鹿塚の石垣基礎
7	之丸南口門跡周辺 大手門西側取付石垣 之丸	保存修理 解体調査 発掘調査	膨らみの顯著な石垣の修理 改変された石垣の解体調査 中槽跡、太鼓槽跡、膨脹構造、修理石垣の上部・断面・根石調査

《石垣保存修理箇所》



■石垣保存修理箇所

◎明治27年度及び昭和25~30年度事業

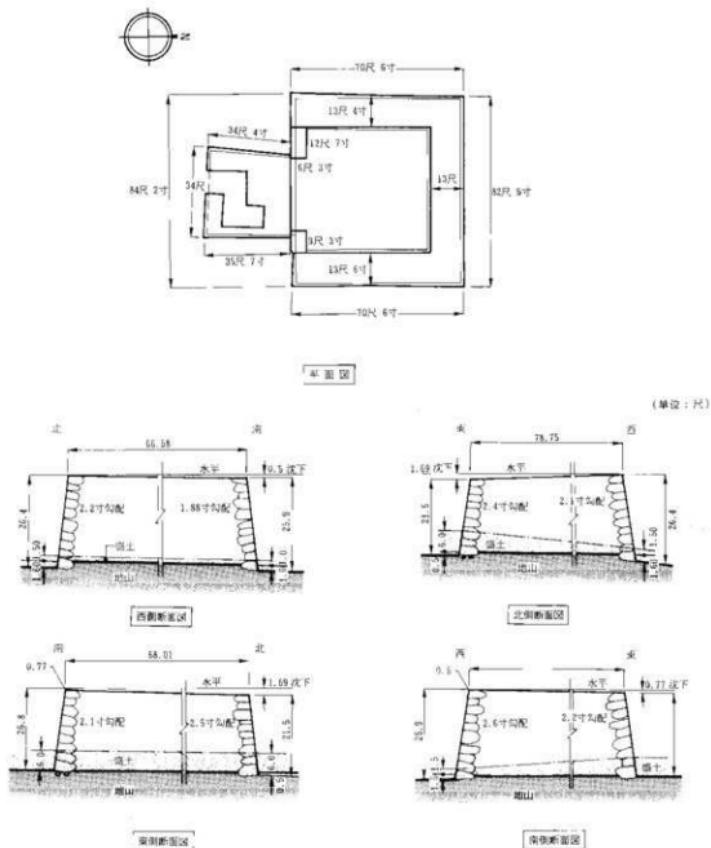
- 天守
- ◎昭和34年度事業 乾ノ角箭倉西南角
- ◎昭和35年度事業 乾ノ角箭倉北面、大手木戸門南側、天守東側
- ◎昭和36年度事業 天守東側下、大手木戸門南角
- ◎昭和37年度事業 北側管理員宅下
- ◎昭和38年度事業 馬洗池西南、大手門西側
- ◎昭和42年度事業 大手木戸門土墨、大手門東
- ◎昭和47年度事業 天守北側
- ◎昭和52年度事業 馬溜南側
- ◎昭和54年度事業 本丸坤櫓他
- ◎昭和55年度事業 本丸北門西、大手前北堀、二之丸ドノ段南西上部、本丸天守南側多間跡
- ◎昭和57年度事業 臨虎口ノ門跡北側の石垣
- ◎昭和59年度事業 臨虎口ノ門跡東側の石垣、臨虎口ノ門跡
- ◎昭和60年度事業 臨虎口ノ門跡

【松江城天守閣解体修理報告書（昭和30年3月）より】

昭和25年から6年を要した天守閣の修理で、天守白石垣の変形を記録し、その原因を次のように報告している。

「天守白石垣は西面北側は原形を保ってたが、その他の面については縮みを来していた。特に東北隅は沈下、孕み出しが著しかった。」と記してある。

東北隅の沈下の原因として、この位置のみ胴木が組まれ、その腐朽により沈下したと考えられ、また孕み出しへはこの面の櫛根の破損転落により、雨水も透水により変形したものと記されている。その他は根石はほとんど移動なく、直接粘性土の地山に築かれていると記されている。興味あることは、何故ここだけが縮みの水面下で使う胴木基礎を使ったかである。なお、石垣の修理は良好な根石はそのままとし変形箇所の掘え直し、コンクリートにより根石部分は固め、上部は積み替えを行ったと報告されている。



天守現況石垣平面・断面図（昭和30年修理報告書）

第3章 石垣の特徴と規模

— 3 — 1. 石垣石積の特徴

— 3 — 2. 石垣の規模

3-1. 石垣石積の特徴

松江城内に現存する城石垣に利用する石材は、玉石に近い自然石から割石、一部切石が使用されている。石材は多くが安山岩で、一部玄武岩（利用石材の調査：大海崎産の安山岩と、矢出に産する玄武岩）が使用されている。自然石は、本丸西側及び北側の石垣、後曲輪に残る石垣などに多く、割石使用石垣は同個所の角石材、本丸の南東側とその他の現存する石垣がほとんどである。切石は、二之丸や本丸の一部の角石材に使用されている。

■石積法

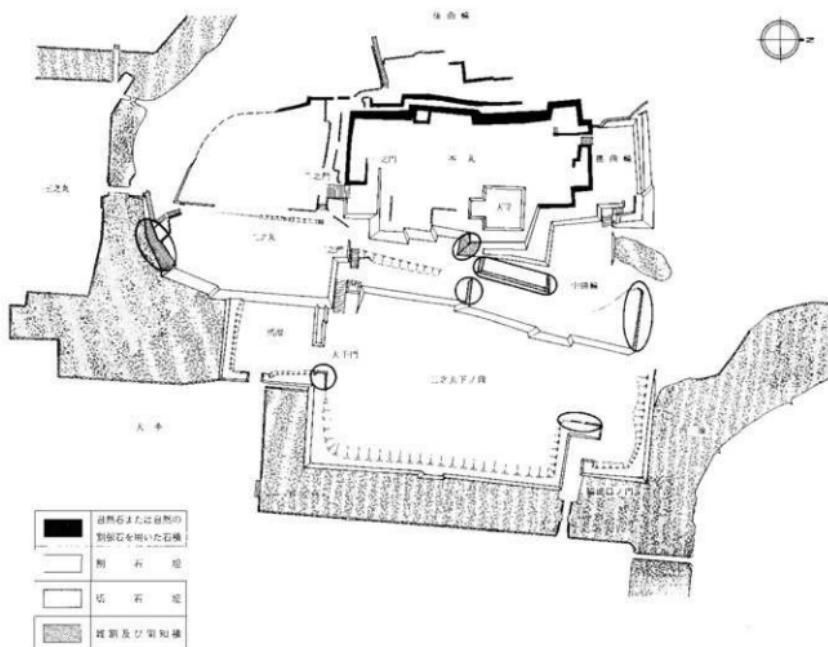
一般に、城郭石垣を分類する場合、野面積・折込接・切込接に分類されるが、現在明確な時期区分や裏込まで含めた構造区分がなされているわけではない。

野面積は、自然石に近い積石を用い石垣を積む方法で、その特徴は自然石を用いるため勾配が緩くなることがある。打込接は、削石を用い結石や込石をはさみ、積み上げる方法で勾配をより急にするため発展した石積法である。切込接は、切石を用い石の端端（切口）をあわせて積む方法で、勾配は打込接よりも高くすることが可能である。時代的には、地域差はあるものの戦国時代末期から、江戸時代初期にかけて野面・打込・切込接と変化したと考えられている。

松江城の石垣では、野面積は本丸西及び北側石垣と後曲輪の石垣に一部残り、その他はほとんどが打込接である。現存する石垣では、ほとんどが結石の崩落を未だしている。構築（積み方）は、乱石積が一部見られるが、布目崩し及び布目状の積み方である。門虎口石垣については、切込接のようにも見える箇所があるが、後年の石垣修理での形態を失っている。切込接に近い石垣として、二之丸南側、三之丸に面する壠石積がある。角石積については、算木積が発達する初期の頃の自然石を用いた石積が本丸の西・南側石垣に見られ、当初の石積の様相を残す石垣として貴重なものである。しかし、一方では石垣に、昭和年代の間知積や雜石積が見受けられる。また、明治廢城以後、石垣の改修跡が多く箇所で見られ石垣の様相が江戸期のものと異なる。

■使用石材による分類

松江城石垣の使用石材については、多種多様な石材が用いられている。自然石または、自然の割肌を使った石垣から近年の間知や縦割石を使用したものまである。時代的には、一般的に自然石や自然の割肌を用いたものが古く、削石、切石の順に石垣の年代を想定することが可能である。しかし、松江城の場合、積み替え（同石材を用いて積み直したもの）や積み直したものが多く、石材の形状によって時代の古い・新しいを想定することは不可能である。同様に、本丸・祈祷櫓下切石石垣のように、史料的には江戸初期であっても、矢跡や石材加工から明治以後であることも多い。



《石積法写真》

割石を用いた打込塙と切石の角石（本丸東側）



石積法：

野面石積（本丸西側）



石積法：

野面石積と自然割石を用いた角石積（本丸東側）



露出している岩石

■石垣基礎

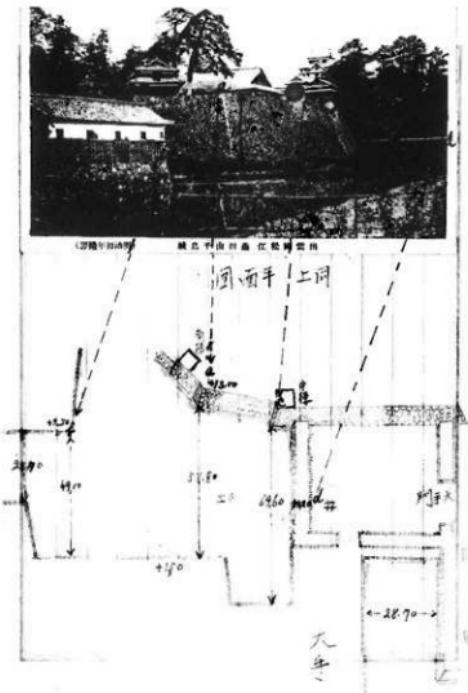
現存石垣での詳細な発掘調査は、いまだ行われておらず、その構造についての分析は分かっていない。

昭和25年からの天守閣の石垣解体で、根石は直接地山に据えられていることが報告されている。一部、同石垣に廻木基礎が利用されていたことも興味あることである。本城山は、堀周辺に岩石が露出するように大部分が岩山で、地盤は良好であるものと思われる。

■石垣断面

本調査報告では、その石垣高・断面形状を把握するため、実測測量による石垣断面の作図を行い、後図に示すような石垣高、石垣勾配、変形状況を得て、その結果本丸郭の石垣については、西側中央（No.4=7.5寸勾配）を除いて、ほぼ4.5寸勾配で石垣が築造されている。

二之丸・中曲輪の石垣（No.11・12・15・16）については、ほとんどが3.5~4.0寸勾配である。二之丸北側、階段通路側の石垣勾配は、現状での変形が進んでいるため詳細は不明である。また、門虎口石垣についても、後年の積み直しや破損を来たし不明である。



松江城測量図

（日本城郭史料：陸軍省 城郭部編）

■松江城利用石材の調査

松江城の築城については、その石垣の石材は、松江市近辺の嫁ヶ島・人海崎・矢田・忌部等より運ばれたと伝えられるが、確実な記録は存在しない。城石垣の利用石材調査は、昭和25年から始まった天守閣の解体修理の際、補足石材を得るために利用石材の詳細調査を行っている。

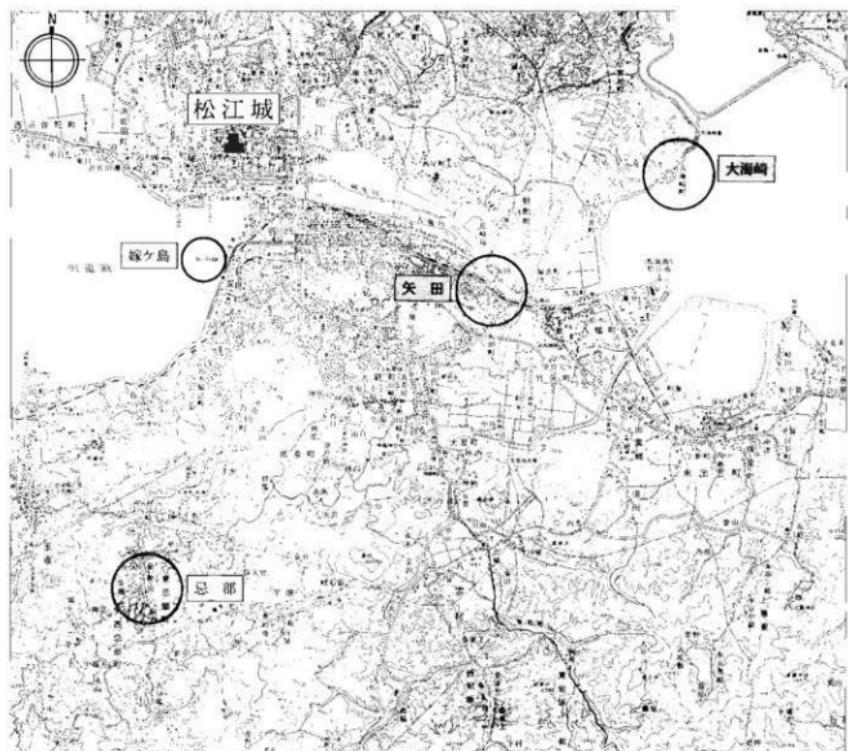
「松江城天守閣解体修理報告書」

『松江城天守閣石垣用石材の原産地調査報告』

鳥根大学教授 山口 錠次博士

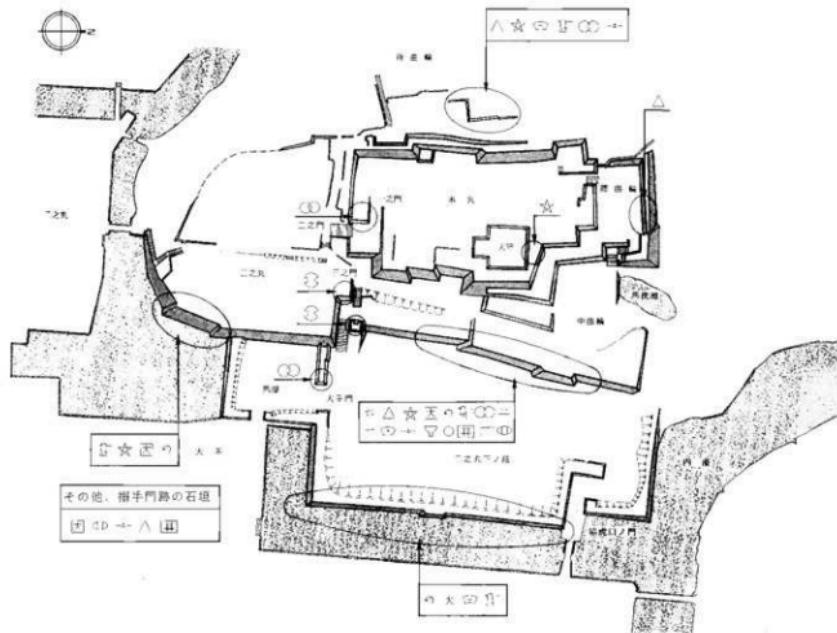
そこででの調査結果は、利用石材には2種類あり、角閃石粗面安山岩と、角閃石粗面玄武岩である。

また報告書では、産地の特定をその成分分析から行い、角閃石粗面安山岩は人海崎産の岩石、角閃石粗面玄武岩は矢田に産出する岩石であることを調査結果としている。



■刻印調査

松江城に用いられた石垣石材に刻印を有するものは、約20種類判明している。その中で、◎（分銅紋）は、堀尾家の紋であり、○（○）は脇坂家の紋である。他の紋は不明である。紋が付いている石材は、ほぼ全城に分布しているが、特に二之丸、中曲輪近辺の石垣に多い。中曲輪の南側階段脇石垣台の堀尾氏の紋は有名である。



《石垣現況写真》

往時の良好に残る石垣
(本丸西下、後曲輪石垣)



変形と崩壊の危険性がある石垣
(二之丸、階段)



変形及び崩落している石垣
(大手櫓門跡石垣)



後年積み替えが行われ石積の様相を異にする石垣
(本丸、一之門石垣)



往時の石垣規模を示す石垣
(脇虎口石垣)



後年積み替えが行われた石垣
(中曲輪跡石垣)

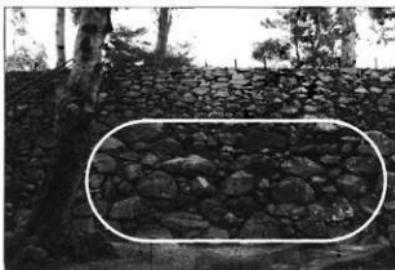


詰石の欠落と石材の割れ
(二之丸、階段付近)

■史跡松江城石垣の様相

現存する石垣については、江戸期築城期（慶長12年（1607）～同16年）の初期の自然石を使用した石積（本丸近辺）とほとんど同時期のものと思われる削石を使った石積（二之丸石垣に多い）。また、改変や破損の記録から江戸中期以降の切石を用いた石積が乱雜に見られる。

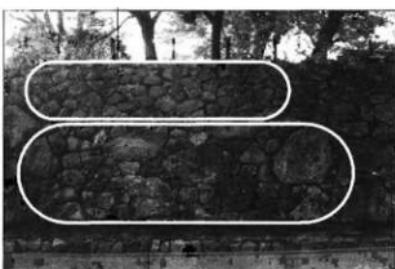
【江戸初期築城期（慶長12～16年）の石垣（自然石を用いた打込接）】



本丸南側石垣：

石垣の足元に築城期の石垣（自然削石を利用した打込接）が見られる。上部は江戸後半のもの。

— 後世の積直し（明治以降）



本丸一ノ門脇石垣の自然石利用：

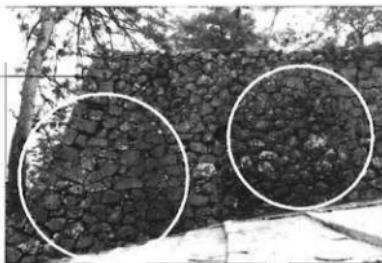
内脇石垣として大きな石（カガミ石）を多様。江戸初期の築城期。

【江戸初期の打込接（割石を用いた石積）二之丸櫓城に多く使われている】

二之丸中ノ段積石

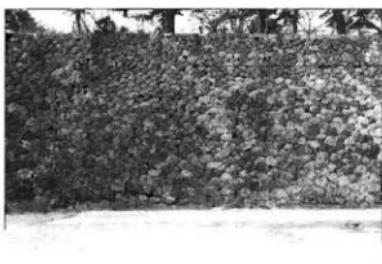


天守閣石垣
打込接上部は昭和の
解体修理の際の復原。



【江戸末期】

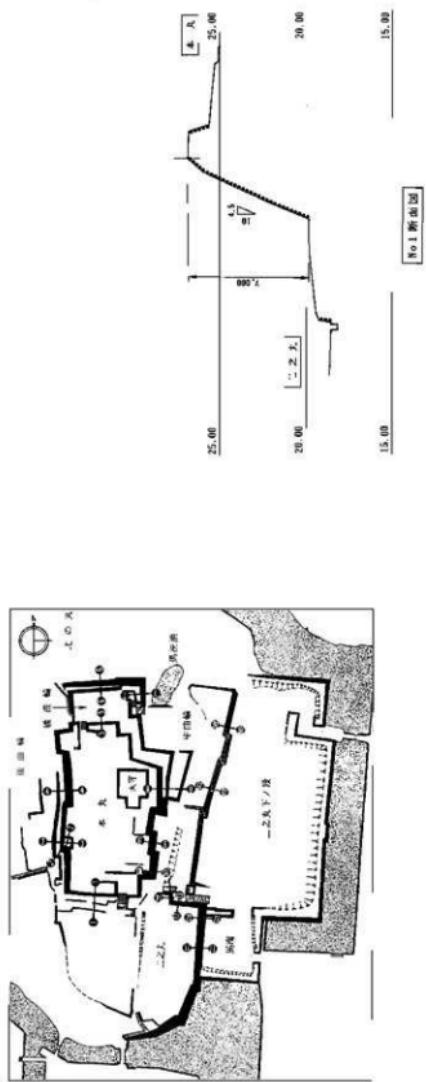
二之丸馬溜側高石垣



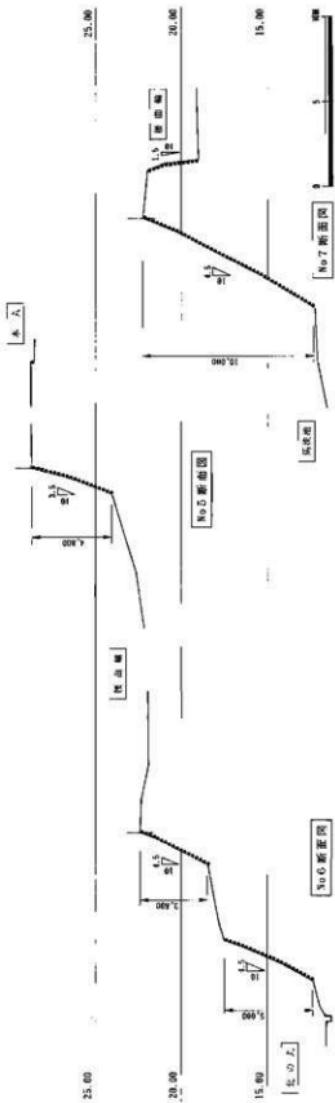
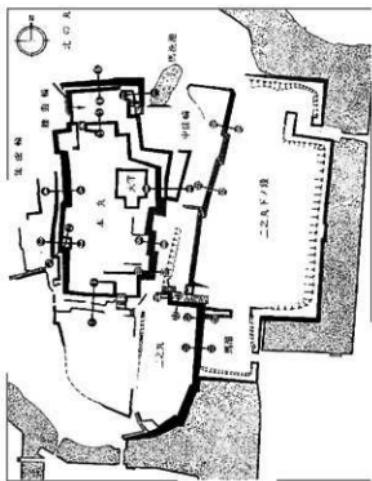
切石積

3-2. 石垣の規模

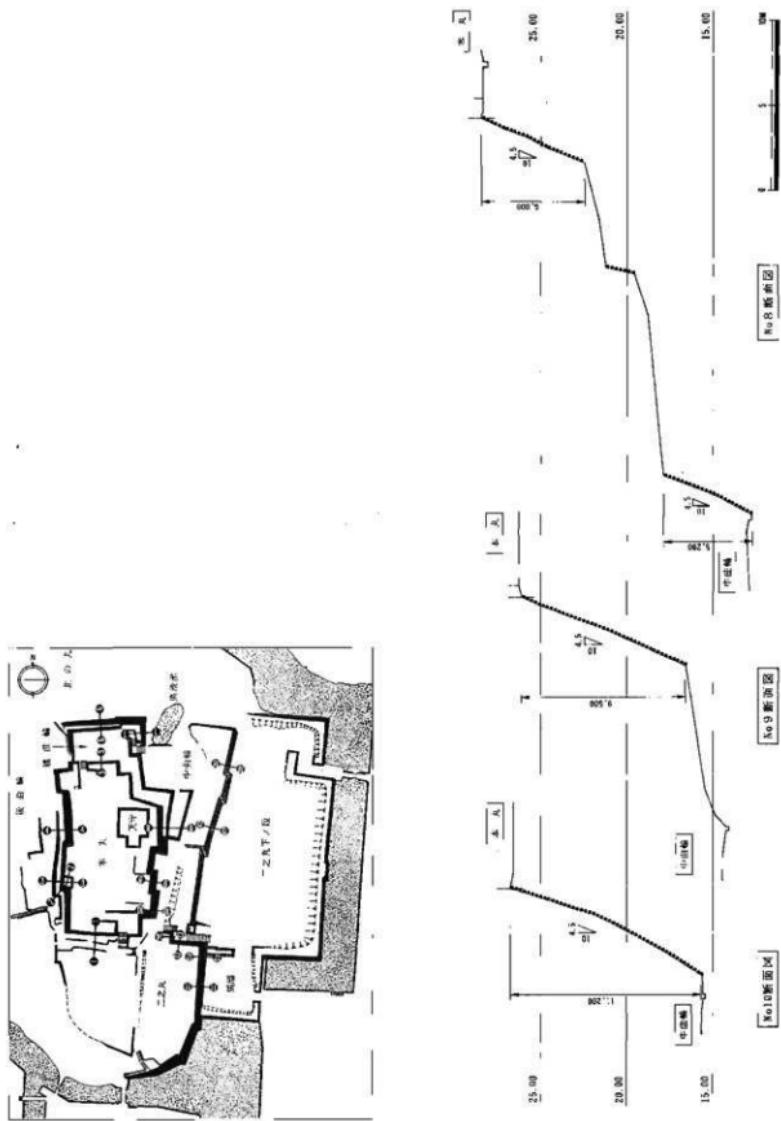
〈石垣現況断面図-1〉



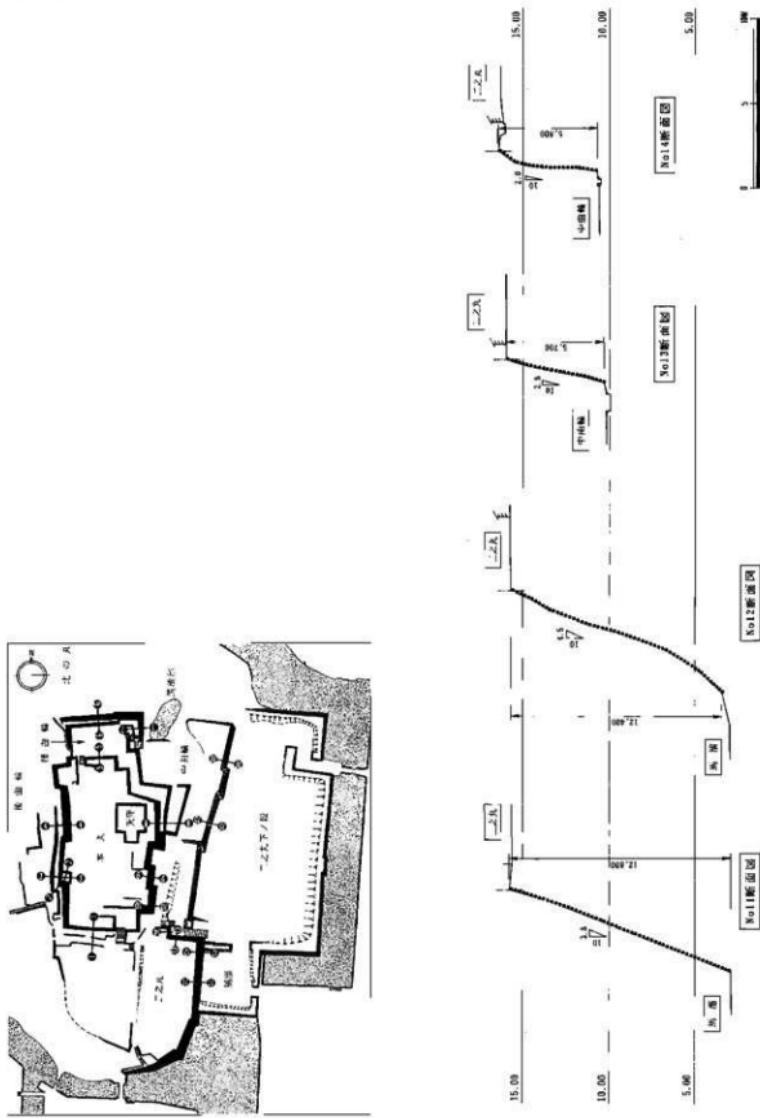
《石垣現況断面図-2》



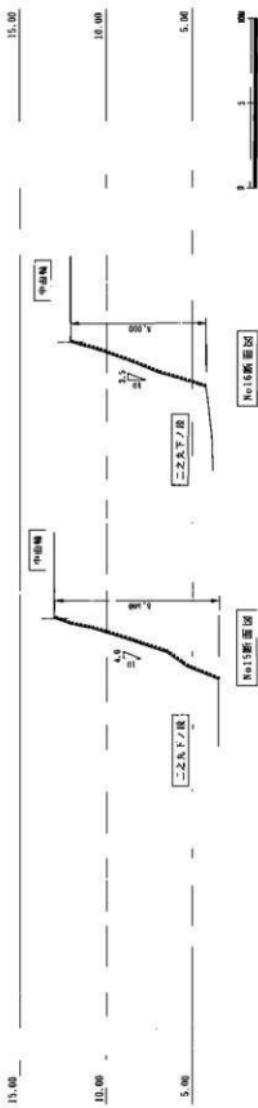
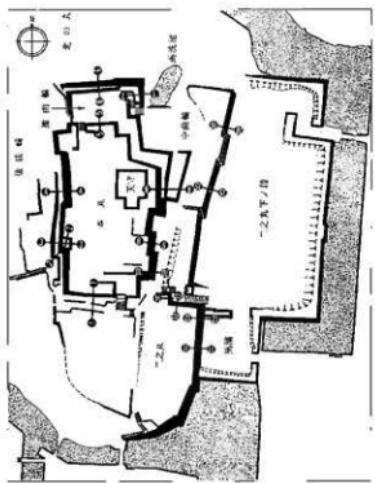
《石垣現況断面図-3》



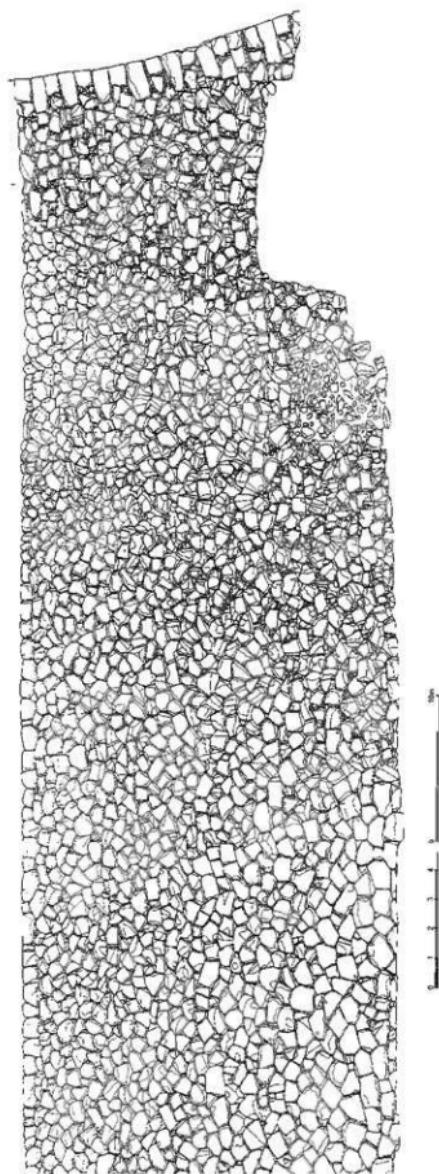
〈石垣現況断面図-4〉



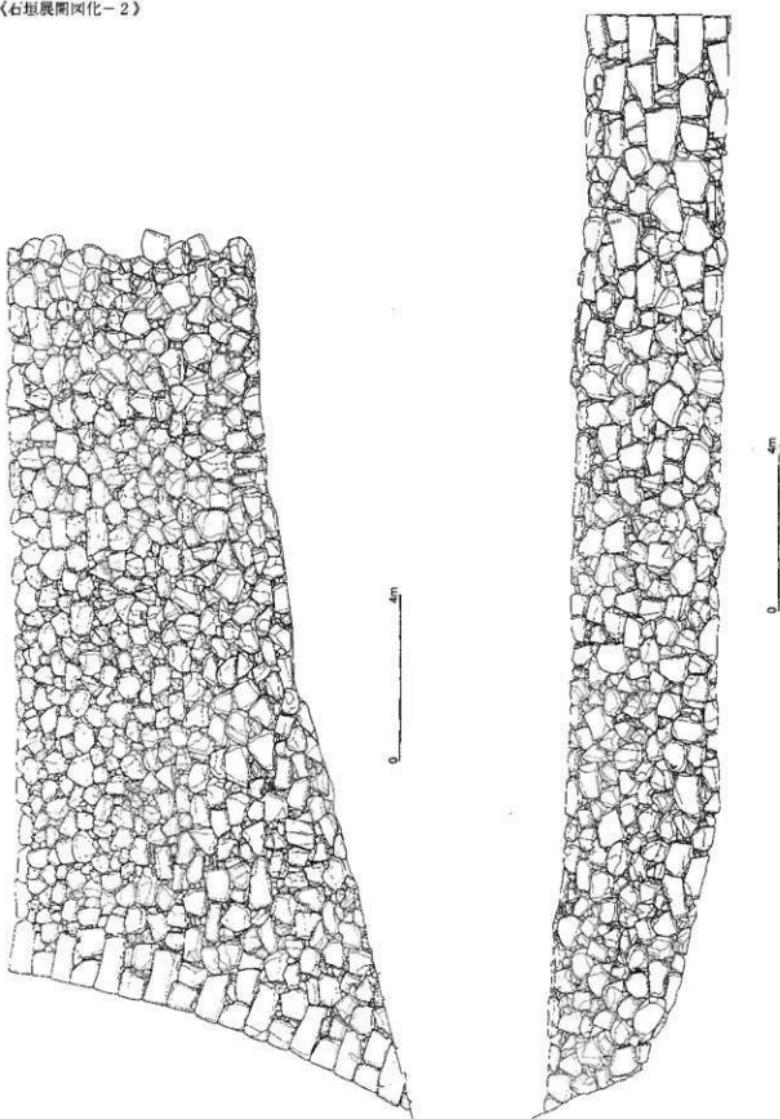
《石垣現況断面図-5》



《石垣展開圖化-1》



〈石垣展開図化－2〉



第4章 石垣の文献史料による分析

— 4 — 1. 文献絵図の分析

— 4 — 2. 純張による石垣の変遷

4-1. 文献絵図の分析

松江城に関する絵史資料については、江戸初期のものから明治時代まで、また昭和の年代に書き写されたものも加えると約25点が遺されている。絵図史料種類については、松江城の縄張を記したもの、城下図また別に貴重な史料として17世紀末の城郭内建物の詳細を記した『竹内右兵衛書付』が遺っている。

一般に江戸期の城郭等絵図の存在は、正保年間、江戸幕府の全国城郭調査から始っている。現在、国立公文書館に遺る絵図は、その時の幕府に提出した添付絵図である。それ以後、ほとんどが災害や破損に伴う修理願書に添付された絵図である。松江城の場合、「堀尾時代城郭及び城下図」、「雲隠両国大守京極若狭守忠高公御時代城下略図」等の正保以前の絵図の存在が認められるが、これらの絵図が何のために描かれたのかはっきりせず、描かれている内容についても江戸末期のものと推定され、後世に書き写されたものと考えられる。また明治以後に描かれたものについては、推量や憶測されたものが多く、その内容について誤っている所が見られる。

この石垣の変遷を追う報告で採用する史料としては、幕府に提出した絵図、またはその控図として正確に判断できるものについてのみ、その変遷過程を調べるために資料として採用し、後世書き写されたものや、明治期に描かれた鳥瞰絵図など推測が加わっているものについては除外することとした。

これらの検討の結果、歴史史料として採用した絵図は、最も古いもので『松江城正保年間絵図』から、明治初期の『松江城測量図』まで計8点とした。

尚、松江城測量図は、明治初期廢城以後、陸軍省に移管された時に全国的に陸軍省が測量、作成されたもので、廢城当時の城郭縄張を示すものとしては、より正確なものである。松江城正保年間絵図は、国立公文書館所蔵の『出雲国松江城絵図』を、延宝2年から元治年間までの計5点の絵図は、災害に伴う復旧願書または構等新設に伴う願書である。

〈写真資料〉



二之丸・二之丸及び天守の古写真（明治初期）

《史跡松江城関係古占碑文一覧表》

番号・分類	名 称	年 代	寸法(縦×横×高cm) 形態	所 藏 者
1. 文 獣	竹内右兵衛書付	元禄4~5年頃(1692~2年)	7.3×15.6 和本 1冊	城山公園管理事務所
2. 文 獣	御城内懇意箇	不詳	22.6×16.2 和本1冊 31枚	国立史料館
3. 建物図	松江城櫓張の圖	17世紀前半頃	12×15 1枚	旧松江区書館
4. 建物図	松江城櫓張区	元禄5年頃(1692頃)	193×170 (226×176) 紙軸1幅	城山公園管理事務所
5. 建物図	一海丸三層御城圖	江戸時代中期以降	79×64 1枚	石原明氏
6. 建物図	平家二ノ九米倉及萩出屋敷之圖	19世紀半頃(天保年間~1830~43以降)	24×29.6 1枚	中村一貞氏
7. 建物図	二丸廻及役所松平家輔理之圖	19世紀半頃(天保年間~1830~43以降)	24×31 1枚	中村一貞氏
8. 建物図	御花畠田南御茶屋街御造	19世紀半頃(天保年間~1830~43以降)	不詳	野津隆氏
9. 建物図	松江三ノ九御殿内分間圖	19世紀半	7.2×10.2 1枚	(出雲松江町城所蔵)
10. 城郭図	難波尾家松江城郭之圖	慶長16~寛永10年頃(1611~33頃)	24.1×30.7 1枚	中村一貞氏
11. 城郭図	出雲国松江城之繪圖	延宝2年(1674)	85×124 1枚	城山公園管理事務所
12. 城郭図	元文3年(1738)	76×87.5 1枚	城山公園管理事務所	
13. 城郭図	松江城郭古圖	安永7年(1778)	74×89 1枚	城山公園管理事務所
14. 城郭図	松江城城郭圖	寛政5年(1793)	50×73 1枚	山本康雄氏
15. 城郭図	御本丸惣門面	大正11年(1922)	72×83 紙巻 1枚	城山公園管理事務所
16. 城郭図	第二・三丸御花畠共略絵面付	19世紀頃(天保年間~1830~43以降)	90×134 1枚	野津隆氏
17. 城郭図	松江城二ノ丸金匱	19世紀頃(天保年間~1830~43以降)	21×30 1枚	(松江市立書類文表紙所蔵)
18. 城郭図	安政二辰酉月改三丸惣門御面圖	安政3年(1856)	159×140 1枚	国立史料館
19. 城郭図	山雲區松江本城圖	元治元年(1865)	75×88 1枚	国立公文書館
20. 城郭図	松江城城郭圖	元治元年頃(1865頃)	79.5×52 (90×112) 紙軸1幅	中村一貞氏
21. 城郭図	西御丸	19世紀後半(奉末頃)	48×68 1枚	田中弘次氏
22. 城郭図	松江城御暁圖	明治7~8年頃(1874~75)	不詳	国立国会図書館
23. 城郭図	伊丹松江城御暁圖	明治10年(1877)	6×12 1枚	(雲瀬職制所蔵)
24. 城郭図	登り御暁下口御手本丸水之了御門口地絵面圖	明治14年4月写(1881)	不詳	小笠昌一氏
25. 城郭図	松江城田城略絵	明治21年(1888)	不詳	(松江城資料目録所見)
26. 城郭図	松江城郭圖	明治42年(1909)	59.3×120 (226×176) 紙軸1幅	安立正氏
27. 城郭図	松江亀千鳥城	明治42年頃(1909)	22.6×36 1枚	城山公園管理事務所
28. 城郭図	松江城郭圖	明治45年(1912)	37×51 1枚	(雲瀬職制所蔵)
29. 城郭図	雲州松江城圖	不詳	不詳	国立公文書館
30. 城郭図	出雲郡松江城(繪圖)	不詳	不詳	国立公文書館
31. 城郭図	城内繪面圖	不詳	不詳	国立史料館
32. 城郭図	丸御門御広間繪圖	嘉永二~三月改(1850)	95.2×108	国立史料館
33. 城郭図	出雲国松江城圖	大正11~14年(春)(1922~24)	不詳	兵庫県立歴史博物館
34. 城郭図	(仮称)二ノ丸絵面圖	不詳	不詳	兵庫県立歴史博物館
35. 城郭図	旧松江城附近之絵圖	不詳	不詳	兵庫県立歴史博物館
36. 城郭図	出雲国島根郡松江城圖	不詳	不詳	兵庫県立歴史博物館
37. 城郭図	御三丸御指圖	一枚之内	122×129 1枚	国立史料館
38. 城郭図	御本丸二ノ御丸三ノ丸共	三枚之内 不詳	163.5×185 1枚	国立史料館
39. 城下図	鹿児時代城郭及び城下図	元和3~寛永10年(1617~33)	141×117 1枚	鳥取大学付属圖書館
40. 城下図	豊前國大守京極好忠守高公御門城下略図	寛永11~14年頃(1634~37頃)	52×9.5 1枚	野津隆氏
41. 城下図	京極氏山城跡	寛永11~14年頃(1634~37頃)	不詳	(雲瀬大字数録所見)
42. 城下図	松江城下保半闘門繪	正保1~4年頃(1644~47頃)	268×320 1枚	国立公文書館
43. 城下図	松江城下保半闘門繪	正保1~4年頃(1644~47頃)	300×330 1枚	乙部次太氏
44. 城下図	(仮称)松江城及城下古圖	寛文10~家永7年頃(1670~1710頃)	150×102 1枚	三谷民徳氏
45. 城下図	松江城下之圖	享保元年頃(1716~35頃)	101×145 1枚	城山公園管理事務所
46. 城下図	(仮称)延享元年頃松江城下圖	延享元年頃(1744頃)	80×91.5 1枚	石原利氏
47. 城下図	絵図(松江御城区)	延享2~7年(1745~47)	158.5×165 1枚	鳥取県立図書館
48. 城下図	雲州松江(采名)	江戸時代中期頃	95×100 1枚	国立公文書館
49. 城下図	雲州松江	江戸時代中期頃	26.7×37 紙軸1巻	山川興造氏
50. 城下図	(仮称)松江御城下之区	江戸時代中期頃	不詳 1枚	乙部次太氏
51. 城下図	(仮称)松江千鳥城下之区	寛延年間(1748~50)	188×175 1枚	大江出版社
52. 城下図	松江之圖	文化8~14年(1811~17)	107×136.5 1枚	鳥根大木付属古書館
53. 城下図	雲瀬上族屋敷之圖	文久2年頃(1861~64頃)	不詳 1枚	(雲瀬職制所蔵)
54. 城下図	雲陽御家城下図面	19世紀後半(幕末頃)	35.5×50 1枚	山川興造氏
55. 城下図	雲州松江龟山城削除圖	19世紀後半(幕末頃)	46.5×59.5 1枚	松江市教育委員会
56. 城下図	山雲園松江街之圖	明治10年(1875)	52×62 1枚	鳥取県立図書館
57. 写 真	明治初年天守閣写真	19世紀後半(明治初年)	11.6×16.7 1枚	城山公園管理事務所
58. 写 真	明治初年天守閣二ノ丸三ノ丸写真	19世紀後半(明治5年)	9.5×14.5 1枚	(東京府所蔵)
59. 写 真	明治初年天守閣一ノ丸御郭写真	19世紀後半(明治8年以前)	8.7×14 1枚	城山公園管理事務所
60. 写 真	明治治初年三ノ丸御郭写真	19世紀後半(明治8年以前)	9.0×14.5 1枚	城山公園管理事務所
61. 写 真	明治初年二ノ丸城下写真	19世紀後半(明治8年以前)	9.0×14.4 1枚	城山公園管理事務所

◆史跡松江城関係年表

西暦	和年号	城主(藩主)	出来事	災害関係・崩壊・改修等関係・関係文献・関係絵図・備考
1600	慶長5	徳川吉晴 (豊田月(城主))	山喜・徳岐2ヶ所24石の岡守に転封	
1601	慶長6	徳川忠氏 (豊田月(城主))	父吉晴の隠居に伴い移封	
1604	慶長9	徳川忠晴 (豊田月(城主))	父忠氏の死去に伴い葬封。 寺廟の後見役となり、国政を見る。	
1607	慶長12		松江城の工事に着手し、御殿の造営。 本丸・二之丸の地浚しの完成。 資材運搬用道路、橋梁の建設。 松江町(殿町)・舟衣町・内中原町の造成。	
1608	慶長13		木丸の石垣、天守閣の土台石垣、内側等の工事を着手。 天守台の完成。半貫山の削除。	
1609	慶長14		天守閣の造営。 二之丸坂口、大手門枠形、大手門の堀の石垣、二之丸御殿の建設着手。	
1610	慶長15		天守及び二之丸御殿の竣工、堀の完成	
1611	慶長16	(松江城主)	元末次城主の島田山に基城完工(この時に城及び天守閣が成立)。 竹尾城(殿町・舟衣町・内中原町)の完成と広瀬川口(西町下)・切の武士の移転。	「今本丸にあたりて大人の堀と云所あり。此島石垣築けども毎夜に崩るる事數度。よりて掘りれば人骨を発する。」 「本丸あり、中庭・今の大掛かりの所也。此堆を以て櫻井所と定め給うと云へり。」 「さりざり井、此所大人の堀掘出した所、其口に井を深く掘り、頭の施にかたり後出た名とす。此所御堀矢倉の下なるべし。」 【註】『対馬大歴』
1612	慶長17		松江城の外郭が完工。城下町の整備を実施。	
1615	元和1		大名の心身・警護修繕の制限、居城新築の禁止等の法令を制定。	『武家諸法度』 【施尾時代城郭及び城下町】1617~33(元和3~寛永10)年頃
1634	寛永11	徳川忠高	堀尾氏の断絶に伴い、若狭国小浜より転封。	『當國の國守・守京御者接守忠高公御時代城下略図』1643~37(寛永11~14)年頃
1635	寛永12			国内は豪雨、大洪水。これにより日本海に注いでいた斐伊川が河道高に注ぐようになり水学者、山川昌質を招き、斐伊川の治水工事を実施。(この時に築かれた人手土手・若狭土手)【農鑑記】
1638	寛永15	松平直政	京極氏の改易に伴い信濃国松本より転封。大工の竹内右兵「竹内右兵衛作行」(寛永25~30年の余命野体修繕の半には南に命じて松江城天守閣の全面解体修理を実施。 (この時の火災跡の難形が現存)	京極氏の改易に伴い信濃国松本より転封。「竹内右兵衛作行」(寛永25~30年の余命野体修繕の半には南に命じて松江城天守閣の全面解体修理を実施。 (この時の火災跡の難形が現存)
1644	正保1		幕府が諸大名に閑院同作成・提出を下す。	【註】『松江城正保年間文書』1644~47(正保1~4)年頃
1658	万治1		隣城の後鳥羽院御院の格進。	
1662	寛文2		出雲太社の造営(~1660)(寛文4年まで)	
1666	寛文6	松平綱康	二第・近東を高麗3万石に、三弟・隆致を母墨1万石に、各々分封。路上奉禄制度を「遂行免行」から「嚴米支給」に変更し、二ノ丸に家臣を、舟衣町に片支配を遣る。	
1673	寛文13			6月白鷹大火
1673	延宝1			9月白鷹中町・寺町・和多町大火
1674	延宝2		6月豪雨により宍道湖、龍川反乱し、洗合土手・大橋・大津橋・二之丸大手之手堀高さ堀岸半横木半去六月之溝水ニ崩中焼』「一・二之丸大手之手堀高さ堀岸半横木半去六月之溝水ニ崩中焼」「一・二之丸大手之手堀高さ堀岸半横木半去六月之溝水ニ崩中焼」 【註】『松江城之詮』1674(延宝2)年	
1675	延宝3	松平綱近	二之丸に居住し始める。	
1676	延宝4			10月 白鷹大火。天守閣修理。附駒板風より墨書免火。 【註】『延宝年譜』
1677	延宝5		7月 松江城の東北に清渠を掘削(元新町)。松江古志恩を開闢(美用ニンジン栽培地)。	大坂七兵衛による神戸川・寺西瀬の治水、高瀬川の開削。
1679	延宝7		越後源の老臣萩上主馬が長子長助、次子条之助と共に松江藩へ配流。	11月 二之丸下段に萩上長屋を増築。
1680	延宝8			改作。天守閣の部分的修復(延宝~元禄年間) 【註】『重要文化財松江城天守修理工事報告書』
1686	貞享3			8月 大震震。
1688	元禄1			6月 濃霧、洪水で民家・堤防の損壊が頻発。【出雲私史】
1689	元禄2			5・6月 洪水。【出雲私史】
1691	元禄4			大潮、洪水。【出雲私史】『松江城純張圖』1692(元禄3)年頃

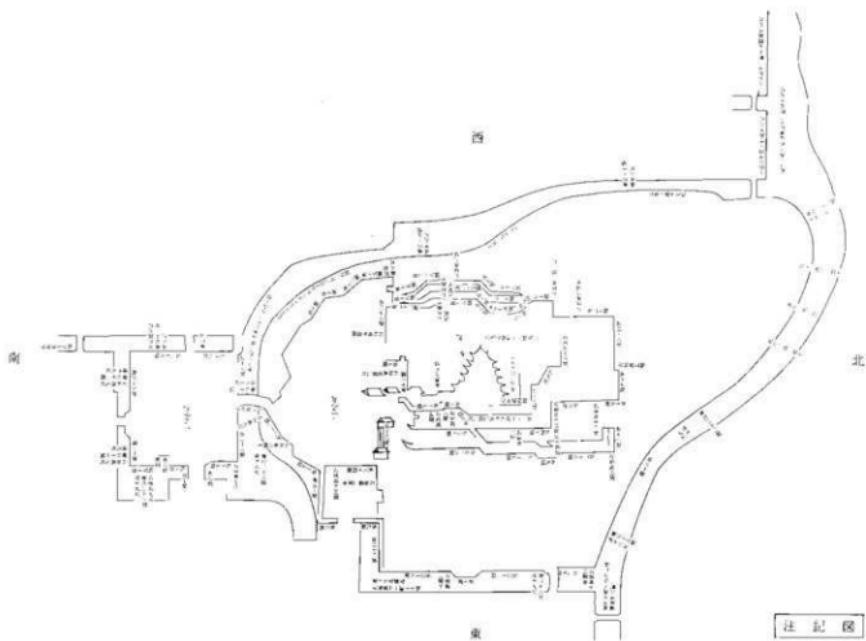
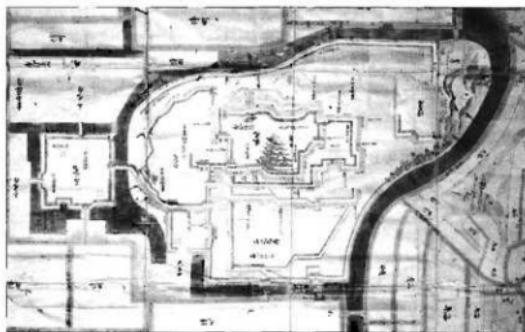
番号	和年号	城主(藩主)	出来事	参考
1702	元禄15	松平吉通		
1704	宝永1	松平吉通	幕府より萩原主馬の長子氏部、次子允之助が召される。	
1705	宝永2	松平吉通		
1706	宝永3			6月 洪水。8月 大風。
1707	宝永4			8月 大風。10月 大地震。
1711	正徳1			9月 松江石鶴町大火。
1714	正徳4			8月 大風のため石垣・堤防等が破壊。近辺の宿泊に迷惑する人相手。8月27日 大風により府城の石垣が崩壊。 「出出私史」
1716	享保1			
1720	享保5		西川諱の下拓工事を実施、伊豆墨新田、久野原新田が完成。 荒島の日白浦の十拓ノ事が完成（ト葉新田）。	8月 外中屋町、因幡町、月照寺が火災。2月3日守天守修復之奉井上河内守に内意を得た。『人蔵公年譜』「松江城下之図」享保年間（1716-35）年頃
1721	享保6			4月 舟門院山火、北田町火災。7月 大風雨。
1722	享保7			6-7月 大風雨、洪水。9月 横浜町山火。
1728	享保13			12月 横浜町山火。
1729	享保14			大雨、洪水。橋梁多處流失。
1731	享保16	松平宗矩		
1732	享保17			人維寄（西日本地方）。~1733年まで。
1733	享保18		薩摩後鳥羽上皇御陵社の大修理。	
1736	元文1			10月 大津波。
1737	元文2			3月11日幕府より「守天守ばかりの修復には絵図面をつげずともよいが、石垣の崩れた時は絵図面をつけて何うこと。」旨の清部有り。早々天守の修復の届け出をした。 『人蔵公年譜』
1738	元文3			3月11日幕府の月番老中守天守閣の修復の届け出をした。 『人蔵公年譜』「中臣藤南之方源下石垣巻々芦高寺穴開埋大同磨削申候」 『松江城移築』1738（元文3）年
1739	元文4			8月 大風雨。天守閣の全面的修復？（元文～寛保年間） 『重要文書』「松江城天守修理工事取扱書」
1742	寛保2		出雲大社の造営工事～1744（延享1）年まで。	松江城大祓。修遷に寄せ木を用いる。 「仮称」延享元松江城下図 1744（延享1）年頃。
1745	延享2			8月 大閑。
1747	延享4	義田方、義田法（農業改良及び農民救済）の新設。~1763（宝暦13）年まで。		『絵図（松江御城圖）1745-47（延享2-4）年
1748	寛延1		亂薦禁止の法令の発布。	
1750	寛延3	泉府方（金融機関）の新設、しかし数年で挫折。小寅方（原料種の栽培奨励、生糞糞の製造）を泉府方併せて新設。		
1759	宝暦9		笠置方（耕作等の奨励品の贈送奨励）の新設。	
1760	宝暦10		比良山門の大修理～1762（宝暦12）年9月まで。	大雨、雷電、洪水等により民家・橋梁の被壊流失甚大也。 『出雲松江』江戸時代中期頃
1767	明和4	松平治郷	家老朝日舟波茂保の「松江藩勤立派の改革」1767（明和4）～1782（天明）年。審議会の統制のための諸法令の発布。	『三九分類絵図』江戸時代中期以降。 『三九分類絵図』江戸時代中期以降。
1770	明和7		8月 土木工事（大河改修）を実施～1773（安永2）年まで。諸途の復修も実施。 城下大いの諸機能を板垣から土間に改善・復旧。	大雨、洪れ多し。「出雲松北之方源下石垣巻々所高サ武闘横二間半削申候」 『松江城郭古図』1778（安永7）年。
1778	安永7			
1782	天明2		天守の火災1783～88（天明3-8）年の間	天候不順と洪水。以降洪水多し。天明初期二年連続の大河と洪水多し（天明の鐵道）。
1785	天明5		3月 清原太兵衛による佐紀川の開削の実施～1787（天明7）年9月まで。通川郡三勝一の川道を実施。	

西暦年号	和年号	城主(藩主)	出来事	災害関係／崩壊・改修等関係／関係文献／調査結果／備考
1806	文化 3	松平齊恒		
1808	文化 5			船町から出火。『松江之図』1778(安永7)年
1815	文化 12			天守閣の部分的修復。 『重要文化財松江城天守修理工事報告書』
1821	文政 4			人風呂洪水。
1822	文政 5	松平齊景		
1825	文政 8			2月 石橋町出火。5-6月大雨。
1828	文政 11			5-6・8月大雨洪水。
1829	文政 12			7月暴風雨。『御本・二・三九御花御共略絵面図』19世纪 頃 1830-43(天保年間)以降。
1831	天保 2		2月、坂川郡新川開削(甲斐川の氾濫防止)～1832(天保3) 年2月まで。	
1832	天保 3		天保の大飢饉～1837(天保8)年まで。	9月 囲内洪水。
1833	天保 4			凶作
1835	天保 6			6月 霧雨域下浸水、秋に至り再洪水。
1836	天保 7			4月 白浦本町・寺町出火(人情費諸中に付大洗錢)夏浦内 洪水(甲斐の飢饉)。12月 白浦瀬司・大工町・大神町、 寺町・伊勢町・御手船場が火災。
1838	天保 9			気候不順、山水頻発。
1840	天保 11			1天保十・牟子牛算月見御成、石垣の撤去シ候□御河下下繪 本絵図ハ御前御ニ口口』『昭和27年3月 岩田翁根写』と 併し書き有り。『御本丸绘図』1840(天保11)年。
1844	弘化 1			気候不順、出水頻発し、横債。
1845	弘化 2			6-7月 洪水、賀家、横債、堤防決壊。
1847	弘化 4			5-6月 洪水、山水、賀家、横債、堤防決壊。
1848	嘉永 1			夏秋 暴雨洪水。
1849	嘉永 2			4-6月 山水、大風。
1850	嘉永 3			8月 暴風雨、大風不順。
1852	嘉永 3			11月 横浜町・諏訪町、松江分大火。
1853	嘉永 6	松平定安・直宗	松江藩知事1869(明治2)～71(明治4)年。	『松江城元治元年絵図』1864(元治1)年。
1870	明治 3			天守閣屋根の部分的修復。 『重要文化財松江城天守修理工事報告書』
1871	明治 4		松江城の城郭と武器は兵部省(陸軍省)の所管、乱花組は 島根県の所有となる。	
1872	明治 5		松平直宗の旧邸を改造して島根県庁に暫定的に使用。	
1875	明治 8		5月 広島鉄道が松江城を民間に払い下げた。天守閣の保存 運動が勃発し天守閣の保存が決定。	8月 天守閣を除く、櫓・矢倉・多門・櫛・石垣・門・蔵、 書院・広間・長廊・書所・音戸などを撤去。 『山葉門松江市街之図』1875(明治8)年。
1885	明治 18		松江城一帯を松平家に払い下げた。	『松江城郭記』1909(明治42)年。
1894	明治 27			天守閣の全面解体修理。『松江龜田千鳥城』
1900	明治 33			10月 木鍛久右衛門が松平家より三之丸を永代借地し、松 江団書館新舎を建設。
1903	明治 36			三之丸に貴重閣が完成(明治天皇山陰御行營時の施設)。
1909	明治 42			4月 三之丸に島根県庁を新築。
1927	昭和 2		松平家は天守閣及び松江城一帯を松江市に寄附。	
1935	昭和 10		5月 天守閣が国宝から重要文化財に改称。	
1950	昭和 25		5月 天守閣が国宝から重要文化財に改称。	天守閣の全面解体修理～1955(昭和30)年まで。 『重要文化財松江城天守修理工事報告書』
1952	昭和 27		松江城は松江市初の都市計画公園として計画決定。	
1959	昭和 34		城山公園の区塊が決定。	

《松江城縄張変遷史料採用絵図一覧表》

分類	名 称	年 代	備 考	概 要	規 格 等	所蔵者
建物 絵図	松江城構張図 (全体図)	元禄5年頃 (1692)	・1679~1704年 (延宝1~宝永7) 建物の増改築の貼紙あり。	・縄張は正保絵図と異なる。(水 ノ手内、大手内、二之内、三之 門付近)	193×170 掛軸1幅 (226×176)	松江市 経済部 (松江城天守閣)
縄張図	松江城正保年間絵図 (全体図)	正保1~4 年頃 (1644~47頃)	・国立公文書館原図所蔵	・確実な絵図としては最古である。 ・天守閣の形状が現存と異なる。	300×300 1枚	乙部式次 氏
*	出雲国松江城之絵図 (全体図)	延宝2年 (1674)	・石垣破損届出書付図	・天守閣の形状は、松江城正保年 間絵図と同形。 ・人手虎山の石垣(高さ1間半・横2 間半)と、三之丸櫓際(高さ6尺8 寸・横11貫半)の改修届記載。	85×124 1枚	松江市 経済部 (松江城天守閣) 絵図No9
*	松江城郭図 (全体図)	元文3年 (1738)	・石垣破損届出書付図	・天守閣の形状が現存と同形。 ・中曲輪南方(高さ2間・横3間半) の改修届記載。	76×87.5 1枚	松江市 経済部 (松江城天守閣)
*	松江城郭古図 (全体図)	安永7年 (1778)	・石垣破損届出書付図	・中曲輪北側石垣(高さ2間・横3 間半)の改修届記載あり。	74×89 1枚	松江市 経済部 (松江城天守閣) 絵図No5
*	御本丸絵図面 (全体図)	天保11年 (1840)	・石垣破損届出書付図 ・模写図(昭和27年3月)	・二之丸石垣の改修記載(規模不 明)あり。	72×83 巻紙1枚	松江市 経済部 (松江城天守閣) 絵図No18
*	出雲国松江本城図 (全体図)	元治元年 (1865)	・木製新設届出書付図	・北西堀際(高さ1丈(10尺)・延長 471間)北から西まで新設。	75×88	国立公文書館
*	松江城測量図 (全体図)	明治初期頃	・廃城以後、陸軍省に移 管された時に測量され たもの	・主に縄張についてS:1/1,200で の測量図。主な石垣断面まで測 量あり。		国立国会図書館

《参考資料一出雲松江城絵図：正保絵図 第2集》



■『松江城縄張図』 延宝7年～宝永元年（1679～1704）

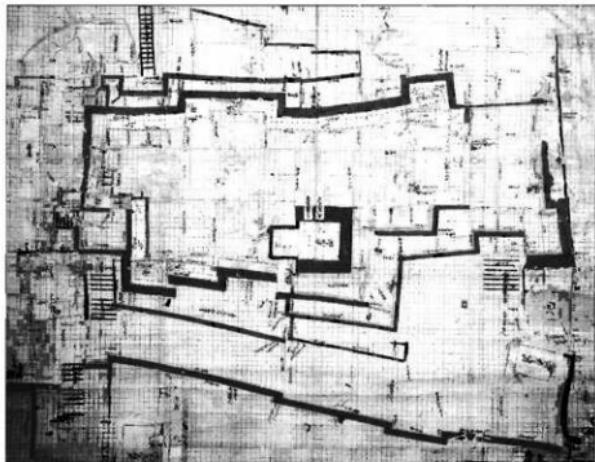
松江城山事務所所蔵

本図は、本丸・二之丸・二之丸下ノ段の郭平面図に正確に1間ごとに方眼を引き、建物平面・石垣寸法を記し、縮尺は正確に1/200を用いた割付図である。製作年代及び作者は不詳であるが、その記述から縄張図製作年代は1679年から1704年の間であることが推測できる。

城郭の平面図は、本丸・二之丸下ノ段が中心であって、三之丸が除かれているため、松江城全体の平面とは言えないが、記されている平面は正確に把えており、建造物の配置の方角・間取り・柱の位置・庭下あるいは主要建物の距離などを示している。また、主要建造物には名称を附し、主要部分には間数も記入している。この他、長屋・門・庭下・池も紙片を貼付している。17世紀末（元禄5年）1692年頃に一応成立した後、18世紀以降において貼り紙が加わったとみられる。本丸中の御台所、二之丸中の御番所・御風呂屋・長屋・小人屋・神谷勘左衛門居所・荻田民部郎屋舗の上に貼り紙がある。

この絵図で重要なことは、各郭の建物の柱割が詳細に描かれていることもあるが、石垣が方眼の上に青紙を規模に応じて大小に貼り、石垣高はもとより、法（のり）・出（水平距離）を主要な所に応じて記してある唯一の史料である。加えて他の絵図には、不明な郭の腰石垣や階段の規模など、詳細に描かれていることがある。

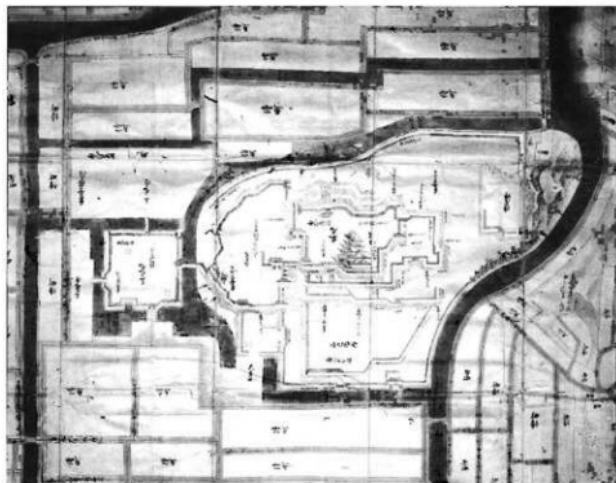
現在遺る石垣との比較においては、ほとんど規模等で大きく変化するところは見受けられないが、小さな腰石垣や石階段などが消失していることが窺える。



松江城縄張図 〔元禄5年頃（1692頃）〕

■『松江城正保年間絵図』 正保年間

『松江城正保年間絵図』については、乙部次氏が所蔵しているが、それは控図で、国立公文書館に「山雲閣松江城絵図」として保管されている。正保年間絵図は、松江城とその周囲の城下町の町割図が描かれ、本丸・二之丸・三之丸と天守閣、各主要櫓と門及び堀が描かれている。現状との比較では、繩張においては北側、出丸が「待屋敷」として区画されているだけで大きな変化はない。最も異なる点は、その虎口である。ほとんどが平入りで、現状のように喰違いや樹形虎口・石垣の形状を示す例はない。また、天守閣を詳細に見ると、千鳥破風の規模など大きく異なっていることが特筆される。



松江城正保年間絵図 [正保1～4年(1644～47)頃]

■『御城内惣間数』 明和2年(1765)頃

国立史料館所蔵

昭和25年、国立史料館が松平家から取得した史料の一点で、右和綴じ、紙質は和紙で31枚に墨書きで城郭建築物及び名称、寸法、形態について記載してある。記載の順序及び内容は、以下の通りである。

①御本丸

- ・御天守：柱数、むな札数、高さ、一重目から五重目までの平面規模、戸の高さ、天守台石垣の平面規模、段階、狭間、窓の数、御玄関（付櫓）の寸法、石垣の高さ
- ・御垣櫓：平面規模、形態、石垣の高さ、法、根長
- ・御多門：平面規模
- ・御武具櫓：平面規模、形態、石垣の高さ、法、根長弘化三年五月廿日改の張り紙あり
- ・御多門：平面規模、石垣の高さ、法、根長
- ・一ノ御門：平面規模、形態
- ・御弓櫓：平面規模、形態、石垣の高さ、法、根長
- ・御多門：平面規模、石垣の高さ、法、根長
- ・西之御櫓：平面規模、形態、石垣の高さ、法、根長
- ・御鉄砲櫓：平面規模、形態、石垣の高さ、法、根長
- ・御城多門：平面規模、形態、石垣の高さ、法、根長
- ・乾御櫓：平面規模、形態、石垣の高さ、法、根長
- ・御多門：平面規模、形態
- ・瓦塀覆：長さ、形態、石垣の高さ、法、根長
- ・御鉄砲砲会所・出会所・瓦櫓覆：路次：平面規模、長さ、形態
- ・御本丸御多門：東西南北の長さ
- ・狭間：数量、形態

②腰曲輪

③二之御丸

④中 邸

⑤外 蔊

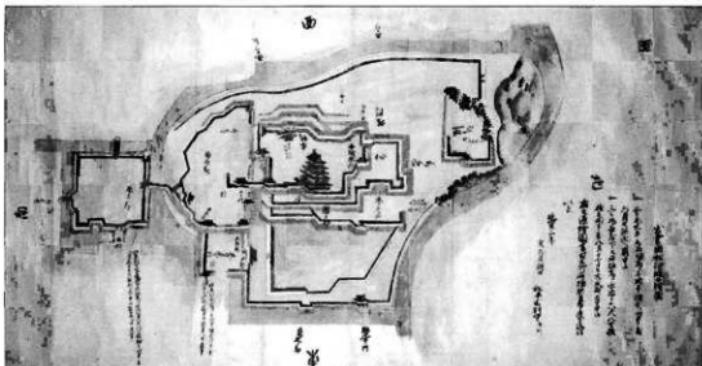
⑥張 紙

※上記同様、各々の形態、寸法等を記載。



■『出雲国松江城之絵図』 延宝2年（1674年）

この絵図は、延宝2年（1674年）6月、豪雨による洪水被害と、8月の大風雨による石垣破損に伴う修理願書である。「二之丸大手石垣」現在の櫓門左側石垣と、「三之丸石垣が崩壊・孕み出しのため、その側所に朱塗を引いて明記したものである。この絵図で描かれる縄張については、正保年間の絵図と大差なく、郭の名称が一部変わるもののはほとんど同じ形状を示している。天守閣についても、正保年間絵図と同形である。



出雲国松江城之絵図〔延宝2年（1674）〕

■『松江城郭図』 元文3年（1738年）

この絵図は、前年の元文2年12月、中曲輪（本丸東下、現在の腰曲輪）の石垣が「高さ二間、横二間半」崩壊したことによる修理願書である。

この絵図に描かれている松江城縄張は、石垣の形状は以前の絵図と異なり、現存する石垣形状とほとんど同形である。「正保年間絵図」「延宝2年絵図」と大きく異なる所は、城郭のすべての虎口である。特に石垣について、喰違いや樹形虎口が突然のように出現する。周囲を廻る折縛の規模や、舟着門や揚手門が整備されていることが窺える。天守閣も現存するものと同形である。

これらの変化は、これ以前に詳細に描かれた「松江城縄張図」（元禄5年頃）の図も同様であり、延宝年間以後元禄年間までの間に大きな改変があったことが考えられる。これ以後、縄張については今まで大きな変化はない。



松江城郭図 [元文3年 (1738)]

■『松江城郭古図』 安永7年（1778年）

この絵図は、中曲輪北方石垣「高さ二間、横三間半」が崩れたことによる修復願書である。文献史料では同年、「大雨、洪水多し」と記されていることから、それらによる破損と考えられる。この縄張絵図でそれ以前の「松江城郭古図」元文3年と異なる所はほとんどなく、「三之曲輪」の出入口虎口が整備され、新たに木橋（または廊下橋）3個所が新設されているのが発見される。

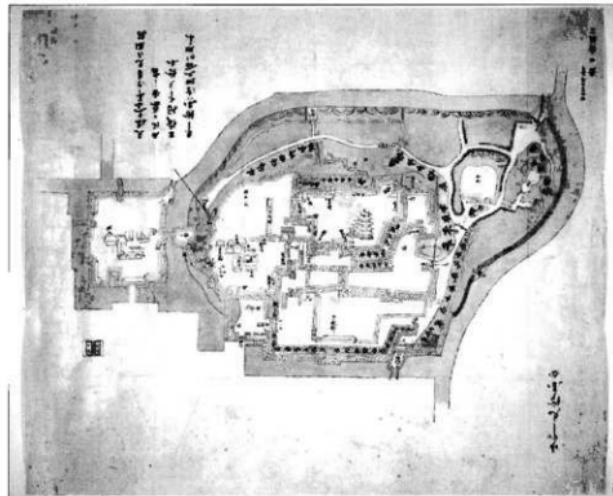


松江城郭古図 [安永7年（1778）]

■『御本丸絵図面』 天保11年（1840年）

この絵図は、昭和27年に模写されたもので、原本は不明である。しかし、記載されている内容が二之丸南側、月見櫓下の石垣の修理履歴であるためその写真を載せた。

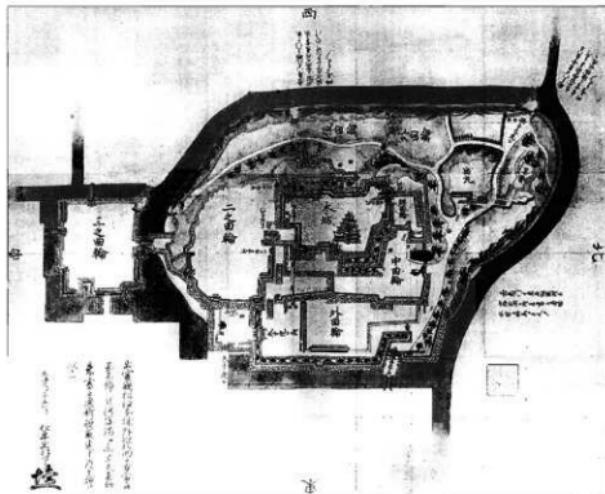
この測量図に記してある内容は、繩張のみを対象として、郭平面と主要な石垣断面図が実測されている。これで現状石垣と異なる点は、大手虎口の石垣の高さ(2,400mm)や、同石垣裏の現在消失している石垣の存在が認められることである。この測量図の価値は、正保半岡の繩張絵図と同様その魔域期の繩張を正確に記した史料として、より正確なものである。



御本丸絵図面〔天保11年（1840）〕

■『出雲国松江本城図』 元治元年（1865年）

この絵図は、国立公文書館が所蔵する元治元年に幕府に提出された願書である。内容は木橋新設届出書で、城郭北側の舟着門から西側、後曲輪まで施際に高达10尺の木橋を取り締りのため新たに設けたいとする届出書である。総間数約471間にものなもので、絵図に朱色で記載されている。この絵図に描かれている繩張は、それ以前のものと大差ない。

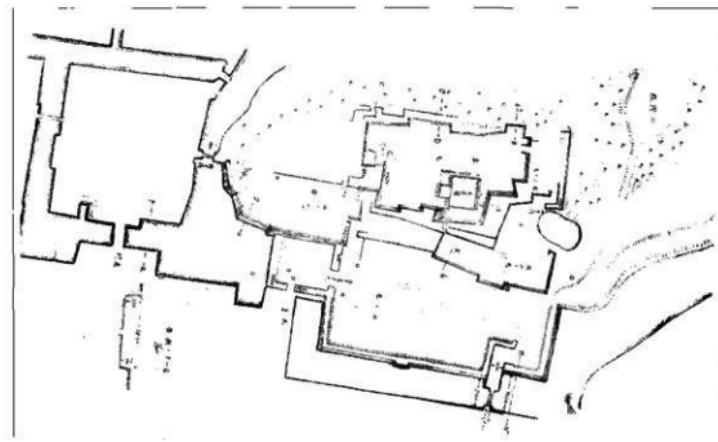


出雲国松江本城図〔元治元年（1865）〕

■『松江城測量図』 明治初期

この測量図は、全国の主な城郭測量図（明治7～8年頃）と同様廃城以後、明治初期陸軍省が所管している時（明治4～18年まで）の間に測量されたものと思われる。

測量は、陸軍省、築城郭本部が行い、方眼用紙に1/1,200で正確に実測した純張測量図で、現在は国立国会図書館が所蔵している。尚、その史料は、出雲国城郭調査編として簡単な歴史概要、現況及び写真1枚が添付してある。（それ以外の出雲城郭調査対象は、富田城・七尾城・浜田城の簡単な測量図も同封してある。）



松江城測量図【明治初期】

■『御城内絵図面』 明治5年（1872）9月

国立史料館所蔵

原図は縦2.92m、横3.77mの和紙に描かれた絵図で、城山北部の城山稲荷神社周辺から三之丸までの内堀内側の範囲が描かれている。

本図は全体にヘラで一辺4.0mmから4.5mmの方眼が引かれており、その上に建物や石垣、樹木等が茶色、緑色で着色してある。

二之丸下ノ段東南側には「御破損方、寺社修理方会所」と記された東西棟長方形建物一棟と「御小使長屋」と記された南北棟長方形建物一棟が描かれている。米蔵の状態からすればこの会所と長屋は加筆されたものと判断される。

堀は青色、石垣は黒色で克明に描かれ、建物は瓦葺きと檜皮葺きを区別して描かれている。二之丸曲輪の西端部の建物や書所が消去されており、また彩色を施された建物と輪郭だけで描かれた建物もあり、変遷のあったことを窺わせる。

本図の四周端部は、中央部分の紙とは別の紙で貼りてあること、折り目の線の状態から分かるが、これは端部が破損したため、別紙を貼りつけて補強したからであろう。

本図の左下に、

旧城内分ノ堀り

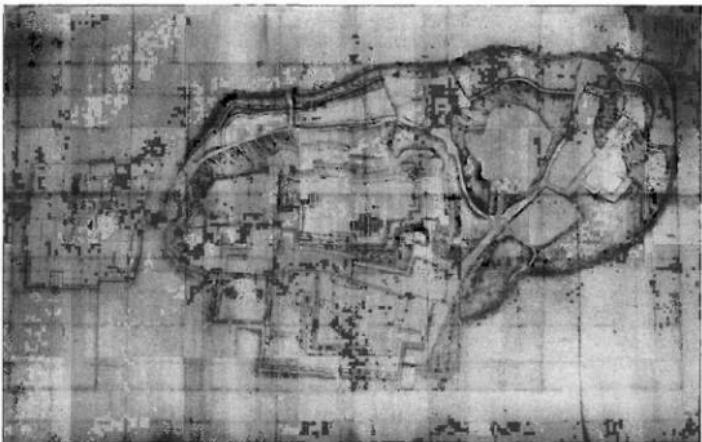
絶間数大凡七百

八拾四間

此町敷拾一丁四間

明治五年申九月兵部省工芸出シ控置

と墨書きがあり、明治5年（1872）9月に兵部省へ提出したもの控えの図であることが分かる。



御城内絵図面 明治5年（1872）9月

【建物史料】

1 竹内右兵衛書付 一冊

この書付は、寛永十五年（1638）松平直政が信州松本から雲隠の大守として松江へ入府した際、随伴してきた松江藩お抱えの御大工、御人工頭、奉行等にあたった竹内右兵衛（代々襲名）の城郭手引き書、実測記録書で、竹内の伝蔵になったものを昭和30年松江市に寄附された。

右綴じにした和本で紙数114枚からなる。内容は、略年表、家相之部、武家之部、松江城郭実測之部、奥書からなるが、実測之部は天守閣から始まり御本丸中、二御丸中、御本丸二丸ドノ段に所在する矢倉、太門、瓦塀等の規模、形態、特徴が詳細に記載されている。建物の変遷から成立は17世紀末頃と考えられる。

2 松江城縄張図 一図

この図は、紙面全体に墨で正確に一間毎に三分の方眼を引き、その上に城郭建造物や石垣を色紙で貼り付け、建物については一間毎の柱を墨の丸印で表し、石垣については高さ、法（斜距離）、出（水平距離）の寸法を主要なところに記した200分の1の配置図である。さらに、石段や井戸についても記載している。折り目が認められることから本来は折り畳んでいたものである。

建物の変遷から成立は17世紀末頃と考えられる。松江市所蔵。

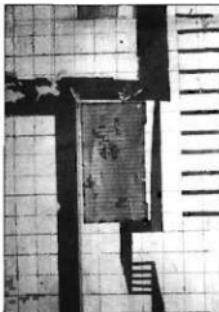
3 御城内惣問数 一冊

昭和25年、国立史料館が松平家から取得した史料の一点で、右綴じにした和本で31枚にわたり城郭建造物及び石垣の名称、寸法、形態について記録してある。特に瓦塀覆、板塀覆の形態と長さ、狭間の種別と数量、路次、井戸屋形、各建物直近の石垣の高さ、法、横長（水平距離）が分明に記述してある。

明和三年（1766）に御破損方が書写したもの。前掲の両史料と数値がよく合致する。



竹内右兵衛書付
(中棊・太鼓櫓の項)



松江城縄張図
(大手之御門付近)



御城内惣問数
(中棊・南櫓の項)

【写真資料】

1. 天守閣写真

明治初年頃に写された天守閣の古写真である。管理が行き届かず屋根が朽ち果て下地が露出している。

明治27年(1894)に当時の県知事籠手安定は、松江城旧觀維持会を設立し、修理のための資金を広く募り、大修理工事を行った。昭和25年、文化財保護法の制定により、補助事業として同25年から30年にかけて総事業費53,755千円により全面解体修理が実施された。

2. 天守閣二之丸城郭写真

城郭建物の取り壊された明治8年以前の写真である。当時の三之丸前道路から写したもの。二之丸の石垣上に御月見櫓、南櫓、中櫓、御広間、本丸の武具櫓、門長屋、土橋、右側に番所が見える。

南櫓は東南から西北棟の入母屋造りの屋根、二階建てで、中櫓は、南北棟の入母屋造りの屋根、平屋建てである。

南櫓と中櫓を結ぶ塙は、南櫓寄りの一部で倒壊している。いずれも『松江城譜張図』他各種絵図と位置は合致している。

3. 天守閣二之丸三之丸写真

城郭建物の取り壊された明治8年以前の写真である。既に南櫓と中櫓を結ぶ塙が取り払われており2の写真より新しい段階である。

全体的に非常に鮮明な写真であり、南櫓は破風や蓮子窓、狹間の取り付けの具合、外壁の状況がよくわかる。中櫓も南櫓と同様に屋根や外壁など外観の状況が詳細にわかる。特に、石落とし施設が東南角と東北角に1カ所づつ設けてあることがよくわかる。この石落とし施設は、『御本丸二ノ御丸三之丸共三枚之内』に東南角に1カ所表現されている。



1. 天守閣写真

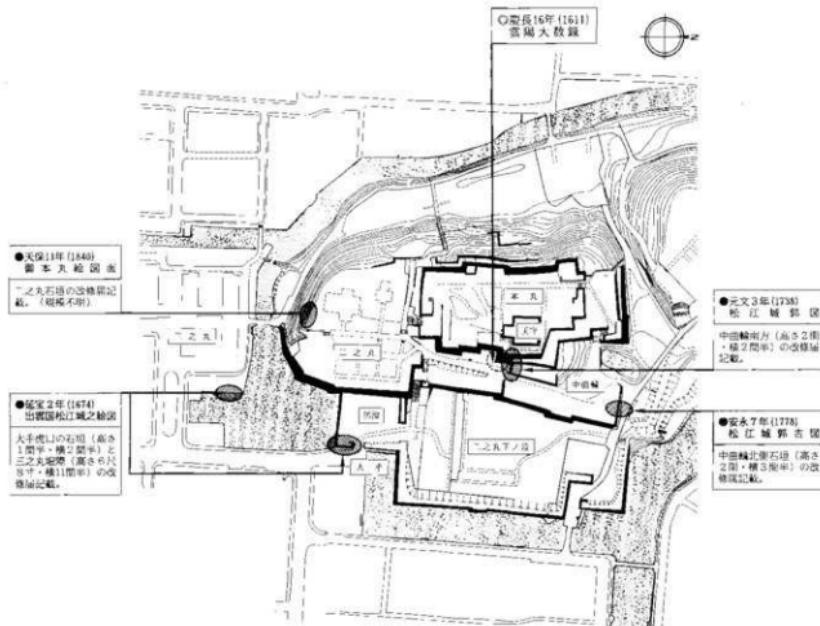


2. 天守閣二之丸城郭写真



3. 天守閣二之丸三之丸写真

《城郭絵図及び文献による石垣破損箇所》



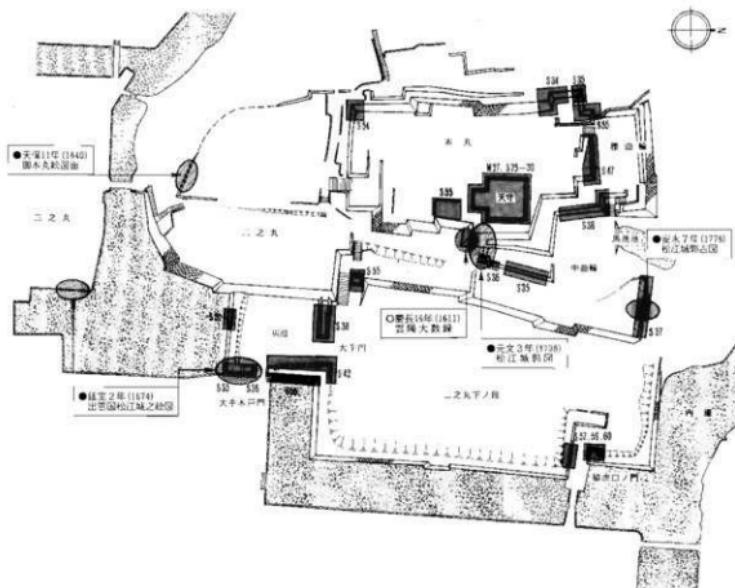
■城郭絵図による石垣修理箇所

- 延宝2年(1674)　　出雲國松江城之絵圖
- 元文3年(1738)　　松江城郭図
- 安永7年(1778)　　松江城郭古図
- 天保11年(1840)　　御本丸絵面

■文献による石垣修理箇所

- 慶長16年(1611)　　豊陽大数録

《石垣修理箇所》



■石垣保存修理箇所

●明治27年度及び昭和25~30年度事業

天守

- 乾ノ角箭倉西南角
- 乾ノ角箭倉北面、大手木戸門南側、天守東側
- 天守東側下、大手木戸門南角
- 北側管理員宅下
- 馬洗池西南、大手門西側
- 大手木戸門土壁、大手門東
- 天守北側
- 馬溜南側
- 本丸塀櫓他
- 本丸北門西、大手前北堀、二之丸ドノ段南西部、
- 本丸天守南側多聞跡
- 脇虎口ノ門跡北側の石垣
- 脇虎口ノ門跡東側の石垣、脇虎口ノ門跡
- 脇虎口ノ門跡

■城郭絵図による石垣修理箇所

- 延宝2年(1674) 出雲國松江城之絵図
- 元文3年(1738) 松江城郭圖
- 安永7年(1778) 松江城郭古圖
- 天保11年(1840) 御本丸絵図面

■文献による石垣修理箇所

- 慶長16年(1611) 雲陽大類録

4-2. 繩張による石垣の変遷

幕府に改修願として提出した絵図は城下絵図と異なり、詳細に繩張が明記している。この絵図の繩張図を年代順に並べることにより、石垣の改変が江戸中期に行われたことが予想された。

正保年間絵図と延宝2年の絵図は全くその石垣、堀、内部建物も同一である。元文3年の絵図以降、元治元年（1865年）までの絵図は同一の繩張であるが、前の絵図と大きく異なる個所が何点か見つけることができる。（以下に例を挙げる）

1. 騎虎口石垣、水ノ手門石垣、二之丸西之門、本丸一之門などの石垣形状が、元文以降ほとんどが喰違い石垣となる。
2. 本丸東側（天守閣下）石垣の折が、一折から二つ折りに変化する。
3. 中曲輪、西側石垣段が一段から三段に変化する。（正保年間絵図では、本丸北、腰曲輪への通路が本丸東側下を通る通路となり、石垣と堀で中曲輪と区画されているが、元文以降はその石垣を段にして通路は中曲輪を通って腰曲輪、水ノ手門へ入る形状になる）
4. 大手門から二之丸へ昇る階段が元文以降、喰違い石垣となり、またその途中に石垣台を設けるようになる。（この石垣には、堀尾氏の紋印がある。）

これ以外にも堀の規模、範囲が異なり、本丸西側下の後曲輪と外曲輪の郭範囲が明確になること、天守閣の形状、堀際に舟着門が設けられること、端手門を整備し通されるなど多くの改変が見られ、17世紀末頃、繩張の大きな改修行ったことを窺わせるものである。この改変の時期を確定するため17世紀末期頃（元禄5年頃）に製作された詳細な『松江城繩張図』を稽査すると、この時期には正保年間絵図と異なり後の繩張石垣に直され、よって改修の時期は延宝2年以後、元禄5年以前であったことが推測される。

これらに当たる正確な史料は現在確定できないが、今後の研究課題として検討されるべきであろう。

■現存石垣の築城時期

現存する石垣断面を測量した高さと、江戸期の絵図や明治初期の測量図に記載される石垣高的変遷から、現存石垣の築城時期の検討を行う。

絵図サンプルは、正保年間絵図（17世紀中頃）、松江城縄張図（17世紀末）、松江城測量図（19世紀末）及び現代である。サンプル史料については「石垣高」が明記してあり、かつ信憑性が高い史料とした。

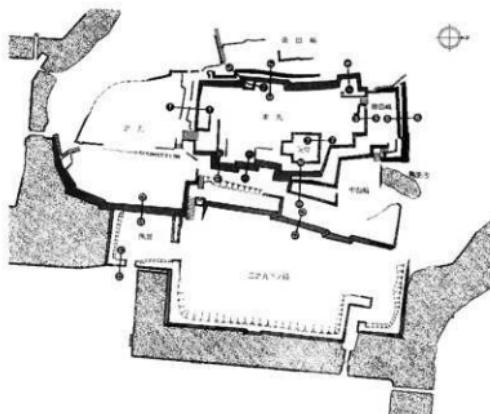
石垣高については、それぞれ絵図や測量図での高さの表記位置が異なる場合があり、また記載している史料としていない場合も所々に見られるが、代表的な石垣位置を選び、ほぼ同一位置に記載してある石垣高を比較した。

ここで時代によって高さが異なる石垣は、No.4：乾櫓台石垣、No.7：天守台石垣、No.8：本丸東側曲輪上石垣 No.11・12：大手虎口石垣、No.13：中曲輪石垣である。特に大きく変化するものはNo.12・13の石垣で、No.12 正保年間以後、No.13は元禄以後積み加えられたものと思われる。

また、石垣高はほとんど変化しないものは、No.1～3、No.5～6、No.9～10で本丸周りの石垣に片寄っている。

ただし、石垣高のみから改変または「積み直し」を決定することはほとんど不可能であり、石垣高が変化しても切・盛土造成により変化する場合もある。また、石垣高が同じでも、積み直されている可能性もある。

《石垣断面位置図》

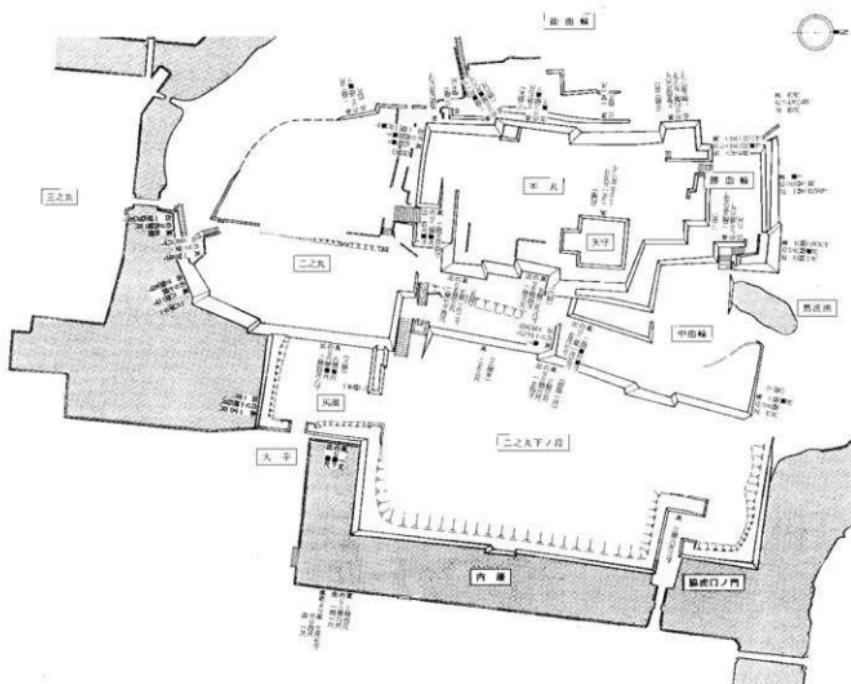


■石垣高的変遷（高さについては便用上、間・尺に寸法を統一した）

石垣	年代	正保年間松江圖（正保1～4年頃）	松江城縄張図（元禄5年頃）	松江城測量図（明治初期）	現況（平成4年）
No.1断面	四 間	四間二尺	—	—	一間五尺
No.2断面	—	二間八尺一寸	—	—	二間一尺
No.3断面	二間五尺	三間五尺	三間二尺	—	三間五尺
No.4断面	三間一尺	三間四尺六寸	五 間	—	—
No.5断面	—	二間二尺	—	—	二間二尺六寸
No.6断面	五 間	—	—	—	四間六尺
No.7断面	四 間	三間三尺五寸	—	—	一間五尺
No.8断面	二 間	一間二尺二寸	—	—	一間二尺
No.9断面	六 間	五間二尺八寸	—	—	五間一尺
No.10断面	五 間	五間二尺八寸	—	—	六 間
No.11断面	—	(一丈)	一間二尺	—	一 間
No.12断面	三 間	六間二尺	—	—	七 間
No.13断面	四間一尺	一間三尺	五間四尺六寸	—	五間四尺六寸

■印は、文字が正確に読み取れないもの () 内はその近辺の記載を書き入れたもの

《石垣規模読み取り図『松江城縄張図』元禄5年（1692）》



* () 内の数字は『出雲国松江城絵図』(正保1~4年頃)
に記載されている石垣高を示すものである。

《絵図による形状変更比較図》

■二之郭西之門

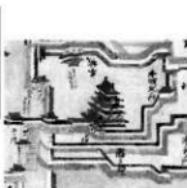


出雲国松江城之絵図
延宝2年（1674）



出雲国松江本城圖
元治元年（1865）

■本丸



出雲国松江城之絵図
延宝2年（1674）



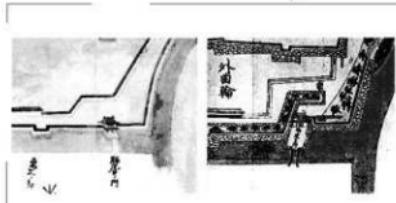
出雲国松江本城圖
元治元年（1865）

■舟着門



出雲国松江本城圖
元治元年（1865）

■鷹虎口ノ門

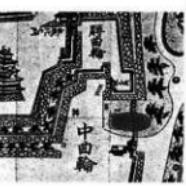


出雲国松江城之絵図
延宝2年（1674）

■水ノ手門



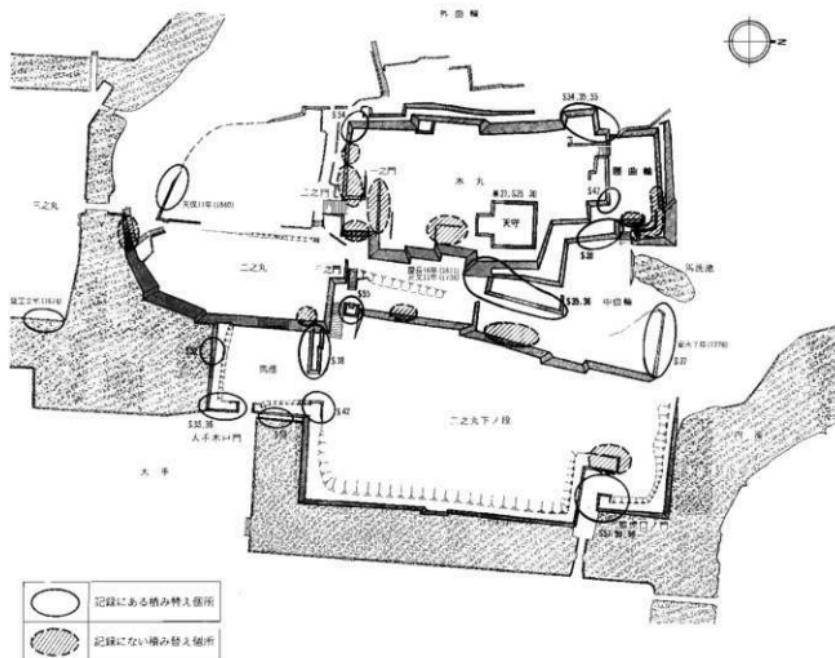
松江城正保年間絵図
正保1～4年頃（1644～47）



出雲国松江本城圖
元治元年（1865）

■石積み替え箇所

現地石積調査（目視）により、指摘した個所が極端に周囲の石積様相と異なり、後年積み替えたと考えられる箇所である。前史料で記録が残っている所と、明らかに利用石材が異なり積み替えを行っていて、記録に残っていない所（斜線部分）と図で示す。記録に残っていない積み替え箇所は、比較的小規模のもので、石垣上部の一部を積み替えている場合が多く、崩落などにより積み直されたものと思われる。なお、中曲輪北側の石垣での積み替え（昭和37年）は、いまだ北側に根石列を残すことから、道路等の問題で形状変更された可能性が高い。



《城郭各部の名称・寸法比較表》

松江城張図		竹内右兵衛書付			舊城内物間数		
No.	名 称	名 序	寸 法	事 項	名 称	寸 法	事 項
1	衛本丸	瓦斯	46間		瓦屋	46間半	御折檼より乾御垂流、3折垂 石垣高4間・法4間2尺5寸・ 根足1間5尺3寸
2	折檼	東之出し矢倉	3×6	上の重は2間半×5間半	御折檼	3×6	壁已の力(南家)2階作り石垣高6間1 尺・法6間3尺8寸・根足3間5寸
3	太門	太門	2×13	(多門)	御多門	2×13	御折檼より御武具格室 4尺連
4	太門武若丸	太門	3×11	1間は久倉に取付	御多門	3×10	御所持檼より御武具格室
5	武具格	袋已之角矢倉	5×8	上の重は4×6 縦はこ有	御武具格	5×8	巳午の方(南家)2階作り 石垣高5間1尺2寸・法5間3尺2寸・ 根足2間2尺4寸
6	太門武若丸	太門	3×14	1間は矢倉6間の内	御多門	3×14間半	御武具格上1ノ馬門迄、石垣高1間 4尺8寸・法1間5尺3寸・根足3尺5寸
7	御門	御門	3×5	下は御門、上は走り	一ノ馬門	3×4	裏の内 1間6尺御弓檼へ取付
8	弓檼	御弓に取付の 角矢倉	3×5	上の重は2間半×4間半 西に5尺×2間のこけら底有	御弓檼	3×5	午未の方(南西)2階作り 石垣高2間3尺2寸・法4間3尺2寸5 分・根足4尺4寸
9	太門	太門	2×12	下に当題、西方に一間四方のこけ ら底、東方に1×3間半のこけら底 2尺4寸ばかりの腕木にして、こけ ら底5間余り有り	御多門	2×12	御弓檼より西之御垂流石垣高4間・ 法4間半・根足2間1尺4寸
10	木申ノ角 庭(乞合)	3×5		上の重は2間半×4間半	百之御檼	3×5	未の方(南西)2階作り、石垣高4間5 尺9寸・法5間4尺・根足2間2尺8寸
11	太門武若丸	太門	3×16間2尺	中東の方へたわみ有			
12	鐵錠檼	西ノ室破風矢 倉	4×5	上の重は3×4、西に3尺×2間の唐 破風仕作し有	御鐵錠檼	4×5	申の方(西面)2階作り、西の室唐破 風石垣高3間4尺6寸・法3間3尺8 寸・根足1間5寸
13	太門武若丸	太門	2間半×14	差を折太門と言う	御城多門	2間半×11間	御鐵錠檼より乾御垂流、石垣高2間 6尺・法3間7寸・根足1間5寸
14	太門武若丸	太門	2間半×11	前の太門とのとりあわせに1間	御城多門	2間半×3間5 尺と10間	吸込
15	太門武若丸	太門	3×19間1尺 5寸		御城多門	3×19 4間半×3	吸込
16	御下ふみだん	1×2尺6寸判					
17	太門	ひつ太門	2×4間半 (虚)				
18	庭下	2×4尺東1間		東方に1間四方のこけら底有	庭下	1間	
19	鏡檼	乾ノ角箭食	3×5	上の重は2×4間半、東の角より已 角に當て根立つ	御乾檼	3×4間5尺	庚未の方(北西)2階作り 石垣高3間4尺5寸・法4間2尺5寸 根足1間5寸3寸
20		庭下(築)	2×2間半 北3		御多門	2×2間1尺	乾御垂流より北之御弓檼
21	太門武若丸	太門	3×6				
22	御門	太門	3×14間半	下に内在、西より3間東へよりで4 両手の門也		3×26	御門共、扉の内1間5寸
23	太門武若丸	太門	3×6				
24		御廻塀・家・ 御台所		(今はなし)ただし、御台所の記載 はあり5×9間、3尺に2間半の疊有、 この他壁・庭下等について記載有	御鐵錠方所	5×9	目板瓦生根
					間出会所	1×2×4間半	
					瓦屋	2ヶ所	4間 内路次1つ
					壁由輪		御乾檼下埋門より水ノ手門迄
					瓦附		

竹内右兵衛書付				御城内施用箇			
No.	名 称	名 称	寸 法	事 項	名 称	寸 法	事 項
25	堀	3間半	西は志石垣にとりつく		折通し	65間半	水ノ手奥門より御折通櫻子塀
26	堀	20間1尺	橋、南北に				石垣高6間1尺2寸
27	堀	12間5尺	東西に				法6尺3寸2寸
28	堀	15間半	南北に				根足2間4尺4寸
29	堀	4間5尺	東西に				
30	堀	10間4尺	南北に				
31	堀	1×5					
32	ありさり門 櫛・堀			(許造に載らない部分) 堀10間4 尺、1間余りありさり門は1丈2尺貯、 東西に厚1間余り棟東西	水ノ手御門	1間5尺×1間4尺	
33	堀	6間2尺	南北に		瓦堀	14間半	西 石垣高2間5尺
34	堀	9	東西に				法3間1尺2寸
35	堀	2	南北に				根足1間5尺
36	堀	23間1尺	東西に				東 石垣高2間6尺5寸
37	堀	13間2尺	南北に				法6尺7寸
38	奥表門ノ門	1	(櫛門)				根足1間5寸
39	堀	10	三の門見付東街の堀、南北に		一之丸		
40	堀	5	東西に		瓦堀	16間	一之門外升形 石垣高3間4尺5寸
41	堀	1間半	南北に				法3間6尺
42	太門	2×4間半	二の門北の太門		御多門	2×4間半	石垣高1間1尺2寸・法出先し
43	御門	2ノ門	2×3	南に4尺余りのくぐり有、但しこの 門は二ノ丸と後木丸の境	一之御門	2×3	屋の内
44	堀	4尺5寸×2	こけら柵				
45	堀	1	北の人門より				
46	御門	1丈1尺5寸×9尺	東西に、後山へ出山ノ御門、東に3 尺のくぐり有				
47	堀	1間4尺	門上の堀				
48	小堀	3尺5寸	門の裏に有				
49	堀	1間半	門柱より北へ5尺3寸出で、それよ り西へ東西に				
50	堀	9間半	南北に				
51	堀	6	二ノ丸南部との間の堀、東西に				
二ノ丸中							
1	長塗	3×19間半	機東西、こけらや、南に1間の堀、 西のより3間	御長塗	3×20	此共に2ヶ所	
2	堀	6×10間半	明前に取付				
3	長塗	2×11	こけらや、東西	御長塗	2×10	二之御門より西へ	
4	定御番所	2間半×12間半	北に3尺×10間半北、西より2間あけて 取付、南に3尺×9間北、西に角より1間 のて取付、こけらや、東西				
5	下御台所	下御台所	四口3半×2間半の堀、南北、袖根 模様、但し御作子と小退に成て右 下御台所より直広門への、南北、	御作事所	5×9間半		
6	堀下	4間半×3間半	こけら住し作事小屋底物置に成て右 に3尺×9間半の付下し、裏根こ けら、南北、床の方、西の9間半の 所、直広門えん築に取付	堀下	2間半×4	御作事所より側面斜取付	
7	式台	3×11		御玄間	3×11		
8	御腰間	8間半×12間半	東西、北に3尺×3間の堀、北西の 角に1間×1間半の雪見有	御腰間	7間半×12間半		
9	所れ持	3尺×29間	広門の南と東、式台の南東				
10	廊下	1間半×4間半	広門より當院へ、東西、東はろく壁根、2 間分、こけらや1間半の分は勢かんき 屋根、西にろく1間、北に1間四方の底	廊下	1間半×4間半	御腰間より御腰間取付	

伝承図		竹内右兵衛書付				御城内禁間数		
No	名称	名称	寸法	事項	名称	寸法	事項	
11	御書院	書院	8×12	棟南北に、こけらや	御書院	6×11	御縁通り式に 右原高1間2尺、法出無し 但し土下	
12	廊下	廊下	9尺×2	書院より表式への廊下、南北、こけらや				
13		表式	4×6	北に3尺×2間のひさし、西の角より取付、棟南北に、こけらや				
14		廊下	2×3	上御台所への、東西、こけらや				
15	上台所	上御台所	5×7	西に3尺×7間の附下有、南北に、東に3尺×1間半の底、こけらや	別廊下	2間半×3	御書院より御月見御脱取付	
					上台所	5×7	寛延3年 御宿定ニ面崩入	
					廊下	1×2	上台所よりエサ部屋	
					スサ部屋	3×4間半		
					幕下	1間半×2	スサ部屋より御書院に取付	
					板障	12	廊下より制作事務会所に取付、折通し、内路次2つ	
					板障	3	御画面の邊	
16	廊下	廊下	2間四方	御書院取付の、棟南北、奥台所へ1間の取付、書院の方へ西の角より2間、共に裏付				
17		廊下	1×1間半	書院より墨呂屋への、東西、書院の北の角より5間の明取台				
18		ひさし	1×4	風呂屋東の、南北				
19		附ふろや	2×5	南北、南1×2のひさし、東の1×2間半の所は、背脂、小便所、施し取付、こけらや				
20		便廊下	1×1間半	ふろやより月見の次の間に取付、棟北より表に				
21		廊下	2×3間半	月見の北の、東南に3尺×2のひさし、1層北の方は当階の内に入る、外に1段又庇あり、2層の齊間				
22		廊下	1間半×1	書院へ				
23	御月見櫓	月見矢倉	2間半×3	北に1×3のひさし、2階の次の南用櫓。下の重は東内西に折通し、1×9間半、東の方4、南4、西に1間半内の上戸への、下ははね戸掘、月見上の重は床に、北の1間は押込のたな	御月見御脱	3間半×4	御縁通り共に	
24		廊下	2×3尺	棟南北、瓦屋				
25		土蔵	2間半×3		御土蔵	2間半×3		
					透し板障	14間半	右原高1間2尺、法出無し	
					板障	19	透し板障より御月見御脱取付 内路次2つ	
					板障	14間半	御上戸より1台所迄、内路次1つ	
26	廊下橋	合21 北の口萬利 御月見御脱 行方不明へ16間半	1×21	一の丸より三の丸へ渡る。扉の内側片扉横、末門に1×2尺のかんき	御面下樋	1尺×26尺5寸		
					登り御面下	7尺×20間半		
					板障	20間半	登り御廊下折通し 東 石垣高4間、法4間2尺 根足1間4尺5寸 西 石垣高4間5尺5寸、法1間6尺 根足3尺	
					達廊	4尺2寸×26間半	御廊下橋より御廊下へ取付	
					板障	17	波打より取付	
					板障	37間半	右より御上戸取付、内路次2つか 石垣高1間半、南北	
					屏風板障	177	御土蔵より御板障、折6つ 内戸より裏門より南へ 高2間2尺5寸、根足4尺	
					石垣	29		

松江高張岡		竹内右兵衛書状				御城内總間数		
No.	名 称	名 称	寸 法	事 項	名 称	寸 法	学 项	
27	南牆	武具矢倉	下は4間半×5 上は3間半×4	二の丸の分、取扱より已に、瓦葉板	西之御門	2×2間半	内塗板附9間4尺4寸、石垣高2間半	
		-			懸板附	30	西之御門外、折廻	
28	中牆	矢倉	3×6	椎南北に	南牆	4×5	2層作り、石垣高6間2尺、法7間半 根足3尺5寸	
29		当隱	5尺×11丈	やう北に、2つに成、椎南北、けらや 桺より來へ、瓦屋、西に1×2の こけらひさし	板附	14間半	南牆通し易窓、内路次1つ	
30	太鼓櫓	太鼓櫓くら	3×6		瓦屋	5	板附より御廊下へ取付	
31		門の東の壁ぐら	3×5間2尺	東面に、この東より南へ6、北は3、 南のつまは3間半、かわらや、南に 1×3のこけらひさし	中牆	3×6	石垣は太鼓櫓に同じ	
32		太門	1丈4尺×8尺5寸	門柱2尺4寸、あつ1尺2寸、桺東西 瓦葉板	人頭櫓	3×6	石垣高6間2尺5寸、法6間6尺、 根足2尺4寸8寸	
33		方立	4尺2寸	叫より長要堂の間、内に4尺2寸 のくぐり、方立共1尺2寸	定番所	3×11	三之海門取付、軒廻し (北) 石垣高1尺8寸、(東) 石垣高2 間1尺 根足3尺2寸	
34		塀	8尺2寸	叫より内へ、4尺7寸の屋根、瓦塀				
35		平危門	9尺6寸	広間の東				
36		こけらや	2×2間半	井筒1×1間半、龜甲もあり	井上屋形	2間半×3	御作事所より廣間近、漆き石垣 高10間1尺	
37		下雪道	5尺×1丈	太鼓屋くら西				
38		二切丸小塀	60間1尺5寸	<ul style="list-style-type: none"> ・局部の東の角より南への壁、5間 ・同塀南より取付東へ折、2間 ・右の壁東の方より取付南へ13間、 意(絶)長の内にて開西へある ・右の壁南より取付東へ2間、長の内 にて1尺南へある ・右の壁東より取付南へ4間、長の内 にて小間比2尺へある ・右の壁南より取付、腰口の角へ1間 ・右の壁屋上より取付、米申へふり取 付1間 ・右の壁南より取付、引戸へふ り2間)1間 ・右の壁東より取付、引戸への壁1間 ・右の壁南より取付、浅井に當て4間 ・右の壁南の方より取付、東への壁1間 ・右の壁東より取付、米申へ當て1間 ・右の壁東より取付、腰口に當て1間 ・右の壁屋上より取付、東へ1間 ・右の壁東より取付、子井より年内當 て1間 ・右の壁東より取付、腰口東方に當て 3間4尺 ・右の戸はより取付、子井に當て1間 ・右の子井より半丈へ當て1間 ・右の南より西戸に當て4間半 ・右の東より子井に當て1間 ・右の東より子井に當て1間 ・右の南より取付、西戸にて當て5間 にて候る。これより先是南へ2筋、東 へ1筋、北へ1筋の取付有 				
39		塀	1間半	片見西の櫻より取付西への				
40		壁	5間5尺 2間	西の月より取付北へ 北より取付東へ 戸籠か所				

松江城張図		竹内右兵衛書式			御城内壁間数		
No.	名 称	名 称	寸 法	事 項	名 称	寸 法	事 項
41	塀			・東より已に当て ・辰巳にあて ・卯へ當 ・辰戌に当て ・亥巳に當 ・子卯、申酉に當て			
42	塀	1間5尺 6間		月見辰巳の角より取付南へ 東へ 何れも角柱に取付、かねの手す。1 間5尺の内に内門有			
43	塀	13間半		吉内辰巳の角より取付、東へ1間、 南へ9間、西へ1間、北へ4間。 内門前1か所、いづれも通子塀			
44	塀	9		下の段月見南の通、東四面開、南へ6間			
45	塀	20間2尺		南の外へ重疊より、子午に当て3間 半家へ1間2尺、正午に当て15間半	瓦垣	20間半	中棟より南標造、石垣は太鼓棟に 同じ
46	塀	23		京の内裏くら取付北へ	瓦垣	23	太鼓棟跡中標造、石垣は太鼓棟に同じ
47	塀	6間1尺		式台辰巳の角柱より取付東へ、重 門丸の附の附、内際	板解	6	屋重御門取付、□櫻屋根 屋の内3尺、塗邊檼棚5間
48	塀	2		中央北の雪籠前に北面に			
49	塀	11		太鼓垣ぐら改変の角柱より取付西へ	瓦垣	10間か	定番所2)太鼓枠底、内板扉9間5尺
50	塀	8間半、1間1尺		中通の標、東西、折北へ、東は太 鼓やくらの庇に取付			
51	塀	1		門の左門、東の角柱跡取付南へ			
52	塀	7間半、5間 2間半		垂木より取付改変の御門。式たて改 変の角より取付北へ、番所腰門の角へ	板解	18間2尺	二ノ新門脇に取付 外に哥御記内1つ 宝善3年瓦屋根に成る
53	塀	2間半		下馬所改変の角柱より取付番 所志の、南北			
54	塀	13間半		扇門の左門辰巳の角柱より取付南 へ、但し3分半は少し高	板解	12間	スサ部屋取付 外に哥御記内門1つ 寛延5年中11月瓦屋根に成る
55	塀	9		下御台所未中ノ角柱より取付西へ			
56	塀	5		内に立、未中ノ角柱より西へ1間、 南へ4間			
57	塀	7間半		上御台所より御ふらやへ取付、 之は御台所、未中ノ角柱より取 付、東はふらや改変の角柱に取付			
御本丸二丸アノ段 1 別門		大手ノ質門	3間半×8	2重也、純はこ者	中廊、外廊 南懸門	4×8	2層作り
2	—	下雪籠・制	1間半	岡所東の方、かねのてこ有			
3	—	小人部屋	2×8	瓦ふき			
4	—	源藏内所	2間半×12	南に5尺×5の底、北に1×3の底、 北に1間半×2の底、2×2の底、3 尺×3の底	中人長屋	2×11間半	籠板幕14間半
5	—	中門	2間半×3	南へ			
6	—	中門	2×3間半	北に			
7	—	瓦ふき	1間半×4間半	西所西に			
8	—	下落盤	2間四方	雪籠2つ こけら屋根60坪、瓦ふき屋根10坪 合5勾、制28間2尺、32引5尺			
9	別藏	米藏	2間半×42	東西に、北に1×25間半の底、西よ り4間半引て取付、1×5間半の底、 東より3脚半引て取付、底はこけら	米藏(南御藏)	2間半×42間半	
10	—	米藏	2間半×27	南北に、西方に1×27の底有	米藏(東御藏)	2間半×27	
11	—	金所	3×3間半	東に1間四方の中門共に	金所	2間半	宝善5月修復
12	—	下雪籠		向所わきに2つ	金所	2×5	斗家?2×3、弁戸4つ

松江城表図		各内兵衛書付			御内惣間数		
No.	名 称	名 称	寸 法	事 項	名 称	寸 法	事 項
13	堀	-	11間2尺	同所近邊に	-	-	-
14	御城	-	-	-	-	-	-
15	御城	-	-	東の方に1間の隙有(2つの城の間)	-	-	-
16	堀	33間	-	御城と萩田表長屋の堀、東西に	坂塀	51	北之長屋より眞木御城の境
17	萩田表長屋	萩田表長屋	3×22	同内かわにては北に1間の延有、北 は18間の内には1男令り延有。こ の長屋は坂上に當て棟立	北ノ坂長屋	3×37	次邊し 同所内眞木長屋3×7、井上1つ
		-	-	-	中側門	2間半	-
		-	-	-	板塀	2	-
		-	-	-	新殿屋敷	3×7	-
		-	-	-	玄関	2×7間半	-
		-	-	-	台所	3×4間半	-
		-	-	-	厩	2×3	-
		-	-	-	薪部庫	1間半×4	-
		-	-	-	板塀	32間半	内路次4つ
		-	-	-	板塀	2間半	-
		-	-	-	井土	-	新殿屋敷場、3つ
18	堀	27	-	長屋より東までの外、内15間4尺には 南北に、南の方は坂立子の角柱に 坂立、11間半は京西に立つ	坂塀	30	北之長屋より御米庵込取付 折通し、内路次2つ
19	堀	13	-	長屋米申の角柱より取付南へ、南北	-	-	-
20	堀	2尺半	-	長屋の東の小門内半すみ1間2尺を	-	-	-
21	腰門	3×7	2丈	-	-	-	-
22	下當塀	-	-	同所角に在	-	-	-
23	きりきり御門 番人居所	3×8	丸ふき	-	きりきり御門	1間半	-
24	番人居所	1	-	さりさり御門番人居所の跡	30番所	2間半×5	-
25	堀	7尺	-	同所西つらに北の方に	スサ部屋	1間半×3	-
26	堀	3間半	-	さりさり御門の左右に	板塀	3	きりきり御門南接
27	堀	7尺5寸	-	御門柱半すみ	竹垣(高池之丸)	8	瀬之内東西8間、南北17間半、市 側石垣高2間
28	堀	1間半	-	同所窓の中に在て、薄・附共に	竹垣	11	2ヶ所
	-	-	-	-	井土塀形	6尺×7尺	深さ 石垣高4間2尺
29	堀	-	-	卷入いの北、高石垣の跡 其北より南に2間半、堀役に當て 18間2尺、東より南北余當て21間4 尺、東より東へ當て1間2尺、東よ り西へ10間、東より西へ1間2尺、 西より南へ23間、南より西へ12間 半、右22間斯所のはして1間半12 と内裡へ入って取付、南へ36間4尺 東へ1間4尺、東より南へ1間2尺、 南にて西へ1筋で留る、右36間闇、 南の角より1間2尺、北へよって取 付、西へ13間2尺	坂塀	22間半	三之表内外坂口引形沿、内路次1つ、 石垣高2間6尺、法出無し
	-	-	-	-	瓦塀	35	升形より御所待機室、石垣高3間 1尺、法3間4尺5寸、根足1尺
	-	-	-	-	瓦塀	91	御所待機室下よりさりさり御門志 空堀高2尺、東側壁出し、南北堵 に成る、石垣高6尺1尺、法3間3尺2 寸、根足1尺1寸
	-	-	-	-	台石垣	46間4尺5寸	御所待機室下よりさりさり御門志 空堀高2尺、法2間3尺、根足6尺
	-	-	-	-	合石垣	30	御所待機室下よりさりさり御門志 空堀高2尺半、法2間5尺、根足6尺
30	堀	14間半	-	大手御門番申の角柱より取付西へ	瓦塀	13	南窓門より太縄手千石、石垣高3間2尺、 法3間4尺、根足1尺、合石垣11要
31	堀	26間半	-	同所前の橋形廻、東西	瓦塀	52間半	大手御門取付、石垣高1間5尺1寸 法2間3尺、根足3尺5寸
32	堀	8間半	-	右の裏の方より取付北へ	-	-	-
	-	2	-	北より西へ折	井戸	2つ、内1つ櫛形有	-
33	木戸門	2	-	柱すみ、左右に2間の柵	大手橋廻門	2	-
34	堀	2、1、 16	-	木戸門北の柵東西、 右の東より取付、大手ノ門東南往 より4間案へより取付	-	-	-

松江城祭器		竹内右兵衛寄付			御城内蔵間数		
No.	名 称	名 称	寸 法	事 項	名 称	寸 法	裏 項
35	塀	塀	30間半	大手羽門辰巳の角柱より取付東右の櫻柱より取付 ・北へ36間半 ・東へ1間2尺の折有 ・東より取付北へ6間4尺 ・西へ1間2尺、折有 ・西より取付北へ37間4尺 ・北より東の街門迄の塀7間、街門辰巳の角柱に取付終る ・東の朝門未申の角柱より取付、 西へ7間2尺 ・西より取付北へ10間1尺の折 ・北より取付西へ3間半 ・西より取付南へ1間半にて終る	瓦塀	118	辰巳門より北之脇門迄 心垣高3間2尺 法3間4尺 横足1間1尺
36	塀	塀		右の隅門北奥の角柱より取付 ・東へ1間 ・東より取付北へ20間 ・北より取付西へ41間半。少し成 の方へ屈る ・西より取付北へ5間 ・北より取付辰巳に当り、39間5尺2寸 ・此内に折込6ヶ所有、先は新御屋 宇分塀			
37	塀	塀		右の塀より取付 ・未申に當て6間 ・南より取付辰巳に当り7間半 ・新御屋宇御門東の柱に取付街門2間 ・西の壁長附迄の間3間2尺			
38	塀	塀		木半より塀に當り棟立			
39	塀	塀					
40	新御屋敷之内 床ノ表長屋	3×15					

第5章 破損箇所の抽出

— 5-1. 破損原因の考察

— 5-2. 文献史料による考察

— 5-3. 石垣破損箇所の抽出

5-1. 破損原因の考察

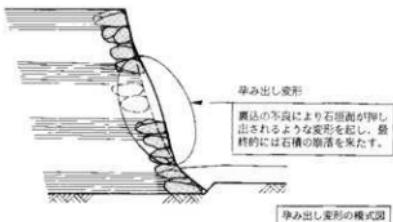
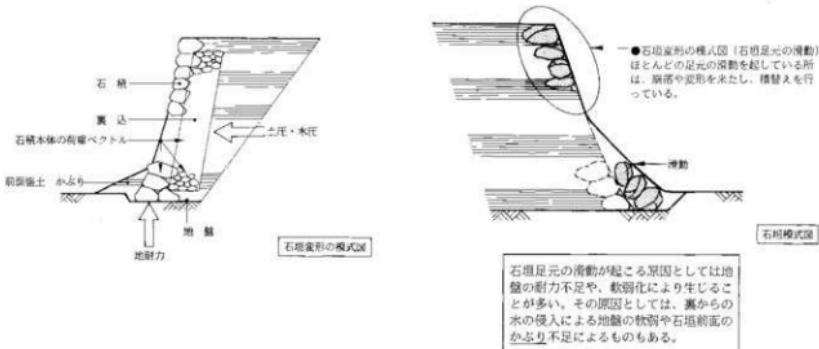
■石垣破損について

空石積の構造を持つ石垣の変形・破損は、大別して三つの構造体の変位によるものである。一が石積本体の問題、二が地盤の強弱・沈下による影響、三が石垣裏盛土性状の変形によるものである。逆に石垣構造自体が、二つの構造体のバランスによって成り立っているものである。石積施工が不良であれば、上部からの荷重の伝達（合端、二番、一番、動線の伝達）がうまくいかず、詰石や込石の欠落を来たし、積石の割れ（剪断）や欠損を起こす結果となる。

裏込石も同様で、透水性の問題、石積石垣との一体性と施工など、石垣への変形の要因となることはしばしばである。

地盤については、石垣根石からの接地面と地盤強度・地耐力との関係であり、より十分な地耐力がなければ沈下による変形を来すことになる。また、根石と地盤面との摩擦係数が小さく滑動や滑りを起こすことになる。

石垣裏盛土については、石垣自体の本来の目的が盛土の押さえ構造であるため、盛土性状が石垣破損の大きな原因となっている。盛土締固めが十分であれば、盛土の崩落（円滑すべり）は起こりにくくなり、逆に盛土性状が軟弱であれば、土の流動と水圧の増加により石積裏込の変形（孕みや崩壊）を起こす結果となる。



■松江城の石垣破損

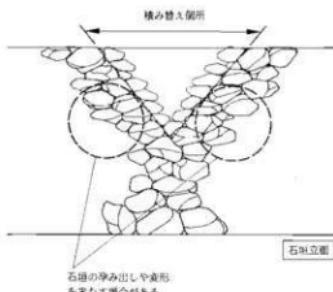
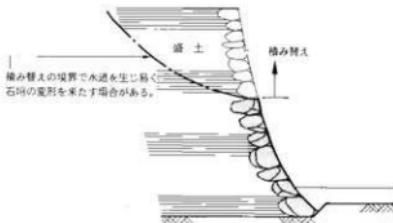
現存する石垣での破損性状は、右垣面の孕み出しなどの面変形を起こしているものや、樹木や樹木根による被害、構造的な起因によって変形しているものなど様々である。

ここでは石垣の破損状況により、その要因として構造的な原因からくるもの、樹木やその他自然的な要因での破損、そして人為的な要因として人家やその他後年の人為的な改変によって起きている破損をそれぞれ三つのタイプに分類して整理した。

《松江城跡石垣破損分類》



《積み替えた所による破損原因の考察》



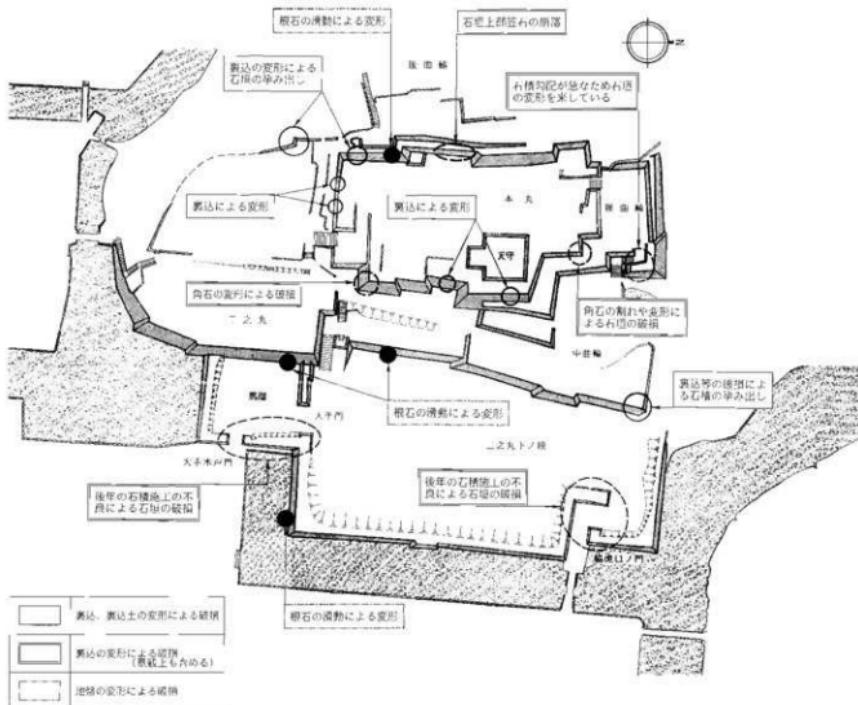
■構造的要因

構造的な石垣破損の要因としては、裏込や裏込盛土の変形による破損や地盤強度や滑動の問題及び石積自体の問題に分けられる。裏込や裏込盛土の変形は、地表面からの浸透水などにより石垣裏に変形を来たし、石垣の孕み出しや欠落を起こす場合である。

中曲輪の北曲輪石垣の孕み出し、西ノ門虎口石垣の変形、本丸東側・角石の変形や孕み出しが、これらの要因と考えられる。地盤との強度不足や滑動による変形は、不動沈下や石垣根石との摩擦強度不足による滑りを起こす場合の変形である。二之丸東側・馬溜など、すべて地盤との滑りにより、前面に根石を押し出すような変形を来たしている。

石積自体の問題としては、明治以後の積み替え石垣など、詰石の不足や石積の不良により不安定なものとなっており、大手門・東櫓石垣、水之手門石垣などに破損が見られる。

《右垣破損の分類》

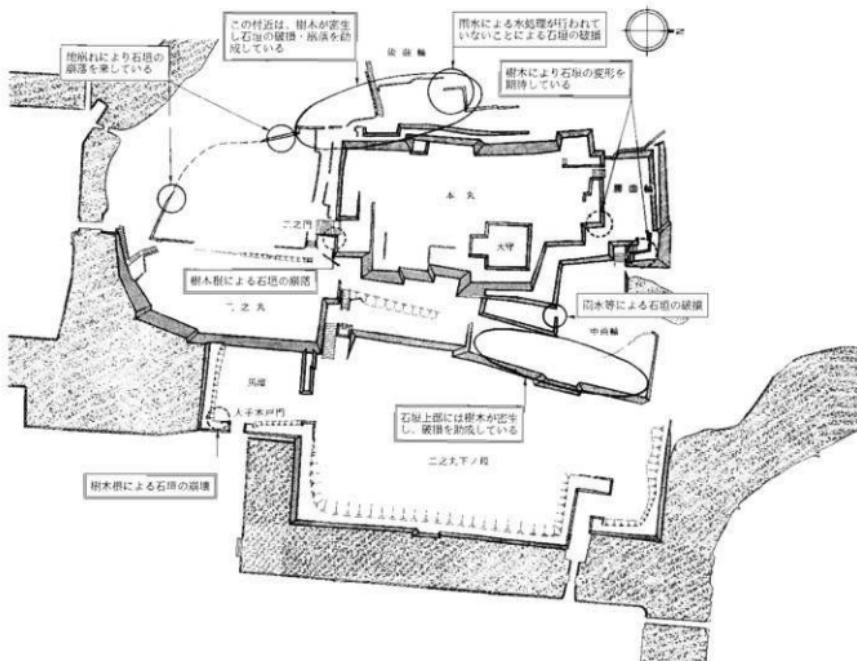


■自然的要因

自然的な石垣破損の要因は、地崩れによる石垣の崩落、同様に地崩れの要因となっている水処理の問題、それ以外には樹木及び樹木根による石垣破損があげられる。

石垣の地山や上部盛土が雨水の浸透により地崩れして、石積自体の破損を起こしている箇所が二之丸南側の石垣や、本丸北側・後曲輪の石垣に多く見られる。特に二之丸南西・西虎口ノ門側の石垣破損が著しい。

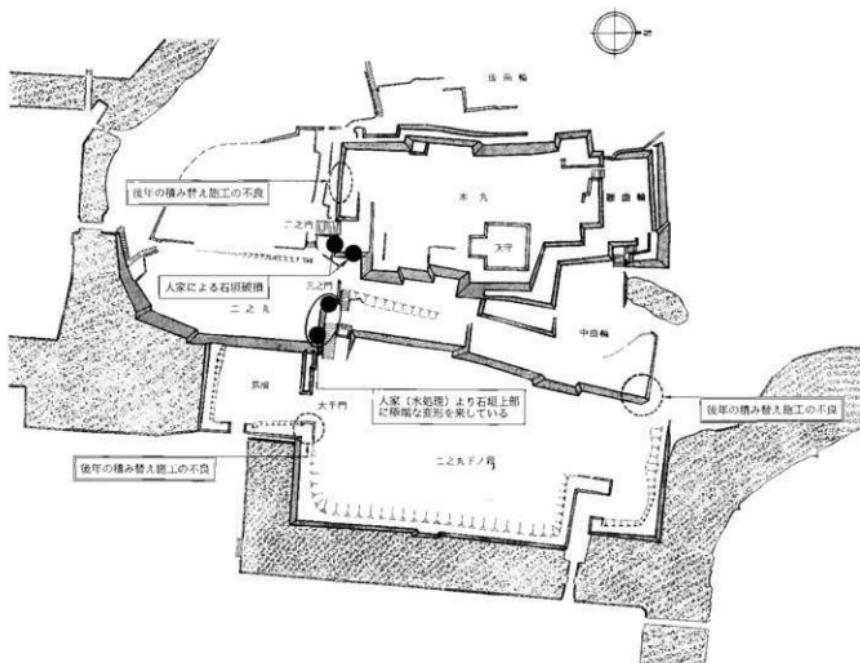
樹木や樹木根による破損は、本丸北側・後曲輪石垣、水ノ手門石垣、本丸北側・角石積の破損及び二之丸・二之門の茶店の所など、樹木や樹木根によって石積の変形を来たしている。また、中曲輪に密生する樹木は、雨水の浸透や盛土の軟弱化を来たし、将来、石垣の破損を助成するものと思われる。



■人為的要因

人為的な石垣破損の要因は、人家によるもの、または後年の積み直し修理によるものがあげられる。人家などによる破損の原因としては、排水処理の不備や建物建設時の石垣への設置状況や改変による破損が見られる。

最も破損の進んでいる個所は、二之丸側・茶店の石垣が極端に孕み出し、崩落が始まっている。後年の積み直しによる破損現象は、崩落などした石垣の一部を積み替えている箇所で、施工不良によって透水を來し、その周囲に孕み出しや石材の欠落を起こしている変形を言う。本丸南側・中央部の孕み出しや中曲輪北側の変形など、積み直しによる施工不良が破損の原因と考えられる。



5-2. 文献史料による考察

歴史史料に見る石垣崩壊・崩落などの破損原因は、ほとんどが大雨や洪水によるものと思われる。松江城跡関係年表からも窺えるように、大雨や洪水により幾度となく石垣の破壊・崩落の記録が遺る。(現存する絵図は、災害による石垣改修顛届が主である)

- 一般に、大雨や大風によって局部的に石垣が崩壊する場合、その崩壊の原因は、
 - 以前から孕み出しが進行していた石垣が、水圧などの応力が増加することで崩落する。
 - 地形の関係や地盤の沈下により、水道となっていた所に、大量の水が集まることにより石垣が崩壊する。
 - 石垣上部の樹木が大風により倒れたことにより、石垣の破損を来たす。
 - 大雨により石垣上部の土砂が流されることや、石垣下根固め部分が洗われることにより、地耐力や摩擦力を失い、石垣全体がすべるように倒れること。

などである。しかし、石垣の改修跡から記録に整合できる箇所はほんの一例で、記録に遺らない改修箇所が多く見られる。本丸石垣東・南北側など石材は同種のものを使ったとしても石積方法が後世に改変された跡が多分に見られ、これらの時代を選定するのは非常に困難である。

現状石積で記録に残らない破損形態で上部が積み直されている場所は、水道の問題や土砂、樹木の倒壊により、石垣崩壊を来たし、後半積み直しされたものである。また、石垣足元の滑動箇所はすべて石垣上半分が積み直されており、下部石垣の滑動に伴い上部石垣が崩落したものと思われる。

一方では、近年の石垣修理（大手門、大手櫓門石垣、木ノ手門石垣、中曲輪北側石垣）など石垣の変形が見られるのは、明治時代以後部分的な石垣の消失や上部建物の撤去より、石垣の平面形や断面が不安定となっていることによるものである。これらの改修は、明治廃城以後なくなってしまった往時の石垣規模を復旧することが必要である。



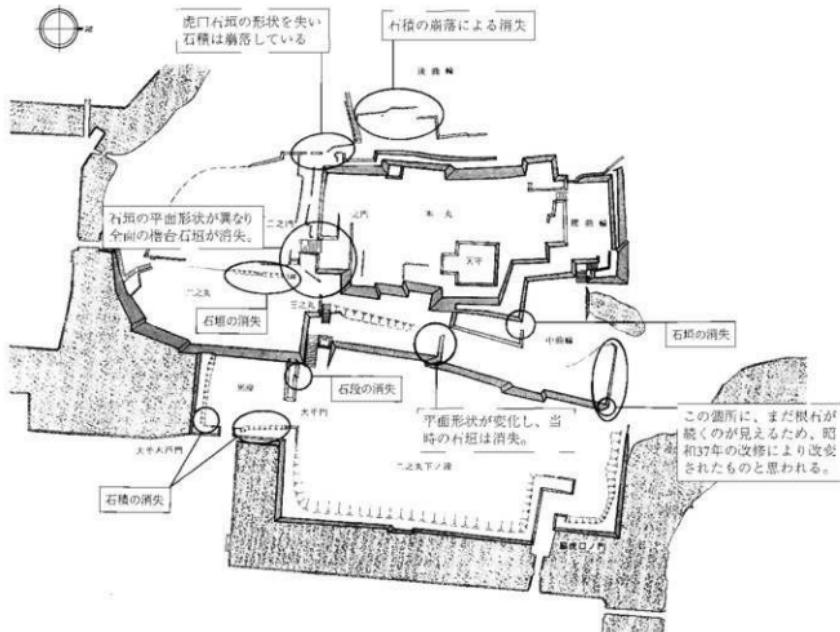
石垣内部から検出された江戸期の石垣
(大手門取付石垣)



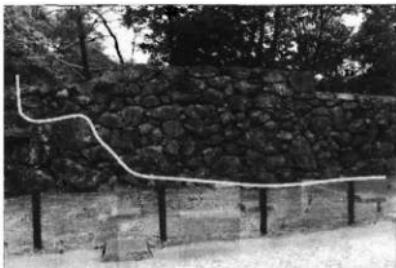
調査検出した石垣階段
(大手門取付石垣)

■石垣改変の抽出（現地調査）

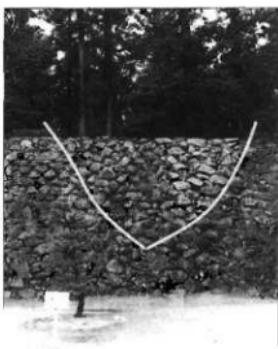
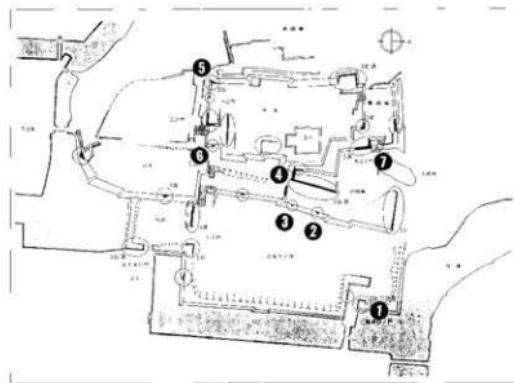
松江城現況石垣については、明治廃城以後大きな改変を受けていると思われる。江戸末期の絵図・明治初期の測量図から現況と比較し、消失及び形状が変更されているものを抽出した。ただし、抽出箇所は、平面的な変更のみを抽出した。



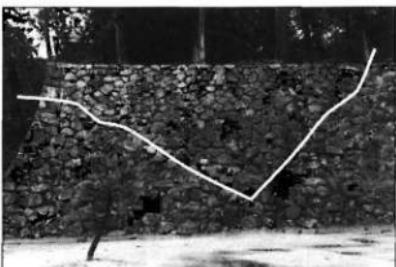
《石積み替え箇所写真》



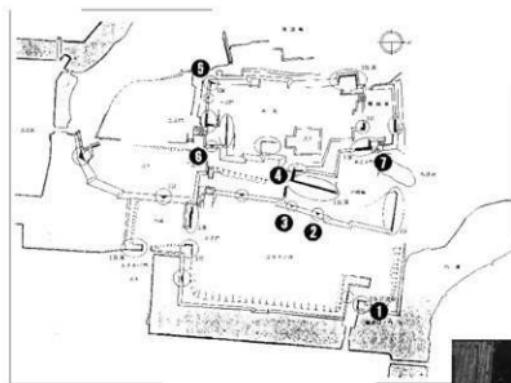
① 虎口ノ門石垣



② 中曲輪下段石垣



③ 中曲輪下段石垣



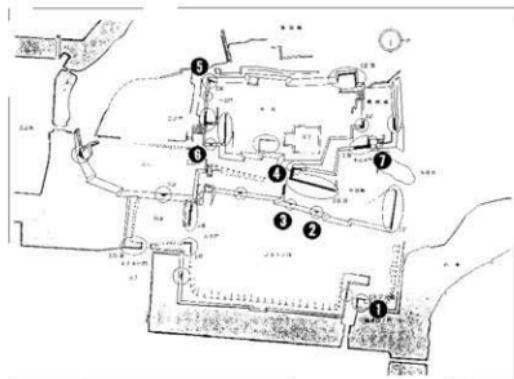
④中曲輪中段石垣



⑤二之郭西之門付近石垣



⑥二之門三之門付近石垣



⑦水ノ手門虎口

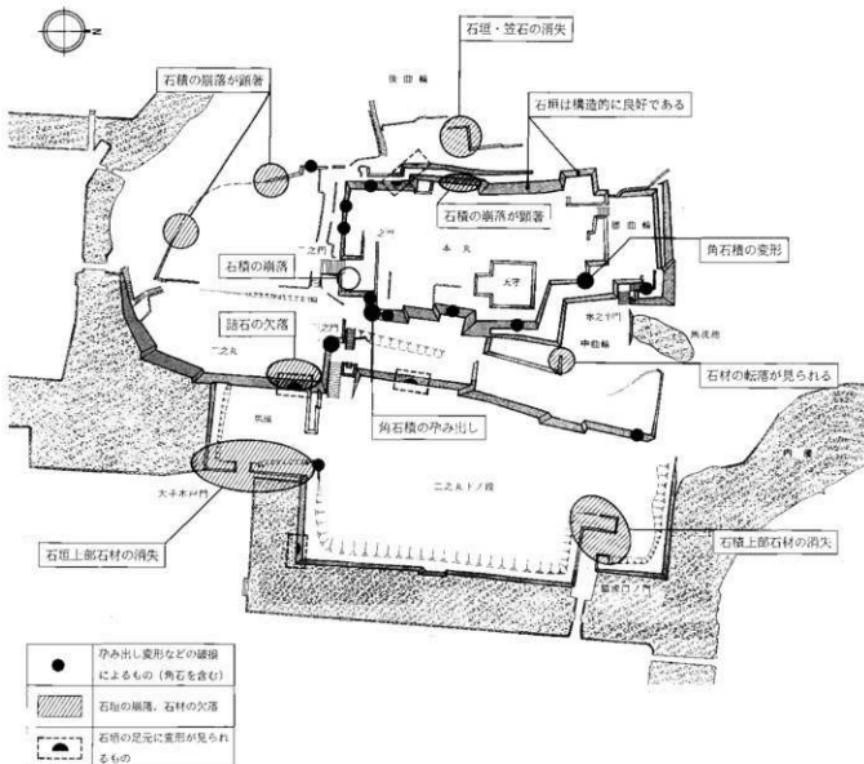


⑥水ノ手門虎口

5-3. 石垣破損箇所の抽出

松江城現況石垣での構造的な破損変形は、大きく三つのタイプに分けられる。

- 1) 石垣面の孕み出し等の面的破損変形。
- 2) 石垣足元付近の前面に押し出すような破損変形。
- 3) 石積上部の石材や、地盤破損による崩落が見られるところ。



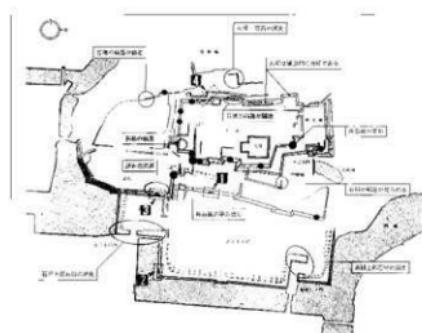
《石垣破損箇所写真：孕み出し変形》



①角石の変形・割れ



②石垣の孕み出し

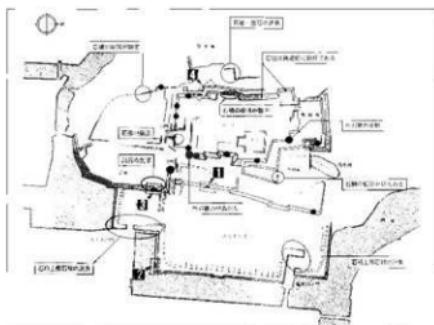


③石垣の孕み出し変形



④石垣の孕み出し変形

〈石垣破損箇所写真：石垣足元の変形〉



①中曲輪下段石垣



②内濠石垣

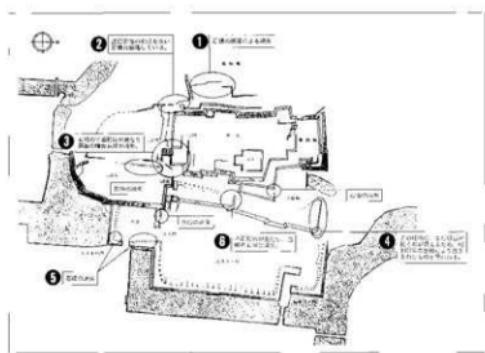


③馬溜石垣



④本丸東側石垣

《石垣改変の抽出写真》



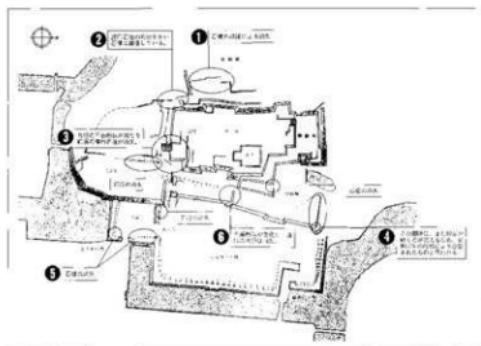
①石垣の崩落



②虎口石垣の崩落



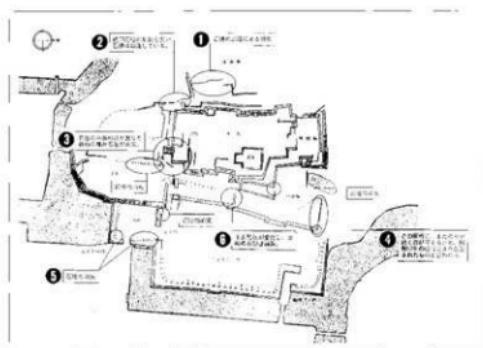
③門跡の改変



④石垣の改悪



⑤門虎口石垣の改変



⑤石垣の消失



⑥石垣の改悪

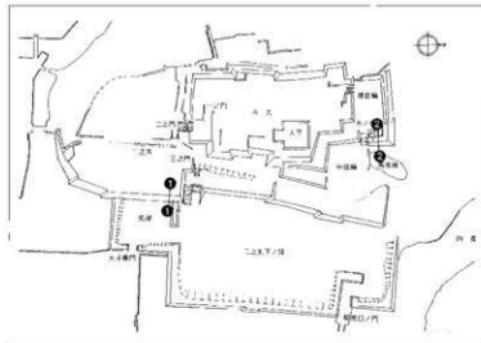


⑦石垣の消失と改変

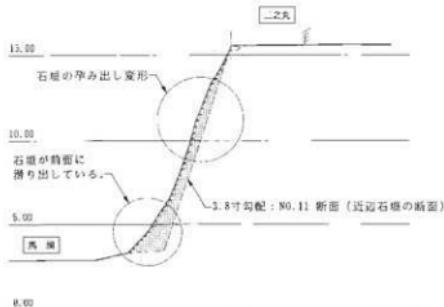
〈石垣破損箇所一覧表〉

箇所	石積様式	破損状況	破損原因
二之丸北側 茶店下石垣	打込接	・孕み出し変形が拡瀬で、石材の崩落が始まっている。 ・石垣が階段通路上であるため人的被害が大。	・茶店や周囲から集まる水により変形を起こしている。
中曲輪 北側石垣	タ	・石垣面の孕み出し変形、落石が起きている。	・周辺石垣が後年の積み替えや地形上、周囲の水が集まる。
本丸南西隅 武具櫓下石垣	*	・角石が変形により割れを生じ、石積の崩落の危険が大。	・角石積周囲の孕み出し変形により、角石中位の石材に応力が集中。
本丸 木手門下石垣	タ	・通路復石垣の変形が進んでいる。	・樹木根による破損と、前面石垣の倒れ込みによる影響。
二之丸 西側石垣	*	・後曲輪側、法面下に石垣石材の崩落を示している。	・法面地盤の崩落によるもので、雨水などにより助成。
二之丸下ノ段 東東隅石垣	*	・角石材の割れを示している。	・周囲の石垣変形（滑動）による影響で、角石中位に応力の集中を示している。
本丸 北東隅角石積	*	・樹木の生長により、角石積の変形を示している。	・樹木により、積石が押し出されている。
本丸東側 天守台下石垣	*	・石垣面中央部に孕み出し変形を起こしている。	・上部からの浸透水により嵌込の変形。
二之丸 二之門櫓台石垣(茶店下)	*	・角石積の変形と石積材の崩落が見られる。	・樹木根による破損と茶園建物による影響。
二之丸 西之門石垣 後曲輪石垣	*	・石垣面の孕み出しや崩落を起こし、石垣の形状を失っている。	・樹木や二之丸から集まる水による破損。
中曲輪 西側中段石垣	タ	・石垣面の孕み出しや上部からの崩落が始まっている。	・周囲からの水が集まり、上砂と共に石垣を破損。
大手門 東側石垣	タ	・北側石垣など孕み出しが大きい。	・後年の積み直しにより施工不良。
その他 馬道などの現石滑動 門後虎口石垣 その他	*	・石垣根石が前面に押し出された滑動の変形。 ・石積の積石の崩落を示している。 ・石垣上部の笠石の消失や結石の欠落が見られる。	・構造的には安定している。 ・後年の積み替えや石材の消失による。

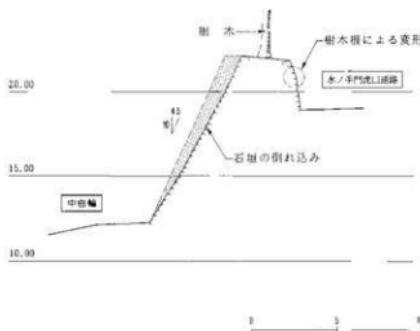
《石垣破損代表例》



①—②二之丸東石垣根石滑動と孕み出し変形
二之丸太鼓櫓下石垣付近の石垣は、根石が前面に滑動し上部石垣が後年積み直されている。(明治以後)根石の滑動は、現在比較的安定しているが、積み直された石垣との境界付近に、孕み出し変形を起こしている。積み替え時の施工不良により、水の浸透を来たし、石垣の変形に繋がっているものである。現在、石の欠落が始まっている。



③—④水ノ手門虎口石垣変形
中曲輪側の石垣は、虎口通路側に倒れ込み(平均的に4.5寸勾配であるものが、現在5.5寸内外になっている)、裏側ではそれによる変形と樹木根による石積の崩落が始まっている。



第6章 修理の検討と工事計画

— 6-1. 石垣修理の検討

6-2. 修理規模の検討

6-3. 石垣工事計画

6-1. 石垣修理の検討

松江城石垣の修理修復のための工事箇所の選定は、崩落の危険性や破損の著しい箇所だけではなく、史跡文化財としての石垣の歴史や時代性、その改変の過程など総合的に考慮して検討すべきである。崩落の危険性の大小からだけではなく、城郭期の石垣石積の様相と大きく異なるものや、明治廢城以後、城内の改変や破損によって消失したような石垣についても史料調査や発掘調査を含めた修理内容として抽出し、選定すべきである。

松江城現存石垣の修理については、城石垣としての史跡環境を守るために、単に石垣崩落の危険性についてのみ検討するのではなく、先に挙げた石垣の消失している箇所、また後年積み替えられてても城石垣にそぐわないものなど含めて検討されるべきである。

- ここでは、
 1) 石垣崩落の危険箇所について
 2) 石垣（江戸時代）が、消失している箇所
 3) 明治以降積み直され、景観にそぐわない石垣

以上3点について、その代表的な例を挙げ検討する。

1) 石垣崩落の危険箇所について

前述「石垣崩落の危険性について」で述べたように、その早急な対応が求められる箇所：二之丸北側茶店下石垣など6箇所、また変形が進む二之丸西側孕み出し部分など修理課題となる。

2) 石垣（江戸時代）が消失している箇所

明治廢城以後、松江城は多くの改変を受けている。廢城直後に測量された城郭図と、現存する石垣との比較でも明らかである。現在、消失している石垣は、大手木戸門、大手門付近の馬溜郭内側腰石垣、二之丸中央及び二之門付近石垣、中曲輪中段石垣及び二之丸西之門虎口石垣などである。特に、大手：馬溜郭の石垣や、二之丸西之門虎口石垣など整備公開の上でも早期に復原されるべきである。また、石垣すべてを失っていないとも、石垣上部笠石やそれに類する石材を消失している例は、城跡全域に多分に見られる。特に門石垣や本丸西側など改修が求められ、城石垣の景観が求められる。

3) 明治以降積み直され、景観にそぐわない石垣

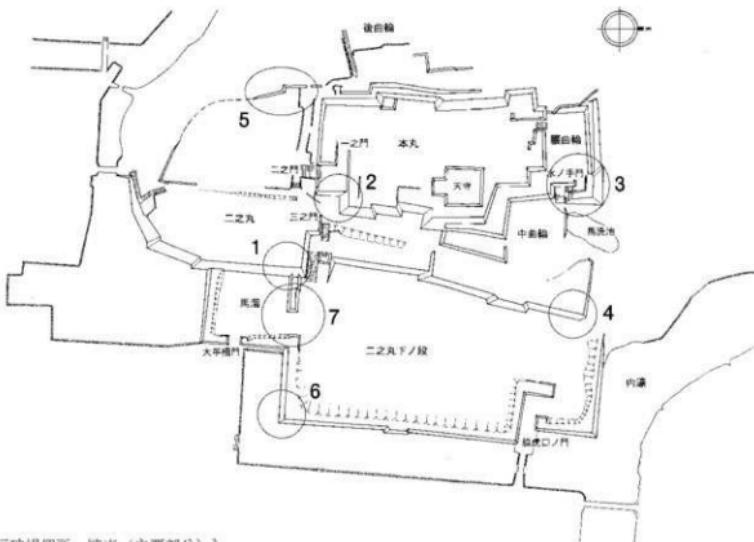
明治以後石垣及びその一部が積み直された箇所で、かつ利用石材が極端に変わっているものや、近年の積み方と異なる間接や谷積を施しているものについては改修が求められる。

本丸入り口となる一之門付近石垣、大手木戸門及び大手門石垣、二之丸下ノ段脇虎口ノ門石垣など改修の跡があり、また門石垣とはそぐわないものである。

以上、それぞれ抽出した石垣修理箇所は次表に示す。ただし、1) 石垣崩落の危険箇所の抽出は、現状目視による破損が著しい箇所に限定している。石垣自体の構造的な安定・不安定については、その構造的な応力計算による算出は、石積法や石材の力の程度、石垣の高さや面としての規模など、石積自体の特殊性から、ほとんど不可能であり、孕み出しや石材の割れ、欠損から著しい範囲についてのみ抽出している。2) 石垣が消失している箇所については、発掘調査によりその痕跡を調査・検出することを前提とする。3) 明治以降の積み直し箇所については、表面上明らかに江戸期の石積や石材加工に異なるもののみを選出しているものである。今後、石積や裏込めの調査、石材加工や加工道具の時代変遷を調査することにより、より詳細に検討されるべきである。加えて、先に示したように石垣の一部や部分（天端）のみ改変されたものについても文化財としての価値を保全・保護するために修理課題として検討すべきである。

《石垣崩落危険個所位置》

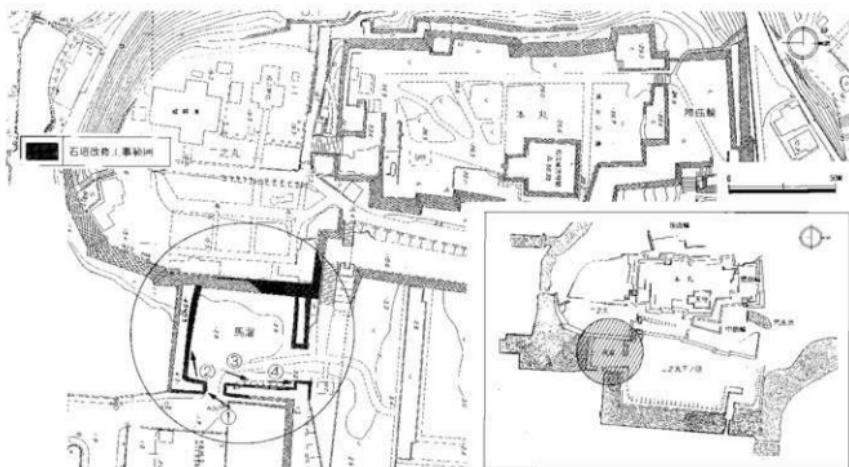
(特に石垣崩落の危険性の高い個所)



《石垣破損個所一覧表（主要部分）》

番号	箇 所	石垣様式	破 損 状 況	破 損 原 因	崩落による影響度
1	二ノ丸馬鹿橋内石垣	打込接	・孕み出し変形が施設で、石材の崩落が始まっている。	・茶店（旅宿業）や周囲から更なる水により変形を起こしている。 ・近年の防空壕の開掘。	・右垣が段丘上であるため、人的被害が大。
2	本丸東南隅石垣 (武見櫓下近)	+	・角石が変形により角を生じ、石材の崩落の危険性が大。	・角石積面の孕み出し変形により、角石中位の石材に応力が集中している。	・角石積中位の欠落が起こり、石垣の崩落につながる。 ・通路上有たる。
3	水ノ手門虎口石垣	+	・通路側右垣の変形が進んでいる。	・樹木根による破損と、前回石垣の倒れ込みによる影響。	・虎口通路前の崩落の危険性が大。
4	中曲輪石垣（北東）	タ	・石垣面の孕み出し変形、落石が起きている。	・周辺石垣が後年の積み替え及び地盤の変形によるもので、西側の園路の一帯が法下を通る。	・変形の規模が大きく、崩落は大規模になる可能性が大。
5	二之丸西側虎口石垣 (後曲輪側)	タ	・後曲輪側、法面下に石垣石材の崩落を来している。	・法面削壁の崩落によるもので、西側の園路の一帯が法下を通る。	
6	二之丸トノ段 東側石垣	+	・角石材の割れを来している。	・周囲の石垣変形（活動）による影響で、角石注意に応力の集中を来している。	
7	大手門向石垣	+	・北側石垣など、孕み出しが大きい。	・後年の積み直しによる施工不良。	

《入手門及び馬溜石垣改修計画-1》



①木戸櫓門門石垣：現状H=2.1mしかなく史料による石垣高さ1間5尺に根入れを含め約2尺以上積石が消失している。

②馬溜土羽（南側）：絵図で石垣に記載された石垣も全て消失している。（調査より土羽内部に右積横石を確認）



変形、崩落の危険
(後世の積直しの施工に原因あり)



③馬溜土羽（東側）



④大手門門石垣（東側）：石垣の高さは現状でH=3.4mしかなく、絵図で記載される3間3尺に約7尺足りない。